

しない事に聲明した以上、地方の事を氣にやんでも始まらぬ。英國が山西省あたりの煙草輸入に對して取つた態度も結局は英國が負けた。これは英國製煙草の小賣相場に附加税のあるのに對し山西當局へ八釜しく抗議したのに始まる。所が山西官憲は之にとり合はぬ爲め今以て附加税はその儘行はれ、その印紙の各シガレットに貼用されてゐるのでよく證明されてゐる。地方の事はいくら根氣を以つてしてもこの通りである。暴力を以つてするなどは時勢に合はぬと云ふ。却つて火の手を大きくするばかりである。自分は親しくこの閻錫山配下の太原の地方汾水のあたりから天龍山へと最近に巡遊を試みた。そして柳巷街目抜きを通りチンクウシヤン「晋谷香」の料理店の壁に墨色の鮮かな揭示の文字を讀んだ。英語で立派に左の如く五行に書かれてゐた。即ち、

The Student Movement  
is Not-Bolshevik

Not-Anti-Christian

Not-Anti-foreigner

But cry for Humanity.

「學生運動はボルセビツクの排斥運動でなく、又基督教反抗の爲めでもなければ外人排除の爲めでもない。全く人道擁護の爲めの叫びだ」

とかうある。閻錫山の膝元だけにこは面白く讀まれた。この千二百萬の人口と無限の地下の富とを有する山西省は平和の薫風吹きそよぐ理想の郷であるが、土地柄としてこの文字は實に意味深長に感ぜられた。閻督軍の秘書謝維楫君等と之に就き興味ある談話をかはしたのであつた。又今は大分塗り消されて了つたが、北京は長安大街の紅壁、中央公園あたりのそれを見るど、そのよく目につく所に、

「國民救國」

「絶交英日。救我國家。援助滬案。誓雪國耻」

北京第一英文學校 泣 告。

などここれも大字で立派に書てある。教唆的大文字であるが彼此考へて見ると今日の學生の意氣を見る上に興味のある材料となるのである。しかし外交部方面からの注意であるか、その

支那地方文化の情味



關稅會議開催前に其よく目立つ長安大街の分は塗り消されたのはよかつたが、景山後門あたりの念入りの文字はまだ墨色鮮かに紅壁に横書きされてゐるのが残つてゐる。

斯様な材料は支那の風靡式民衆現象であるからたいした氣に止めることも要らぬかも知れぬが。しかし民情、青年の空氣を見る上の重要な材料として取つておく可きものである。要するに北京の中央に國際會議の催されるに當つてはその討議せらるゝ協定事項の實効價値に就き自分分は之を地方の今日の實際に顧み、その例國並びに支那自身に在りても今少しく豫め調査を遂げおき、果して可能性のあるやなしやを十分確かめおくことが一層會議の決議を意義あらしめるものとなるではないかと云ふ事を考へるのである。

### 三十二 赤化思想を同化せんとする支那文化

支那は如何なる新しい思想が侵し來つても支那人自身は之を利用し同化するまで、あつて、支那の社會全體の者はたいして善くも悪くもならぬ。支那の革命の實體は先づ同じことであるやうに思はれる。

支那が露西亞の赤化侵畧の爲めに近來餘程悪くなつたと騒ぐものがある。武漢の赤化は事實である。しかし公平に云ふと支那の社會は思想的に露西亞から初めて之を學んで赤化の妙味を知ると云ふほどに幼稚なものではない。之を利用したり之を看板に使つて勞農系統の側から運動費の援助を受けるぐらゐのことはするであらう。これには噂以上に具體的の巧みな方法も行はれてゐる。けれどもこは標榜である。通りのよい看板は時代によく響くものであるから、之を使ふのは賢い。一般人の多く共鳴する所のものをかりた方が支那では都合がよろしい。

支那では國土全部を國有にする如きことはむづかしからう。然かし例の革命氣分で天下を風靡し權勢の中心を一朝にして破壊し覇を天下に稱する如きことは、既に王朝を二十五代も變へ上下三千年の間にその腕は實にまた冴えたものである。支那は世界で最も自由な國であり、何をして頭を抑へるものゝない國である。そしてそこには自ら天下を友とし天下を味方にして行く秘訣とコツとがある。孫文が、「建國方略」を書き支那四百餘州に之を流布し、各大學の教科書となし、その主義主張の支那全土に擴まるに至つたと云ふのも偶然でない。支那の社會ではその呼吸を呑み込んだ人物が稀に出る。それが風雲に乗じて廟堂に立つやうになる。支那



の社會はその實相の證明せる如く一方に文明の建設があるかと思ふと一方に破壊があり、之が常に互に循環して現はれて来る。その常に同じことが繰返し現はれることは歴史の教ふる如くである。而かもそのぶち壊はす力の偉大なことは吾人の想像の外である。

支那民族はかくして自ら文明の高潮を作り又自ら黄金時代を醸成し、そして自ら名譽ある支那文化のピラミッドを建設する。其間には希臘であれ、羅馬であれ、又亞拉比亞であれ、波斯であれ、印度であれ總ての文明思想を取入れる。人種的にも、藝術的にも、宗教的にも、風俗的にも之をとり入れてゐる。従つて言語の上などにもかなり之を多く取り入れてゐるとは、ワッタースの言語學論文中に驚く可きその豊富な材料が調べられてゐる。その他人種的に又政治的にも支那が外來のものを取入れ同化してゐることは、これ亦歴史の證するところで明かである。滿人にしても蒙古人にしても最初馬上で天下を取つてもいつとなく支那に同化せられ胡服をぬがされて支那服を着るやうになつた。北狄語を用ひてゐたのが支那語を話すやうに同化して了つた。食物も住居も亦それである。そして雜婚の結果は之を立派に漢族化して了つたのである。

露西亞の赤化思想に對しても初めは支那社會のうちには之にかぶれ鶉呑みにせんとするものもゐるであらう。併し必ずやその支那向きに化して了ふ。その消化せらるべきはよくこなされて無理のないものにして取り入れるにきまつてゐる。そして出來ないものは排除される。であるから、極端なところには行くまいと考へる。しかし本來が支那の事である支那式にはどの方向に何をし出すか判らぬ。たとひ支那式の革命をやるとしても看板は赤化屋の牌樓を建てるかも知れぬ。又赤化屋呼ばはりをすることも知れぬ。皮相の觀をなす評者はその牌樓なり看板なりを見て、共產の火の手かくの如しと叫ぶであらう。或は又學生たちは赤化屋になつて赤露白露の對立デモンストレーションをやるかも知れぬ。何をするか判らない。時の勢に乗るのである。

支那の大學のプロフェツサーたちに談話中申談の如くに、

「諸君は大分赤くなつてゐる方ではないかね。」

と云へば、かるく受け流して、

「イヤまだ灰色の方で、此の衣裳の色のやうに。」



と答へる。支那に赤化はたしかに這入つて來てゐるし、又今後も益々盛に這入り來たる大勢となつてゐる。山西の閻錫山督軍との對話中にも、この赤化の話に及んだことがある。即ち

「山西省には赤化運動の手はまだ這入つて居らないかね。」

との自分の問ひに對し督軍は、

「北京や上海からその方面の學生も時々は來るが。」

しかし我が省内の學生は産業立國を主にさせてゐる。」

「政治や思想の方面は取り合はないで居る次第であるからその方の心配はない。」

と明確な答へのうちにやゝ苦しきやうな氣分を顔色に漾はせてゐたやうであつた。

思ふに支那は大勢の上から云つて全體に赤化思想は恐れてゐない。古來いかなる思想でも受入れるゆとりがあり自由の態度があり、又其間物數寄も手傳つて居る。最近北京に居た時、自分は參議院の周肇祥氏と思想問題について問答をした。自分の方から初めに、

「露西亞のボルセヴキク思想は支那は恐れてゐないやうに思はれるがこれ如何に。」

と口を切つたのに對して、周氏は

「ボルセヴキク思想だつて少しも悪いと斷定する必要はなからう。」

「あれだけ、露西亞にひろまつてゐる思想ではないか。」

「支那では先づ之を取り入れて研究をして見る。健全で支那の社會の爲めにもなり民衆の幸福を進める要素のあるものなれば、これは大いに歡迎すべきものである。」

「若しそれに妨害となる要素があれば育たないで自然に亡び逝くまでのものだ。」

「恐らくさう恐れるべき程のものでもあるまいよ。」

日本の社會ではこれ迄のことは考へられてゐないであらう。こゝが自分の支那社會が共產思想を同化する態度を示してゐると主張する所以である。

上海の紡績騒ぎの當時、上海方面の大學は多く赤化思想の策源地からして糸が曳かれてゐたと云はれてゐた。又南京路事件の當時にも英字新聞などでは極力露西亞の魔手の延長だと書き立てゝゐた。又事實その間に飛躍をしてゐたロシア人某を上海で見たこともあつた。その他河南省鄭州開封あたりの赤化に努力せる赤露の連中の勞力は大したもので、その地方に繰り出されてゐる露人はあれだなどと、自分は京漢鐵路の彰德車站で兼てから聞いたこともある。その



特急火車にゐた佛人のインスペクターは云ふ。

「あゝしたロシア人が近來いくらでも開封に向かふ。」

「農村の愚民を相手に彼れ等は錢を興へて先づ歡心を得んことに努めて居る。」

「英佛米共に之には閉口してゐるわけだ。」

「日本は如何に、定めし同様の氣持ちでゐらるゝであらうと思ふ。」

と頗る昂奮した色を顔に泛べて語つてゐたのであつた。長髪のロシア人はふたりで共に隣室にゐたのであつたが、二人とも鄭州に下車するかと思つてゐたら漢口まで來たやうであつた。要するに思つたよりも又深く赤露の手は湖南湖北にも這入り込んでゐる。けれどもまた思つたよりも巧みに支那人は之を思想的に同化し利用してゐる。馮玉祥が時局に際し直ちに北京に露西亞の委員制の形式を採用しなかつたことなどもよほど考へてゐることと思ふ。支那としては相當考へて之を取り入れ赤化の爲めに吞まれてゐるほどの事は先づないと云ふことは意を強うするに足ることである。しかしまた若い青年たち、新たらしがり屋の新人の間には、隨分呑みのボルセウキク行動を演出するや保しがたい。何れ長い年月の間には自然と淘汰もされる

であらうが、今日のところ運動費後援など相俟つて隨分進んだ破壊的デモンストレーションもやり兼ねない。しかしこれが在來の民衆運動と相應呼して益々其力を得て行く傾を取りつゝある。支那の社會はいつでもその文化文明の破壊が相當の年代の後には實現せられる。それがこれら自らの手で行はれる。共産が這入れれば共産の方法を採つて之をやる。そしてあとは又その色彩を帯びた次ぎの新しい支那文化が民衆の間に再建せられて來るのであらうと思ふ。

### 三十三 宣傳の娛樂氣分

凡そ支那の宣傳には一種の娛樂氣分がある。群衆の間に生ずる陽氣な呑氣な情緒が之に漲ひ又一種の芝居じみた氣分も之にまじつてゐる。かの示威運動の如き矢張りそれである。悲壯な場面を見せることもあるが支那のデモンストレーションは多くは呑氣であつて陽氣に充ちゝてゐる支那の戰爭状態にも大抵似てゐるやうである。すべて之を日本流に考へるならば大變な違ひで、よほど柔か味を帯びてゐる。殊にかの示威運動の如きはあの最も甚だしかつた民國八年の排日事件のときでも、又その後の日貨抵制のときでもかれらの演出した行列そのものは甚



だ優暢なものであつた。

油断をして行列を突切らんとしたり、又その邊をうる付いて居たりするものは袋叩きにも合ふ。然かし全體の行列気分は大半日當が出てゐる爲めに稼いでゐる譯である。之に参加して居れば日に八十錢なり一塊錢なりにありつける。そして北方では高粱の莖を旗竿に白紙黄紙四角なのを貼り付け揚々と高く掲げ陽氣な聲で唄ひ乍ら衆人に撥を合はせつゝ行くのである。十町二十町三十町と支那里敷の六七里も長蛇の如きデモンストレーションを起こす。そしてその旗にはうまい文句を大書して敵視でもしてゐる者のやうに不倶戴天式の狂烈な氣分を漲らせる。それをそれ程各個人が心の根に思つてゐると見たら大まちがひである。從來毎年行はれた排日騒ぎで之を見ても支那人が深く根に持てる敵愾心の發露なるが如くに考へるならばそれは當らない。毎年その季節々々に年中行事の如く學生共が之を商賣的にくり返してゐるに過ぎぬ。その學生共は學校に席もおかず遊んでゐる高等游民が多い。それらの運動によつて簡易工業の會社なり某國會社なりそれ／＼の方面から運動費が出ると云はれてゐる。それによつて學生は集まり行列の役割は出来る。旗の材料の買集めからその文字の揮毫、揭示場の作製、城壁の大書も

それで出来る。

由來支那民族は昔から蘇秦、張儀の事を見ても判る通りその宣傳の術は手に入つたものである。排英排日何事であつても苟しくもそのたねにするものがあれば宣傳そのことが好きなのであるから道樂半分に之をやる。一時八釜しかつた旅順、大連の回收宣傳の如き何等外交文書にもなき嘘八百を陳べ立て巧言を用ひ之を毎夏大扇子に地圖入りで描き出し、涼風を夜間に呼びながら旅大の回收を四方山話にさせようとの趣向さへ案出されてゐたのである。恐らくこれ位巧みなる宣傳法はなかつたであらう。

旅大の原文を知らぬものには日本が支那に對して如何にも無理なことでも壓迫的にしてゐるかのやうな文章である。心ある支那識者の面子に思ひ合せここにはわざと其戲文の挿入を避けおきたい。しかし一般民衆は之を信じて心を動かされるものもないと限らぬ。或は又小學兒童に讀ませる讀本の中にも皮肉やら挑發的文辭やらをまぜて旅大の事をたねに頭是なき子供に日本に對する惡感を軽く叩き込んでゐる。或は民衆の最も多く集まれる北京の天橋路の市場その他淺草式の目ぬきの場所で今更日清戰爭ののぞき繪の興行をさせ、之によつて今頃日本に對



する悪感を挑発せんとしてゐるものもある。

これらの悪戯は必ずしもすべてが支那人自身の發意に出たものでなく、第三國の入れ智慧であらうとか費用がわきから出てゐるのだらうとか。あるまじき事を耳に挿むのであるが、要するに結果から云ふと支那人のやつてゐる宣傳は實に皆われながら感服させられる。不快の念を通りこして却つてその巧妙なる方法思ひつきに對して觀賞的に見とれる位である。つまり何れの宣傳にしてもそのデモンストレーションにしても陽氣な遊び半分の態度をして居るのを見れば誰しも腹は立たぬ。その皆面白がつて稼いでゐるさまは個人的に何等われ／＼に怨があつてやつてゐるのではないことを證明してゐるやうなものである。日本で之を考へると、一々個人々々の仕留民が支那人から鐵拳でも見舞はれてゐるかの如くに心配せらるゝもその間よほどのゆとりがあり鷹揚な處があるのである。

されば外交上の方面から此等の事實を明にし得た時は存外張り合抜けがして問題にもならぬ場合が多い。商店商會の破壊焼打による損害賠償の事は云ふを俟たぬが示威運動とは云へかくの如き、稼ぎ半分の行列仕立てには之に恐れを抱いたり取り合つたりする必要はない。こちら

に之がうは手を行く丈の宣傳法の出来ない限り、自然止まるのを待つ外はない。日貨でも必需品はどのやうな事があらうとも必ず用ひられて居るのである。あとの潮時を考へて國民性の研究でもしてゐるが賢明である。たゞこゝに自分共之を重大視せんとするはその宣傳示威運動の流行的現象によつて時代をかれら學生が作つて行くこと云ふことこれである。今日學生の存在はその社會的に宣傳行列をやること。労働問題のときでもいつでも宣傳の事になると其文字を知つてゐると云ふ點で宣傳の中心主體として重寶がられ、支那の社會現象の一つとして今日では立派な一つの主體の如き觀を呈し、そして之が政治的に又國際的に利用されるに至つた。支那現代の爲政者も外交家も之を利用して時局を自己に有利に廻轉せしめやうとするに至つた。一方に赤化に染まる學生の事を氣に病みながら、他方には之を敵に廻はしたくないとて之に援助を與へんとした事實さへもある。學生の方でも亦それと知りつゝ之を又利用してゐるのである。政治家の間には之を利用することの拙なりしが爲め焼打、破壊の災厄をさへ蒙り僅かに身を以つて免れたるものもあつたのである。

支那の社會に新聞宣傳の重視されてゐることは云ふ迄もないが、之と同じく近來この學生を



宣傳機關に用ひることが最も有効なるものとなつた。そして世に民衆の意思だとか民意に添ふ添はぬの論も多くこの學生の向背と學生の利用如何によつてトせられるやうになつたことは最も留意せなければならぬことと思ふ。されば學生のデモンストレーションの如きは近代支那の社會史上一時期を畫する要素となつたとも云ひ得るのである。又従つてロシアの赤化思想の運動の如きも此の學生の力によつて大にその消長がトせられることと思ふ。唯附記しておきたいのは學生は文字を読み世界の事に比較的通じて居る。従つて頭の方のみ進み實力が之れに伴はず、經濟方面の出處援助などの方から學生はいつ又何れの方向にその鋭鋒を向けるか逆睹しがたいのである。支那現代の政治家がつとめて之に味方に入れんとするは、大にこの點に意味のあることゝ私かに考へらるゝのである。蓋し現代の外交上にも學生の及ぼす影響範圍は必ずしも少くないであらうと云ひ得る。

### 三十四 各地の漫遊

支那外交の中心は須らく北京の一地方やその他の都會地の方面のみに限られず、支那各地全

般に亘つて考慮せらる可きは云ふまでもない。

今や支那各地に散在する日本人の經濟的發展の現状は大資本を以つてその組織的に計畫を立てたるものゝ有利且つ安全なるを示し、之に反し小資本を以つて個人經營を目論めるものは不利且つ不安なることを觀面に體驗するに至つた。年々歳々繰返されたる排日の騒ぎや南京事件漢口事件やらで在支日本人もその數を著しく減じたやうである。年一年と苦しいものは引揚げて歸り基礎の鞏固なもののみが居残ることになつたのは將來の爲めによい事である。然かし從來幾十年の間個人的に渡支して拮据經營せし連中がさすがに近來暴徒の恐怖と經濟競争の不如意とで遂に引揚げの悲運を見るに至つたものが甚だ多いのである。こは世界的大勢上、日本人は個人競争に於てたしかに支那人には勝てない。生活費の上にも商策の上にも交際の上にも聯絡の上にも大なる理由は國民性の上から見ても個人に負けると斷じたいやうな氣がする。奉天新市街にても漢口にても大連にても臺北にてもどこに於ても之は證明されるらしい。その上に日本人相互の間には又つまらぬ悲哀がある。個人經營に拮据二十年の某氏は語る。

「折角地歩を固めんと支那側と交渉を開始して漸く緒につくや日本の大會社の魔手は伸びて



自分の開拓して来た仕事は無惨にも根こそぎに取られて了つた。會社側は涙にむせぶ自分共を顧る心もなく着々成績を挙げ當事者は歐米にその功によつて榮轉までして了つた。いくら有望な開拓をしてもこれでは賽の河原である。そこへ差して今回の事件で空しく引揚げの悲哀に暮るゝのみである。」

「弱者に對する國家開展上保護でもなきものなるや。」

かう云つた叫びは一再ならず各地方で耳にしてゐる。日本人相互の間にはなる可く互讓的方法の諒解をもちたいものであるがこれは外交のことから遠いことではあり且つかゝるデリケートなことは餘り深くこゝに立入りたくないから省きたい。しかし在支日本人の民衆的叫びは寧ろこの小資本家に在ることを云つておく。大資本家の會社銀行には比較的叫びが少ない。あつても程度がちがふ。

大工業會社の方面に在りては過般の紡績騒ぎの時の如き、その一大投費をしてゐる丈にいざ騒ぎとなつたときの悲哀さ加減と云つたらない。上海でも一會社を除く多くのものは保安隊、陸戦隊で大騒ぎであつた。そして機械の破損その他に對し支那官憲の責を負ふ所なく犬に噛ま

れたも同然であると云つて殆んどその暴徒の害には困りぬいてゐた。支那が完全な法治國でない丈に大資本の會社には又人知れぬ頭痛がある。

かゝる頭痛不安を除くには今日唯自分の會社で支那工人の心理を察しそして自ら支那社會問題を未然に防ぐ方法を講じ例の學生などを巧に利用するに在るだけのことである。かれらは又日本の官憲に頼り過ぎる傾もある。一體に日本人は外に出ると領事館だ軍艦だと官邊に依頼し過ぎる弊がある。それよりも先づ自治の根本精神を本として支那工人と學生の心理をよく理解しその方法を一步づつ先きに先きにと解決する果斷の精神を必要とする。然し外交問題としては今回の如き南京漢口の事件の如きは未曾有の非常なる正當防衛策を必要としてゐたのであつたと信ずる。

次ぎには日本人の支那に伸展せるものゝうちそのパイオニアとして各省各地に功勞あるものが頗る多い。之を民間では尊敬し又信頼もしてゐる。日本は歐米先進國の眞似をする必要もないが、眞に功勞あるものはよろしく速に之を認めて之に獎勵又は頌徳その他適當な賞勳の方法を立て、稱揚の實を擧ぐることが肝腎である。政府は文字や文章の上で海外發展を云ふのみ



で各方面に進展して行つてゐるバイオニア又はその必ずしも最初の開拓者でなくとも功績の顯著なる人物に對し、その支那たるを南洋印度たるを問はず、又歐米たるを問はず之が授賞の方法を立つるの果斷を希ふのである。

人口の劇増を憂ふる日本の識者から此の點について具體的獎勵案の提出せられざるは遺憾である。歴史上の人物にのみ贈位陞位があつて現代の國家の發展についての人物に對して何等恩典のなきは、當局者の片手落ちと云はずして何ぞや。國民教育の上から見てもこは一日もゆるがせにすべからざる問題である。蓋しこは在支日本人からの叫びに非ずして自分一個の叫びである。吾人は海外發展の事に平素意見を有せらるゝ江湖の士の之に對する高見を叩き此の叫びを大にしたいと思ふのである。

尙また支那各地を巡遊して見るとその在留日本人にして眞にどこ迄もその地方の民國人自身を相手とし民國人の間に割込み、其事業の大成を期せんとする覺悟の者又既にその事に従つて居る者が比較的少ない。そして日本人相互に相集まり宛かも日本村の延長なるかの觀を呈してゐる状態を多く見る。これでは折角の支那發展の意味が少ない。それから又日本人はその一會

社、一銀行の自分の従事してゐる事にのみ精しく適切なる支那大局の問題となると殆んど願者が少ない。一局部を見ると同時に大局に通じ得るやう平素からゆとりを持つやうにしたいと云つてゐる者もある。深く考ふべき事である。

以上は自分が最近まで約三十回に亘り支那各地を巡遊してその見聞せしことに感想を交へて申説を開陳したのである。そのうちでも日本の支那外交並びに國民の支那外交に對する思想がともすれば北京の一地方に限られたる如き感を抱くものがあり、或は又本省と北京の會議の席上の間の外交に終始し實際地方の事情については閑却せられてる點の多きを見、又その各地方の慣習の容易に改めがたきものあるあり、これらは從來殆んどたゞ型の如き外交材料のみに囚はれて、地方民衆の裕かなる實情を考慮する如きことは重く視られてゐなかつたやうである。是等は將來は一層重視されたいことを述べた。

殊に又支那は日本の運命に重大な關係あるに拘らず當局大官の實地視察を試むる者はなかつた。今後は是非これが實地巡遊をと之を懲慝し、そして支那の國際會議の協議案の如きは豫め其地方々々に關係ある事項にして上程せらるゝものはその内容、現状等について日本としては



十分の智識を有してゐるべきではないか。その邊について支那の自主權を害しない程度に於て日本は仔細に調査する必要があることを説き、又最近民衆思想としては最も新らしきロシアの赤化思想が侵潤して來た。がこは支那人としては支那式に同化して行く歴史的手練を経てゐるから日本で案する如きことはあるまい。けれども思想の流れは支那の爲めの心配と云ふよりは日本へいつ共産の火の手が移つて來るか判らぬ。支那はとも角日本の方が早いかも知れぬ。それから支那の社會はこれから一にも二にも宣傳が八釜しい時代になり示威運動が頻々行はれるやうになつたがこは自覺の結果でもあるが職業的の仕事に過ぎない。併しこは民衆的にひどく力を持つ性質のものであるから政治家がこれらの宣傳専門の學生を利用するやうになつた。これは確かに一つの新しい方法である、現代の外交にも此の邊を考へに入れておく事が大事である。それに加へて在支日本人の大資本家並に個人的事業の經營者の悲哀をあちこちに聞くのであるが、要するにそれらは今後日本人が支那にそのよく發展し得るや否やの試金石である。それよりもどこ迄も支那の爲めに終始せんとする決心の強い人物を得んことを希望してやまぬのである。當局者として在支功勞者の稱揚の方法も考へるの必要があるであらうが、日本人一般

には一層日本民族自身の力にて支那に進展するの方策が樹てられなくてはならぬ。一回の紡績騒ぎや南京事件漢口事件位で氣が挫ける様などでは情けない。今後支那の外交を興振せしむるには支那の地方民衆の事に重きをおかせると同時に又各省にゐる日本人自身も一層の努力と決心を以つて之が永遠的の活動の開拓に入らんことを切望してやまぬのである。



## 八 支那人の風流心

### 三十五 小動物器物に對する趣味嗜好

支那では風流才子などといへる語は屢々耳にする。「風流」としいへば一方の軟派の方面の用語として取られ狹斜のちまたの消息通の言語のやうに解せられる傾きがある。然し風流韻事の趣味殊にその高尚にして浮き世離れのした風雅の心を以て人生を客觀化し、自ら悠々迫らざる典雅の生活を營めるものゝ多い支那社會にあつては、その風流心の方面のことは研究すればする程これが奥底の知れない興味を喚起せざるを得ないのである。

民國の中流の家庭をたづねると時々自分は支那民族なるものゝ實に無邪氣にして何ともいへ

ぬ優しい心を有してゐる趣味性の深きに憧憬する。例へば北京の寒天外氣は氷點下十何度といふ極寒の時候に際しても屋内の客廳書齋などにて秋の虫の音の聞かれるやうな仕掛けを工夫してゐる。堂上に蟋蟀を聞くといふ故事は詩經時代既に記載されてゐる言葉があるのもわかるが、寒中に虫の音を聞くことは時ならぬ嗜好だけに特に面白い。

北は滿洲奉天から長春ハルビンのあたり、また南は長江廬山洞庭湖畔何づれのところにいつ見ても秋堂房に聞く蟋蟀の聲またその調子は周代のそれと全くおなじかるべく、また日本で秋の尾花桔梗女郎花の叢中に聞くものもこれと何等變りはないやうに見える。しかるにこれを寒中の北京で文人連が一種の道樂趣味として秋節より冬にかけてこれを飼養し、その音色の賞美に餘念なき生活振りといふものは實に天下泰平である。政局は何づれに轉じようが山東がどうならうがわが壺中の道樂はこの虫の一點に集中されてゐるといつた調子である。さてこの虫を飼養するには第一に温度のよく保たれる装置を要することは無論だがこれには葫蘆即ち瓢を用ひる。普通葫蘆はその全體を用ひることなく上半または下半をまだその蔓生の時に早くもこれに鐵の型を嵌め冠しその成長を人工的にさまたげて或ひは平扁に或ひはその型の内面にあらか



じめ凹刻された飛龍翔鳳、祥雲または格子模様の意匠を現しおきこれより瓢面を凸状薄肉刻り式に作り上げるのである。乾隆のころ王公貴族の家庭に用ひられたものなどつたへらるゝものは時々これを見る。

自分も見本的なものを數對愛蔵してゐるがその全面のデザインの優麗なる誠に愛すべきものがある。北京紫禁城武英殿の寶物中にも多少その見るべきものがあつた。葫蘆は下方に轆轤細工の口がついてゐてこれに細かい透かし彫の象牙の圓板が嵌込んである。口は螺旋式に開閉が自由になつてゐるのである。虫の爲にはその内面に多少の泥を塗り付けておく方が虫も棲まひやすく喜ぶであらうなどいはれてゐる。現にその爲か泥の潤滑して付著し重たくなつてゐるものもある。これに少量の穀粒野菜などすり餌にして與へてやるとか、室の温度を加減するとか可なりかよい生き物だけに心を配らなくてはならぬのである。人或ひはいはん支那の人々は生活に暇が多く閑散の身なれば自然かゝる虫の世話なにかにまでふけり得るものならん。しかしこは時間の多少暇の有無の問題にあらずして全くその先天的に風流心のあるによるものでその人生に餘裕のある悠々閑々せまらざる風懷が然らしめてゐるものと推定せられるのである。

る。

支那都人士にしてもまたは田舎の農夫樵夫客棧の掌櫃などにしてもその風雅の心を認むべきものはなほまだく枚擧に遑がない位ある。こは要するに支那民族は生き物といへば小動物の蟲なら蟲の心理までをよく理解し蟲の心に合一せんとする天性を有してゐるのに歸することゝ思ふ。従つてその飼養の方法の如きも實によく攻究せられてゐる。これが道樂の間に全く一小天地を見出だしてゐる譯である。かの李白がよく廬山五老峰の雲松の心理をよみ東坡がよく歙州硯石の心理を察して唐宋文學の上に残してゐるとは世人既に之を知つてゐる。支那民族の文雅の心はひとり木石小虫のみならずまた小鳥類の心理を解することにおいても堪能である。北京でも上海でも小鳥道樂は相當盛んにその流行を見るが、山間僻地に行くとなほまたその風雅心をうかがふに足るべき材料がおほいのである、無論これには道樂的の意味も加はつてゐるかも知れぬが小鳥にはそのホワンミン鳥たると何鳥たるを問はずすべて多大の興味を有してゐるまたその香氣な生活振りが小鳥道樂に如何にも調和してゐる。一種類の小鳥に與へる餌にも九枚の組合せ皿を用ひ中央の磨り餌の小皿のまはりには八色の料理が攻究しそなへられてゐる。



支那の小鳥も相當食ひ道樂にふけつてくるであらうと思はれる。

なほ鳥の心理を了解しその操縦に支那人のたくみなる事實は城門を出て田舎の諸地方に行けば毎日でも見られるのである。わけて揚子江の江上を横ぎるべく牧童らしき一少年が三尺の竹の竿にて白鳥類の三百五百といふ群、時にはまた千羽に餘る大群を一糸みだれず水上波靜かにまた手際よく指揮し泳がせ渡つてゐるところなど見ることがある。また幾千の黒羊白羊の群の時に一人の牧童に引連れられて歩み行く所の光景をば先年長城外長家口郊外の山上にて眺めたとがあつて無上の趣味を感じた次第であつた。實に支那では驢馬にしても水牛にしても何づれもよく心安らかに使役されてゐる。蓋し漢民族は元來先天的に總てこの間の動物心理を解しまたよくも趣味を以てわが自己の胸中のものとして消なして行く呼吸を會得してゐるのである。この邊の呼吸は邦人にして學び得べくんば學びおきたき事と思はれる。

### 三十六 詩文に對する風韻

支那の自然を背景として生み出された詩文に對しても支那の人にはかなり濃やかなる情緒を

深はせてゐる。その間に風流韻事のたづぬべきものがある。こゝにはその平仄と文字の選び方といつたやうな文字の上の美しい巧妙さ加減を賞美するのではない。それよりもこちらで先づ之を視る前に問題を定めておき、其問題に合ふ所の材料を詩文の中から抽き取つて行くといふ方法になるのである。それ故に普通詩文に對して文學者の試みたやうな舊來の文學趣味を養ふといふことでなく、それよりも其中の文化的色彩に富みたる種々の貴重なる資料を引き抜き、それに依つて支那の天然或は社會的人情方面に就ての支那人の氣持を描き出して見やうと思ふのである。

今茲には主として唐人の詩に就て觀るのであるが、謂ふまでもなく支那の地理はその天然の實に偉大なる事、又其偉い天然の規模が人事界を抑壓して居ること、その邊の實際は一度支那の實地を見て來られた方はすぐ肯首されるであらうが行かれない方でも文明の事蹟を見るときは、其大きな規模が遺憾なくその大仕掛の支那の詩文の上に現はされて居ることを認められるであらう。而かもそれが僅の簡単な文字に依つて痛快に現はれて居る。従來白髮三千丈と云つた式の言葉使ひの多いことは人皆之を知る、所が事實さういふ誇張した言葉を使つた場合でな



く、實際支那の大陸氣分をその通り掛値なく現はして居る所の詩文は中々多い。單に唐詩の中  
のみに就いて見ても無數にある。此支那の地理上の大陸氣分を言ひ現はすのには、支那では常  
に千里とか萬里とかいふ言葉を使ふ。此場合に於ける一里と云ふ考へは固より日本に於ける所  
謂三十六丁一里の里でもなく又支那の普通に謂ふ六丁一里の里でもあるまい。假りに六丁里と  
した時の里數の計算で行くとえらい澤山になるといふことは申すまでもない。併し詩文の上の  
萬里と云ひ、千里と云ふは是に依つて太陽が平原より出で、平原に入ると云ふやうな如何にも  
支那の大平野又は東西其距離の極めて長きことを聯想せしむるに最も恰好の言葉だと思ふ。例  
へば東去長安萬里餘とか、或は平沙萬里絶人煙とか云へる如き句を見ても、是等は單に日  
本の如き島國に於て見る所の平野に就いて云へる語ではない。決して此の如き思想は日本など  
では出るものでない。若し日本の詩人が斯様な言葉を詩文の上に使つて居るとしたならば、そ  
れは單に支那の眞似事にしか過ぎないものと思ふ。又支那の如き交通機關の發達しない大陸の  
曠野に於て驢馬又は駱駝の脊に依つて、毎日支那里の二十里、二十五里づゝ進み行くにして  
も、數十日を要するといふ様な大旅行が普通に行はれてゐるのであるから、羈旅の感を歌ふ場

合に、萬里千里の語が自然と口から出るのは、むしろ當然のことであらうと思ふ。今茲に述べ  
た平沙萬里絶人煙を云へる詞の如きは、蒙古沙漠内を寫生的に現はした語であるとは云へ又最  
も支那大平野の光景を寫し得て遺憾なき語とも評し得るのである。  
斯様な詞を使つて居る詩文のその前後の句を味はつて見るといふと、一層其の形容の語が元  
來單に誇張せんが爲めの語ではなくして、實景をいかにも寫眞的に現はしたものだといふ感じ  
を、益々深くするのである。例へば、今此平沙萬里絶人煙といへる句を見ると、其の絶句は磧  
中作と題され

岑 參

走馬西來欲到天

辭家見月兩回圓

今夜不知何處宿

平沙萬里絶人煙

とある。此時から聯想せらるゝのは支那内地で太陽が原より出て、原に入り、見渡す限り高粱  
の畑が續き所々に楊柳の並木があつて、其下を夕暮の靄を背景に驢馬を驅り、夜に入り知らぬ  
郷に行き暮れてともかく、支那宿に泊るといふことになつた自分等の經驗から全く旅行氣分が

支那人の風流心



思ひ出される此詩にある所の今夜は知らず何れの處にか宿す、平沙萬里人煙を絶つといふ句の眞の味ひを徹底的に感ずることが出来るものと自分は思ひ、非常に會心の作と考へて居る次第である日本人は云ふ是までの支那の詩と云へば、作者は自分の心を偽つてさうして何事によらず誇張的に書き、又有りもしないことを事實らしく書き列べ、又徒らに美しい文字をのみ配列して、唯上調子に其技巧を銜ふといふことが詩の半面の秘訣でもあるかの如くに考へられて居つた傾があつた。然し此の如き形式的の美を貪るといふことは、必ずしも此詩文の美しい特色ではない。此の如き上調子の癖は寧ろ墮落したる文學に於て之を認むべきものであつて、その唐の如き黄金時代に十分に發達し、最高調に達したる所の詩文といふものは、必しも常に此の如く不健全なるものばかりであるまいと自分は信ずる。兎に角支那人の詩の中に萬里とか千里とかいへる詞のある場合には、十分實景としての支那大陸の曠野の風致を一方に思ひ浮べて解釋すると云ふ風になりたもので又さうすれば眞の味ひが出て來るものであると思ふ。

### 三十七 地理を歌ひて

次には地理上の状態を描いたものゝ例として、尙ほ茲に三つ四つの實例を述べて置く。唐詩に於ては單り大平野の光景を巧みに寫し得て妙域に達して居るばかりでない。更に又天然自然の風景を寫す點に於ても、頗る其妙所をうまく言ひ破つて居るものが尠くない。殊に李白が斷崖に現はれて居る瀑布の光景を寫すところに次のやうにある。

斷崖如削爪 嵐光破崖綠

天河從中來 白雲漲川谷

此詩に見ゆる如く、斷崖絶壁の急なることを形容するに爪を削るといふ詞を以てし、而も絶壁に綠の樹の所々に生へて居る所の光景に嵐光崖を破つて綠なりといふ詞を用ふるに至つては、其斷崖の光景を是れ以上よく寫し現はす詞はないやうな氣がする。又其崖の麓の方は雲に覆はれて其谷底の知れない所を寫して曰く、白雲川谷に漲るといふ言葉を以て下をばかして居るといふ所は、是は全く廬山の山水を見てゐるやうで全く繪畫として殆んど眼に見せられてゐるやうに思ふ。

斯様な形容は支那の文字に限るのである。到底日本の詞では表はせない。表はるとしても甚



だ困難であらうと思はれる。さういふ所を思ひ切つて現はして居るといふことは、是に依つて支那の地勢地質の半面も分かれば、又自然地理の方面を説く上に於ても、此の如き詩を参考とすることが必要でないかと思ふ。斯様な唐詩を見る度毎に自分は、嘗て臺灣阿里山に遊びその七千尺以上に仰がる、塔山の巖の如きは、其規模の大なる點に於て、或は其崖の景色の雄大にして、殆んど天下に比のない點など十分その極端なる詞を以て表はす丈の値打を有して居り乍ら誰れ一人未だ文人の筆に上つて居らぬのを遺憾に思つてゐる。僅に一二の畫伯の手に依つてその光景が表されて居る丈であると云ふに至つては、如何にも自分は残念に思ふ。斯様に唐詩は支那の大陸的の光景を實に巧みに現して居る所の詩に富んで居るといふことでは支那の地理學的研究の上に於て貴重なる材料として之を取扱ふやうに致したいものである。

### 三十八 社會を歌ひて

更に詩文は支那文化の方面から例へば支那民族の社會生活を營んで居る場合に於ける人情の機微を穿つて居るものを見るとこれ亦頗るその材料が多い。其中にも分けて甚だ露骨ではある

が、民國人の交際上の秘訣、殊に心の底に奥深く藏して居る所の、甚だデリケートな處を洩らし其の機微の點を自白して居るものがある。例へば張謂の

世人結交須黃金 黃金不多交不深

縱令然諾暫相許 終是悠悠行路心

といへる如きは、寔にこそその辭令に巧みなる支那人の社交上に於ける内々の秘密を述べたものと云つても宜しい。之に付て思ひ合はせるのは、支那の古代に於ける文字の「朋」の字である。その構造の上には人と交はる場合に現はる心理状態が見えてゐる。之を見るに、朋の古字は、今日書く字形は、月を二つ列べたやうなものを書くけれども、古へは

夏殷周三代古銅器に見る鐘鼎古文

上は側面より見たる朋の字

下は正面より見たる朋の字



斯ういふやうに人の姿を書いてゐた。こは人が兩手に錢に紐を通した長い縉錢を持つて居る姿



勢に象られて居るのである。或は時に又人の前に向ひて、兩方の肩に一杯穴錢の紐を通したものを掛けて居る姿の畫かれて居るものもある。朋友の朋の字が此の如くその必ず財貨を現はして居るとを條件として其文字の組立てられて居るといふことは是れ亦社會生活に於ける人情の機微を上古の人が既に現はして居ると言へるので何れの時代に於ても支那人の金錢本位であるといふことが、能く是等の點に現はれて居るのである。實に興味のある問題である。尙ほ聖人君子と云へる場合の賢の字に付て考へて見ても、賢の字は見てすぐ明かである如く、貝の字と、又即ち取るといふ字と、臣即ち人といふ意味の字と三つの要素から成立つて居る。このうち貝は即ち財貨の義であるから、貝を有する人は即ち財産家、金のある人といふことが賢の字の根本的要素となつて居ることがわかる。賢人は何ぞ必ずしも利を言はんなど孟子の言へるが如く寧ろ理財の道には淡泊で、縁が遠い如くに裝うてゐることが一面の秘訣になつては居るが、併し内心財貨のことに執着してゐて、それを主な條件として居たといふことは賢の字朋の字で争はれぬものである。文字の上を思ひ、之と唐詩の張謂の詩の中に含まれて居る意味とを併せ考へるといふと、是は極く不用意の裡に支那民族全體の社會生活の機微の點が漏らされて居るも

のと見ることが出来るのである。

尙ほ王維の詩の中に、友人の丘爲が試験に落第して江東に歸るのを送る時の詩に斯ういふことを言うて居る。

憐君不得意

況復柳條春

爲客黃金盡

還家白髮新

五湖三畝宅

萬里一歸人

知爾不能薦

羞稱獻納臣

此詩の中に友人の落第して非常に同情に堪へないといふことを歌つて居るのは尤もな譯である。其落第して郷里に歸る友人を見送る時の其春の、悲しみを寫す場合に、もう君は金も皆な使ひ盡して仕舞つて居られる家に歸る時には土産とするものは何にもなくて、唯頭の白髪だけだ。それに大層同情して居つた君を知つて居る私が君を推薦することが出来ず、詰り合格させることが出来ないで而も尙ほ自分は貢のものを取扱つて居る役人としての其實を擧げることが出来ない。詰りお前さんを合格せしめて之を薦めることの出来ないのは甚だ遺憾の至りである



といふ意味の詩であるが、之を若し支那流に考へるといふと貢といふことゝ試験に合格させる其人とを同一物に考へて居るのだ。品物と人間とを同じやうに取扱つて居る。之は支那の普通の試験のやり方で見ると、合格の如何は實力の如何にも依るけれども、半分は又金次第といふことになるのだ。人間の力を知り、人物を知つて居ても金次第では之を合格せしむることが出来ないといふやうなことが一方に澤山實證が擧ることを知つて居つて、此詩を見るといふと、如何にも人情の淺ましいことが此詩の裏面に含まれて居るやうな氣がする。事實合格が出来ず力がなくて進むことが出来なかつたならば、それで萬事濟んで居る譯で耻づることも何もいらぬのだらうと思ふ。支那の試験の發表の時には絶えず内々利益問題が之に附いて居るといふことは、頗る其人情の淺ましいことを我々は感ぜずに居られないのである。

## 九 支那人の樂天生活

### 三十九 教育上より見たる支那人

支那人を全體として觀た支那民族の觀察に就いては自分は未だたしかな結論を述べることは出来ない。然し從來接觸した支那學生また臺灣に於ける支那系統の學生又はひろく一般に所謂支那人に就いて自分が平素經驗してゐる所によつて考へると餘程日本人とは違つた點がある。日本人よりも劣つてゐる點ばかりでなく寧ろ進んでゐるやうに思はれる點がある。大いに日本人の學ぶ可き美點をも備へてゐる。殊に教育上の立ち場から見ると或る場合には日本の學生にも此れ位の度量態度が望ましいものであると考へられることもある位である。



支那は云ふまでもなく其の土地の廣大なること、國の古いこと、人口の多いこと、胤を尊ばぬこと、あらゆるこれらの大きい要素が支那人自身の思想感情の背景となり動力となつてゐる。そのため何れの支那人を見ても日本人とは違ひどこかの點に於て、思想が豁達で、大きいところがあり、感情が高潮できついところがある。固より北方と南方とは地理も違へば人情もちがふ。北人と南人を比較して見ると餘程懸隔がある。けれども吾人の目に映する所では、支那人と云ふものは一般に「樂天的」の生活を營んでゐて悠々として迫らないところがある。その何となく胸のうちの大きいところがあらゆる點に見えてゐるのは、うらやましく感ぜられる。國の背景と歴史とを異にしてゐる日本人に對つては一瞬一夕で望むことは出来ないが、日本人の學ぶ可き點はその點にあると考へる。國が大きければ人間も従つて大きいものであると云ふことがつくづく悟られる。然し人間が大きいために次の如き現象を吾人はまのあたり目撃する。即ち

その一、呑氣なる態度を有すること

その二、矛盾せる態度が多く見られること

その三、不得要領の態度多きこと

その四、徹底する所まで急いで遂行するの氣力に乏しいこと、従つて事物の結果結論を急がないこと

その五、天命に従ひ宿命に安んじてゐること

かやうな態度はその程度に差こそあれ常に支那人に見出すことが出来るのである。性急に、速く、結着のところを知りたがる日本人の目から見ると、實にデレツタイやうなことや、また餘り然諾を重んじないので氣まぐれのことばかりをするため、癢にさわることや腹の立つことが甚だ多いのである。人間が大きいただけにまた、物の道理を理解してゐるか否かの判つてゐない連中も中々多い。判らぬながらも自分丈では一種の人生觀を立て、世の中を利の一事を以て律して居るところは、頗る無邪氣で面白い。自分を以てすべての他人を判断することは、いつくの國人にもあることながら、支那人は御國柄だけに頗る振つてゐる。今教育上の例をとつて話して見ると次の如きことがある。

支那人は教育の何たることは知らぬでもなからうが時々變な思想を抱いてゐることを發見す



ることがある。第一、支那の本場では、父兄が子供を學校にやつておきながら子供を通學させるは、子弟の教育のためであるとは考へない。その學堂の教師に生活をなさしめ養はんがために通學させてゐると心得てゐる。子弟自身も教師を商人と同一視し、自分は華客の位置にあるものと信じてゐる。つまり師弟の關係を商賣取引のやうなものに考へてゐるのである。其れ故若し子弟にして學校の缺席が多く、爲めに授業に差支を生ずるのみならず生徒にとつても不爲と考へ、出席するやうにと注意を與へると教師自身に収入の減する虞がある故、かくの如く出席の催促をするに至つたものだと思定して了ふのである。子供の方でも、亦自分共が學校へ顔を出してやらないものだから、バツタリ先生は立ち行かないのだと云ふやうに考へてゐる。幼少の時よりかやうな空氣を吸うて來てゐる支那學生であれば、日本のやうな教育の進んだところにも來ても矢張りその筆法で學校に臨む。神田や牛込あたりの私立學校に支那學生を歓迎するを見るに及んでは愈々その考を強くする次第である。甚だしいのになると申し合せたやうに半月以上も學校を缺席しながら、翌月月謝を納めるときになると、前月分は三分の一に減額せよと迫る。會計の方でまけられぬからと云つて強く出ると、彼等は、それでは連袂退校して他へ

轉校しますからと來る。かけ引きの巧みなことは此の一例によつても判るのである。何の爲めに留學に來てゐるか判斷に苦しむことが多い。頻りに學校を代へてあるいたり、試験のときになると顔を出さなかつたり、自分で華客のつもりで來てゐる手合ひどもは特に困る。教育上頗る扱ひにくい場合が多い。支那の學生の中には氣儘であり、吾が儘を云ふものも少なくないのである。それと云ふが自己本位の考へを固持し、自分のために他が立ち行つてゐるのであると考へ、自我を出來るだけ、貫かうとする意思が強い。然し肝腎の勉強の方はどうかと云ふに、必しも自分のために一所懸命勵んでゐるやうには見えない。自國の面子に拘はるることには何を措いても争つてゐるが勉強の方のことはそれ程氣を入れてゐるものは少ない。

支那の教育はその支那の人の心理を呑み込み、百の矛盾、洞着を十分承知の上にて更にうは手に出るやうにするより他に道はない。若し支那人の意を迎へることが必要であるとする中々容易ではない。むしろよく支那流の呼吸を以て臨機應變に常に樽俎折衝を試み、言辭を巧にして氣永く要領よく交渉を續けてゐる方が策の得たものゝやうに思はれる。



#### 四十 清貧に安んじて邊幅を飾らない

支那人の所謂清貧と云ふうちには通りが色々ある。日本人の考へて清貧洗ふが如しといふ程度は大抵その事實がきまつてゐるが、支那では清貧といつてゐながら數十萬金を秘藏してゐるものもあれば、實際餘分のことこそ少しも出来ぬにしても、その生活丈は不自由なく出来ると云ふ程度のものもある。又労働者苦力の徒の如く下等社會の裏店生活をしてゐるやうなものもある。其れ等は何れも清貧と稱せられてゐるのである。言葉の上丈けでは清貧とはいかやうになりとも用ひられてゐる。清貧と云ふ以上は何一物を持たない筈なるが十萬金に價する家寶を百にあまつて持つてゐる人もゐる。これだけ通りがあるのであるから、此の言葉のために欺かれてはならぬのである。

支那人は本來、身の廻りに澤山美しい物を着けたがる人種である。所謂邊幅を飾りたがる人種である。物質本位の國民であるから出来るだけコテ／＼飾り立てて時には全財産と思はれる丈けのものを携帯して歩いてゐるものもある。よせば宜いのに紳士貴婦人であるに實にコツテ

リした飾りをどつさりつけて町を歩んでゐるのを見ることがある。物持ちであることを見せかけるにはこれが何よりも適切な方法であるに相違ない。かやうに見ると支那人は邊幅を飾る事にのみ腐心してゐるやうに考へられる。これでも飾るといふ部類に這入らないで質素、樸訥の方に見られることさへある。されば、飾る飾らぬの界は、不明である。外交的の云ひかたとなつてゐるのである。しかし支那人には兩極端がある。甚だしく飾るもの、コテ／＼と、おやつしをするものと其の反對に全然自然のまゝで極めて質樸なものがある。衙門に通ふ役人、殊に外交官などは中々邊幅につとめたものである。反對に眞の意味に於いて身を飾らないものは、田舎の農夫である。貧でなくとも飾る必要がないものと見えて邊幅は自然のまゝでおく。里間に寄合ひがあるときとか、村役場に出かける時とか、又城内に出頭するときとか云ふやうな場合に於ても百姓着物のまゝでゆく。大官に接するときと雖も別段、耕作用の着物を晴衣と着代へて出掛けると云ふやうなことはない。自ら言をなして自分は農民なり農民が仕事着を着てゐることは相手が大官であらうと誰であらうと遠慮する必要はいらぬのであると高くとまつて澄ましてゐる。眞に貧困なるものにあつては尙更澄ましたもので實にひどいドロ／＼着物を



つけ、そのつゞれの錦で如何にも満足してゐるらしく而も何か心の底に愉快のひそみ居るものゝ如く何となくのびく／＼した顔付きをしてゐる。何か話かけて見てもいつもニコ／＼して應答する。炎天に黒い身體上半を曝し田圃を耕作してゐる様子は支那田舎の夏の旅によく見るところであるが、その農夫の心事は實に呑氣太平樂に見えてゐるのである。

支那に家を持つもの誰れ一人として馬賊土匪を心配しないものはあるまい。被害の程度に大小の差こそあれ、盜賊兵匪の心配は離れぬ。けれどもその他には何一つ心配になる事もなく、呑氣に田舎生活を営み、若し財にして餘裕があれば地下に埋藏しておくか、又は壁間に陰匿して置くかの方法によつて竊に楽しみを藏してゐるのである。これによつて人知れぬ愉快が寶藏されてゐるのかも知れぬ。しかしそれ以下の人民で最下級の百姓であるとか、今日忽ち食ふに困る程の徒であつても、苦力をするなり、乞食をするなり、泥棒仲間に加はるなり何にとか方法が立つものと見える。寝るに家がなくつても困るわけではない。路傍がある。牛馬同様に地面に横はつて睡眠をする。北支那では地面に濕氣が少なく夜中の空氣もよく乾燥せるため地上にちかにならず寝てもそれ程障らないのである。この程度の生活をなすものは殆んど家畜同

様の寝起きをするわけで、動物と選ぶところはないのである。それ程のひどい階級に常住してゐても實に愉快げにやつてゐる。晝間などは面白く勞役に服してゐるのを見る。尤も一日の生活費が田舎は銅子兒で十錢ぐらゐで足りるのであるから安樂なことは此の上ない。いかに貧になりさがつても樂天的の生活を営むことの出来るものであることは支那の田舎に於いて實地に目撃せられるのである。邊幅を飾ると否とは、問題とはならない。要は彼れ等は主觀的に現世を樂觀してゐるのではないかと思はれるのである。

#### 四十一 佳句を並べて自ら慰むるの風懷あり

支那人は文字を愛し文辭を弄ぶの習慣があるの結果、好んで佳句を並べ自ら慰むるの風がある。謂はゞ縁起を祝ふの意に出てゐる事と思はれるが、文字を読むことの出来るものは固より、また目に一丁字なきものと雖も文字を門前に掲げてその意を示してゐるのである。日本にも幾分その習慣は傳はつて來てゐるやうに見える。「立春大吉」とか「千客萬來」とかの語を掲げてゐるのはその例である。支那のは今一層複雑多様であつて、中々振つてゐるものがある。普



通之を門聯と云ひ家の入口の左右に紅紙に大書して掲ぐるのである。これは他のところにも述べてあるが左にその好例を示して見よう。

酒坊であると、聞香下馬。飲酒孔嘉。飲不知醉。隔壁三家醉。

眼鏡舗であると、日月雙懸。高年體能辨霧中花。

茶舗であると、蓮蕊浮甌錄。香芬花上露。瓶中常貯蘭芽嫩。

また書房、學塾、軒齋であると、友<sub>三</sub>天下士。君子慎<sub>レ</sub>獨。

門無<sub>二</sub>俗客。讀<sub>三</sub>古人書。家有<sub>三</sub>藏書。焚<sub>レ</sub>香讀<sub>レ</sub>書。凡上千古。叔重解字。

脫帽看詩。琴罷焚<sub>レ</sub>香。敏則德聚。以<sub>レ</sub>文會<sub>レ</sub>友。稽<sub>レ</sub>古爲<sub>レ</sub>訓。

德守三宅。志在<sub>三</sub>鵬飛。與<sub>レ</sub>德爲<sub>レ</sub>鄰。修<sub>レ</sub>禮以耕。

讀書破<sub>三</sub>萬卷。

出交<sub>三</sub>天下士。

東壁圖書府。

落筆超<sub>三</sub>群英。

入誌<sub>三</sub>古人書。

西園翰墨林。

一門共坐春風裡。

面<sub>レ</sub>山如<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>畫。

高閣凌<sub>三</sub>霄漢。

多士群沾化雨中。

留<sub>レ</sub>客凝<sub>三</sub>彈<sub>レ</sub>琴。

春山展<sub>三</sub>畫圖。

また大門には、次のやうな美辭を掲げてゐる。

千祥雲集。

天開<sub>三</sub>壽域。

和風甘雨。

詩書門第。

百福駢臻。

人樂<sub>三</sub>春臺。

景星卿雲。

忠厚傳家。

詩書傳<sub>三</sub>家人。

傳家禮樂宗<sub>三</sub>東魯。

合璧珠聯<sub>三</sub>元集慶。

簪纓世澤長。

經世文章齊<sub>三</sub>盛唐。

花開鳥轉<sub>一</sub>徑春臨。

また、春聯のお定まりの文字は次のやうなものを書く。

百祿是總。

乾坤大有。

桃穠李郁。

文章華國。

萬福攸<sub>レ</sub>同。

履泰咸亨。

桂馥蘭香。

詩禮傳家。

堯天舜日。

俾<sub>レ</sub>爾戩<sub>レ</sub>穀。

和風甘雨。

共和萬歲。

禹甸湯郊。

介以<sub>三</sub>繁祉。

瑞星祥雲。

平等四民。

このやうな文字を支那人は非常に好む。何れも門閭、軒下に紅唐紙に黒書して、掲げるのである。その家により店により適當な文字を選びうまい言葉を考へ付いてゐるには全く感心する。尙「錢店」(兩換店)であると「財源活潑」「國寶流通」と云つたやうなことを書き、浴塘、澡堂で



あると、洗心滌慮。振衣彈冠。と書き、推車店であると、一輪可移天下物。兩手易取四方財。など書く。紙扇舗であると捲簾無俗客。清風來故人。と洒落たことを書いてゐる。鹽店には、堆盤皆玉粒。調鼎盡銀沙。などえらいことを書いてゐる。書舗には、萬卷常新。五車富有。とか聖賢義蘊。天地精華。と云つたやうな語が北京の瑠璃廠あたりの各店に掲げられてゐる。

門聯の語辭は實にうまいことを云つてゐる。そしてその云ひ方も千差萬別であるが支那人が、門聯に美辭を並べ掲げるのは固より人に見てもらふためである。人に讀ませるつもりである。見る方ではそれ程に目にとめることはあるまいが、凡そ家を構へてゐるものは必ずこれを掲げることに略きまつてゐる。そして家の主人の心事はこれに美しく書き立てられてゐるのである。人に書いてもらつたり、賣つてゐるのを買つて來たりすることもあるが兎に角體裁のよい言葉文字を門柱に貼付するものである。今支那人の心事を察するに、その述べんとする所、人に示したいと思つてゐる所は、大體次の語でまどめることが出來ると考へる。即ち

生財從大道。  
處世守中和。

以義爲利非其義。一介不取。  
大道生財如其道。九百何辭。

いかにも道義心に厚く立派な行ひのみをしてゐるやうに見えることを好むのである。又聯文としては、

貿易豈無廊廟志。  
權衡須用聖賢心。

生意如川流不息。  
財源似大道無窮。

生意如春前茂草。  
財源似雨後鮮花。

澤潤生民。  
求則得之。

と云ふやうなものを見る。之に依つて如何に好都合のことばかりを書き列ねてゐるか判るであらう。財を生ずる道あり、とは言ひ得て盡してゐると思はれる。いかに赤貧洗ふが如き生活をなし乞食にも劣る状態を續けてゐても、尙家の門には詩書傳家久とか、天官賜福とか、財源雨後花とか、全く都合のよいことのみを掲げて、孤兒が慈善家の惠をあてにして待つてゐるやうな態度である。自分で勉めず、努力せず、人は當然己れを救ふべきもの、天は祝福を降すものと云つたやうな自信を持つてゐるらしい。家が貧しくして茶碗の外一物も留ないと云ふやうな状態にあつても尙門前の向ひ家の土塀にもつて行つて「出門見喜」と云ふ四字句を掲げて自



ら慰めてゐる。家に財貨はなくとも、せめて門外に喜を見る見込さへあれば家のうちが幸福であるかも知れぬが、これは負け惜しみのやうに感ぜられる。物があれば泥棒の心配があるが、無ければ氣樂で却つて幸福であらう。そのためか貧でも樂觀の顔をしてゐる。宿命とあきらめてゐるのか、貧を少しも苦にしてゐない。誠に愉快さうにやつてゐるところは日本人の目にはうらやましく見られる。田舎を歩いてゐると支那民屋にも往々次のやうな門聯がさがつてゐる。即ち、

福隨天運循環轉。

財逐春風次第來。

これによれば幸福財貨は天に任ずと觀じてゐることが判る。悲觀をしないで飽くまでも樂天的である。この文句は見方によつては一種の人世觀が現はれてゐると評することが出来る。春風の吹き來るときは家運が向つて來ると云ふ安心が現はれて居る。これで安心のできるときは支那人の實に得な點である。そのくよくよしないところは貧に在つても幸福な所である。

支那には中流社會が存立してゐないから八九分の人口は下等社會を形成してゐると見てよろ

しからう。假りに支那の人口を四億萬と見ると三億六七千萬のものは目に一丁字なきもの、又は社會の下流に沈淪してゐる輩であること出来る。これらの人々の日常生活、又その社會の事情がいかやうにあらうともその人々の心のもちかたは悠々迫らず、呑氣な態度を有してゐると云ひ得られる。勿論これは全國に就いて調べたわけではないが、少數の例數（革命當時の過激論者の如き輩）はあるにしても確かに此の種の樂天的思想がひろく民國にひろがつてゐることゝ信する。

#### 四十二 斷頭臺上泰然自若たるの態度を失はぬ

天運にまかせると云ふあきらめかたは日本人よりも支那人の方がまさつてゐる。すべて支那では建造物でも何でもその規模が大きく、舞臺がひろいからして少々の微力を以てしては何にもこたはない。支那の遺蹟を訪ねるときなどにいつも感ずるところはその地域の廣大無邊なる點である。又いかに古の盛大であつたかを思ひ起させる點である。すべてが箱庭式の國から行つたものには、その絶大の規模に驚かされる。背景の大きいだけに人間が大きく、考へが何と



なく遠大で物に頓着しないやうなところがある。支那人の心的作用は思想感情共に外部から豫測しがたい。推測しても中々あたらない。而かもかれらの心は極端から、極端に行くから甚ださぐりにくい。氣が乗つてゐるのか、居ないのか、それさへ判らないことがある。又悲しんでゐるのかゐないのか、それも判らぬくらゐ、頗る複雑で判りにくい。

支那人の心理で最も解しがたいことは斷頭臺にあげられた犯人の態度及びその家族の人々の態度のことである。別段佛教からの信仰があつて死後の世界を想像してゐるでもなければ、刑に處せられることを名譽と思つてゐるわけでもない。時には直接の罪がなくして連帶の責任で死刑に處せられ、その方法は銃殺のこともあれば、斷頭臺で首を落とされることもある。支那の政府は罪人を衆人の目に曝すを目的とする故、道途で死刑を行ふとを先づ原則としてゐるがそのときに罪人は實におちつき拂つたもので泰然自若。毫も周章狼狽の色を現さない。萬事さとり切つて何等變事の迫つて來てゐないやうな風に見えてゐる。雷に當人がおちついてゐるばかりでなく、その此の世のわかれに現場に臨んでゐる家族、妻子どもにあつても亦平然として何一つ悲しいやうな顔をするのでもなし、刑を執行する人に何一つ頼むでもなし、誠におちつい

た風に靜かに打ち眺めてゐるばかりである。又首を落とされる時には當人や家族が平氣であるばかりでなく、町の見物人の方でも之をそれほどひどいこととは思つてゐない。元來血を見ることの平氣な習俗を持つてゐる支那人のことであれば人を殺すは豚や牛を屠ると同様に考へてゐるらしい。その證據にその首のおちたあと、五體から迸つて出る動脈の鮮血をいかにも物惜しげに、麵麩を手にして待ちかまへてゐる子供などがその生血の出口にパンをねち込み滴るばかりの血をつけながらそれを喰つてゐるのである。おとされた首は籠に入れて持つて行かれる。かやうな場合に見物人も平氣で見れば刑を行ふ者も勿論平氣である。斷頭の殘刑がこれほどまで四方八方から平氣に考へられてゐることは死刑そのものゝ効力の薄いことを證してゐる。それ故道路は罪人を挽いて歩いたり、古は車裂の酷刑さへ設けられてゐたのである。これほどのことが行はれても左程恐ろしくないと云ふ迄に支那人が殘忍性に慣れてゐると云ふことでは、最早どうも致しかたがない。その刑にあふものが平氣であるといふは如何なる理由によるものか。因果應報と云ふ考よりも、むしろこは天命なりと觀じあきらめてゐるによるものと察せられる。つまり成り行きに委せて不平らしいことは云はぬときめてゐるらしい。そこ



らは人間が大きいと云はうか、また樂觀的であると云はうか。そして無教育に此の泰然死につく態度のものが多いが。それによつて國民的特性が判ぜられるわけである。同時に支那の地理や、歴史の背景がこれら大多數の支那人の頭を支配してゐるものと判定せられるのである。

支那人の思想感情はかやうな特性を有してゐるが爲め、見方によつては、或は支那人は無神經であるやうにも見える。無頓着ものばかりのやうにも見られることがある。北部支部では不潔を不潔としない習俗の如き、言葉のみ徒らに美にして行ひの之に伴はざることの如き、また物事にやり放しのこのみ多く結末をつけることを急がぬことの如き、また名譽心に乏しきことの如き、すべてこれらは支那人に接してゐる人々の夙に知り盡してをらるゝことゝ思ふがこれらはすべて支那人本來の持ち前なるが如く日本人には容易に見出すことの出来ない特徴である。支那人の樂觀的生活を營み、その不得要領のうちに要領をえてゐるやうな態度は大陸國人の特徴であると共に、又その長所の一つとして數ふ可きものであらう。

## 十 支那民族生活の推移

### 四十三 人間は一生のうち花の上海へといふモットーを

支那内地で田舎生活をなすつゞけてゐる支那人どもに云はせると、上海の租界あたりに來て生活をしてゐらるる者は羨ましいと云ふ者がある。道路はアスファルトの立派な文明道路が出來て居るし、橋も美しい鐵の吊橋がかゝり夜は煌々たるアーク燈が點ぜられ、電話があり電車が、乗物は尙自動車、汽艇何でもござれである。又衣食住には不自由なく、すべて欲しいものは何でも皆完備してゐる。娛樂機關に料理居、茶館、競馬何一つ設備に不足といふものは何もない。



殊に上海工部局・ユニシバル・カウンシルの行政上の權威で、その在住者の生命財産といふものは安固に護つてもらへる。西洋人や日本との貿易取引も自由に出来、又内外各方面への旅行も便利でわけではない。かねの運轉は活潑であるし、市況は極めて活氣を呈し、實に飛び立つやうな感じを誰れ人にも與へる面白いところである。どうせ支那で住まふ位なら、上海のやうな面白い處へ出て、住まひたいものだとは、多くのものの偽らざる告白である。田舎にゐるものから見れば、上海が珍らしくかくの如き美望の中心地點となつてゐることは當然である。

上海といふ所は全くかやうな感じを持たせてゐる花の如き賑やかな所である。日本から出かけて行つて見ると懦夫をして起たしむるほどの處であるから、上海は東洋第一の最高の活躍舞臺として推すことが出来るのである。

ところが四川の奥地から、その船頭水先案内などで三峽あたりに住まつてゐるものを上海に呼んで見ると云ふと、二三日もゐると、とてもその刺戟が多過ぎて見目苦しくなりて、居りきれなくなり不愉快でたまらぬから、一日も早く田舎へ歸りたいと申出たものがあつた。それ位或る者は上海に行くとき馬の目を抜くやうな處だから、とても居れない所だと恐れてしま

つてゐるものもあるのである。

上海は公平に云つて忙はしい處である。平素呑んびりした天然自然に叶つた生活法でもとつてゐるものから云へばとてもやり切れないところである。しかし上海はその生命財産を安心して落ちつけてゐらるゝと云ふ處から一種の極樂淨土だ安全地帯だとも云へる譯である。見かた次第では上海にゐる支那人は、一番幸福である上海を見ずして死ぬるものは支那人でも日本人でも不幸なものであると、かやうにいふものもある。なるほど支那商人などの、上海で南京路や北京路、九江路あたりの目抜きで随分大きくやつてゐるものがあり、随分成功してゐるものがある。寧波出身者の巨頭連がこの上海財界の中心人物となつてゐるのに照して見ても、實にその支那人が上海の富、上海の殷盛振りを背景として隆々たる發展を遂げつゝあるか、判るのである。又はたか見ても、上海なればこそあれだけの大成功を納めることも出来るのだといふことも判るのである。又上海租界の街路を去來する支那在住者の姿を見ても、今やその辮髮者流の影を見ないのみならず婦女子の纏足せるものを見ることも甚だ少ないのである。

言葉は上海語は例へばサデイファン(どこへ)スウコトンベイ(四錢)などといへる如くその發



音の様子が何となく下尾で聞こえるやうな気持ちが出てならぬのであるが、その市民の行動振りや来ると誠にきびくしてゐて爽快味がある。上海の支那人には固よりその反面に云ふべきこともあるが、大體垢ぬけがしてゐて気がきいてゐる。その日常垢ぬけのして、すがすがしい生活をしてゐる所が、特色である。

かやうに見ると上海生活は之を田舎の住まひに比べてどの位進歩的であるか判らぬ。況んや朝夕外人とも接して外國の長所、都合のよいものをも、眞先に取り入れることが出来るのであるから、當世流の支那人には上海が喜ばれるのもその筈である。「人間は一生のうちに花の上海へ」のモットーが支那の田舎で叫ばれてゐるのもそのわけであると思はれる。それ程に上海は今日人氣を引いてゐるのである。

#### 四十四 支那側に改善を望む點の數々

上海の町は東洋一の町だけあつて、そのバンドから大馬路、二馬路、三馬路、四馬路、五馬路に仁記路、北京路ああたりのあの繁榮振りと云つたらないのである。しかし同時にブート

ン側の碼頭、支那町の碼頭乃至楊樹浦、威塞士、メール・ウラフあたりの江岸に騒がしく働く労働者の手合ひの汚い姿にその働き振り、又その邊の街衢で車など牽いてゐる苦力どもを見せつけらるゝときは同じく支那人の上海生活といふうちにも雲泥の差のあることがよく知れるので實にひどいものである。初めてのものは、上海のこの鬼の如き恰好して取つて嚙まうと云ひ出しさうな様子を見せてゐた大の苦力の群にでも出くはさうものなら、全くあとすきりでもするであらう。天津方面にも汚いのは随分あるが、上海はそれ以上である。それが英米佛伊等の列國の貴婦人の盛装して、靜安寺路はマゼステイツクホテルのダンスにでも出かけて行かうといふ連中と同じ道路で行きちがつてゐるのである。その光景の場面は上海でなくては、これ丈の雲泥のコントラストは見られないのである。

世界何れの國だつて、勿論、船着きには汚い労働者階級のものも澤山あるわけであるが、上海のやうな處は殊に多い。租界の西人どもは支那人のかう云つた手合ひに對し目を皿にして眺め返してゐるのがある。一つはその穢さがあまりに度を越して随分異臭のものをブンブンと糞、にんにくの臭い氣を吐いてゐるに據るのである。こは普通の支那人が之に觸はられたら厭



やな氣持ちのするといふほどに毛蟲の如く見られてゐるといふことは事實である。

しかしかう云つた程度の碼頭の苦力があつてくれなくては、上海入港出港の船の積荷、揚荷は簡単に又格安に行かない。その勞働賃銀の高くなつた、なつたとはいひ傳へられてゐるものゝまだまだいくらも高くはならないのはかゝる汚い連中の澤山あつてくれるお蔭であると思へば、之を毛蟲視するなどいふはよいことではない。西洋貴婦人もその處を考へて少しは鬼のやうな苦力を愛する氣持ちにもなつてくれてよい事と考へるのである。

上海に於て一般支那人と西人との間柄はどのやうになつてゐるかといふに本來いふと西人のおかげで支那人は上海で有りがたい經濟生活を營ませてもらつてゐるわけであるから、一にも二にも西人に感謝してゐるべきであると思はれる。生命や財産の安心の圖つてもらへる丈でも感謝してよきさうなものである。尤も澤山の中には西人のところに忠實にとめて感謝してゐるものもあり、別れに臨んで涙ぐんでゐると云ふやうな精神的のものもないではない。かやうに感心なのもゐることはある。けれども一般から云ふと支那人は民族的に租界の當事者に向かつて、又その個人個人に向かつて何等感謝する所のあるどころか、反對に反感を持つてゐるもの

さへも續出して來て、今やその五卅事件以來輿論が大分八釜しくなり、排英の氣勢が激烈になつて來た。

そのまだ支那民族の民族的情勢の高まつてゐなかつた時分は固よりのこと近頃までこの支那人が、自分の國土の一部分である上海の土地に於いて随分しひたげられて來た。現今でも尙かなりひどい冷遇を外人から受けてゐる。その不平等條約の存立するが爲めであらうが、支那人としては甚だ殘念であり、日本人から見ても氣の毒な同情すべきひどい取扱ひを受けてゐるこゝが多いのである。

第一 あれ丈上海で納税額の義務を負うて上海の一大財源となつてゐるに拘らず、工部局の委員になれることは拒否されてゐること。最早や評議員などといふ手ぬるいものでは満足しないのである。

第二 領事裁判の尙存在してゐること。こは今は問題となつてゐるから、遠からず撤廢せらるることであらう。

第三 バブリック・ガーデンやベビ・ガーデン佛蘭西公園などに乳母を除く外支那人は絶対に



入場せしめないこと、「華人免進」とはこれである。

第四 租界で西洋婦人から蹴られてゐる支那車夫を目撃することがある。

第五 倶楽部メンバーに支那人を入れないこと、これは日本人に對しても同様の拒否をなせるものがある。

第六 西人は支那人、日本人共に気分の上で尙劣等視せる人種的癖見がある。

思ふにこれらに就いては、相當支那人側に先づ反省を促すべきものがあるのであるが、西人の方にも單にその人種觀念の爲めのみやつてゐるのでないことがよく判つてゐる。公園などでも、實際に之を入らせることを許したなら随分ひどい苦力どもが這入り、圖々しく不快の感じを與へ、だらしない姿をして、夏の木蔭にねそべり、人をして顔をそむかしむるやうな見さまのわるいことを演ずるものを生ずることがあるであらう。

租界の西人から支那人の人々が時としてつらにくげに見られることは、確かにあることである時としてその見えすいた嘘を云つたり、又前日の言質を囚へて詰問するとそんなことは云つた覚えがないなどと白らばくられたりすることがある。遠方で眺めてゐる時は何もかも支那人に同

情して然るべきものゝやうに見えてゐるが、實際に現實の問題に當たつて見ると随分うるさくあつかましい、又圖々しくかなり面の皮の厚いものであると云ふ點もあるのであるから、腹の立つ事は毎日のやうにきつとあるのである。

又支那人の習性からして、上にもいふ如く下等な連中が軒の下、樹下どこにでも夏季穢いなりをし、ゴロ寝をして人をして不快の念を起こさせるのである。又立派な紳士でも總司官程度の名流でも、人の前で手鼻をかみ或は卓のうち側へ平氣でその指についてゐるのをすりつけるど云つたやうなことをするものもある。こは支那人の爲めにいかに辯護をしようと思つても出來ない習性で、誰れでもやる。決して支那人士そのものは悪しくなくてもその習性が穢くなく好まれない。氣にくはぬと云ふ點がたしかにあるのである。

自分共の如き支那の習慣にやゝ慣れた者は別に支那を下等とも何とも思つてゐない。寧ろ反對に上等の部に屬する事例をも澤山知つてゐる。よい方の特徴も心得てゐる。吾人の目にはさまで支那を悪く感じもしないのである。けれども一面から云ふと西人どもから支那人に改めてもらひたいと考へてゐる習性はたくさんある、又西人から馬鹿にされても仕方のないことが、



支那人側に澤山あるのである。それ故虚心坦懐支那人側にも或るところは自らの爲めに反省改善して行かなくてはならぬと、支那人だちに忠言したいものと考へてゐる。その改む可きことを改めるやうにしなければ世界の同情がなくなるであらう。又支那の民族は元來大度量を有してゐるからして、物を受け入れ改めて善につくと云ふ、ゆとりは確かに有してゐるのであると信ずる。

#### 四十五 大英國はよい學問をした

又西人側を考へて見ると、西人にも不都合なことが多い。その租界の根本義を忘れ自國の領土と同じ考へてゐる。肝腎の主人公支那人側を無視し之を侮蔑し勝手氣まゝの考へをして少しも反省せんとするやうな氣はなかつた。云ふ迄もなく日本は西人と立場がちがひ日支兩國人は終始兄弟の關係で御互によく仲間の氣持ちになつてやるべきである。支那の人々が日本に來ても同じわけである。大いに日本は度量を大きくして支那人を受け容るゝ丈けの暖かい氣持ちでゐることが必要である。

支那では西人がこれ迄發表されてないことで支那人に随分踏み付けた仕打ちをして、支那人を殺してゐる事も奥地の方では度々ある。支那人が之をあばかんとすると、非常な壓迫が來るいつぞには天下に非を鳴らすのときが來ることゝ信ずる。自分たちの手許にでもその方面の具體的の例を持合はしてゐる。時には數百人の支那苦力を列車で轢き殺してゐる事實さへある。ヒューマニズム人道主義もキリスト教もあつたものではない。西人の支那に於けるキリスト教などいふこともよい加減なものであると云ふは近來支那青年すべての看破する所となり輿論ともなつた。支那人側の方にも色々缺點もあらうが西人側が、随分それ以上のひどい事をしてゐることは事實である。

第一よその地面に於いて、傍若無人の勝手なことをしておきながら支那側から民衆の力でさわざり立てるとすぐさま武力を以つて脅かし、きめつけようとする。支那の政府の微力な爲めであらう、支那に對してふみつけたことばかりして支那を弄ぶのである。

此の度、支那側が英國から漢口や九江の租界を取り回した手際は頗る鮮かである。英は八十年間の總勘定として天津上海を除き他の居留地を返還せんとするの宣傳をなし、そして日佛等



を誘つてゐる。英人はその名は支那に花をもたせる爲めにすべての租界を還すかも知れぬがその實をとらなければ止めない。そこに老獪な手腕が見えて来る。日本が青島を還すとき一緒に英は威海衛を返す筈であつたのに、今以て決して返すどころでなく、此度の全支に渡る返還地の中に之を入れてゐないのは怪しい。支那はどこ迄も研究すればするほど、奥底の深く知れぬ國であるが、眠れる獅子の如き國とでも譬へて云つて見れば適評であるかも知れぬ。

過去八十年間も随分外國から虐げられる丈虐げられ、その間外國から投資をするものがあれば、それに十二分の投資をやらせておいたのである。しかし時期が来れば外人に急轉直下に總勘定を迫るのである。外人があまり踏付けた横暴振りを發揮するものだから、すぐさま機敏にいきなりやつつけて了つた。それに對し支那側では「支那をあまり踏付けたことをするときはこの通りだぞ」と云つた風にやつた。漢口租界の奪回事件は之を意味深長に見るべきものであると思ふ。又英國は之が爲めによく支那とはどんな味のある國であるかといふことが心から判つた。英國としては何よりよい學問をした。學問はかやうにして體驗から來なくては本當のところは判らないのである。

たゞ英國が漢口で食らつた不祥事を不祥事らしくないやうに胡魔かす爲めに、全支の英租界を返すが如き、宣傳を敢へてするといふは頗る注目に價する。英はその實に取つて名を人にやる老獪な外交手段をのみこれ迄講ずる。これは南洋の委任統治問題でも、その赤道を界として實にケン粒のやうな香しくないものを、數こそ多けれ之を日本に恩をきかせて委任させてゐる態度をとり、そして英國は何くはぬ顔をして赤道以南の實のあるよい處を取つてゐる手際などは支那としてはよく／＼見ておく可き所である。英が亞細亞人に對してなす所のはすべて眉唾的のものばかりである。しかし最近英支の悶着事件は支那人の民族生活中稀に見るよい手際であつてその支那側がよく英國を向ふに廻して天晴れの腕を見せてゐるところは、亞細亞人勃興の氣分を漲らせてゐる上から見て痛快な事であるのである。

過去永年に亘る支那人の民族生活がいつも屈辱的の側に立つてゐたのに反して、今や時勢の推運に伴ひ次第に支那側の優勢を見るに至つた。今後そのどれ位續くかは未知數であるが、ごもかく吉祥として賀すべきことである。人はよく支那の統一を夢み、支那に健全なる國家政府の樹立を望むものがあるが、かゝる潔癖性のことのみ繰返してゐるうちに支那それ自體は次



から次へと推移變轉して行くのである。北方なり南方なりその時に善處するの方針を取り又それに對し得る丈の準備用意として相手方の智識を有してゐること、これをやらなくては嘘である。

#### 四十六 日本の朝野には民族生活の推移についての

##### 智識と用意ありや

英支の問題は問題だけに一々その影響が細大となく日本に及んで来る。従つて或る程度までの卷添へを食ふ位のことには日本もいつも覺悟してゐなくてはならぬ。その無爲無策である事を蔽ふが爲めに内政不關涉を繰返してゐるのは愚である。又追従を追従らしく見せないやうにする爲めに之を協調々々といつてくり返してゐるのも愚である。もし我が居留民の生命財産に危険が迫るやうなことが出来たときは、我々は嚴として許さざる用意があるなんて、中學生の肩を怒らしてにらみつけてゐる如きうはかすりのした態度を示してゐるだけでは滑稽であつて頼りない。苟しくもその用意があるならば、その前にどれだけその民族生活の推移についての

智識が積まれてゐるか。調査研究はどの邊まで出来てゐるのであるか。又どれ位まで親しみの交はりが出来てゐるのであるか。老朋友の關係で行かなくては物にならぬのであるが、それが果して出来てゐるのであるか。又平素手が廻されてあつたかどうか。その邊のことになると全く日本は心細いのである。

日本はとかくいつも北方政府軍閥の張作霖のことのみ一所懸命になる。そして地方の問題になるといつも軽く見る傾がある。支那に對して官尊民卑見たやうなことをいつも考へてゐたのでは大事な相手方を逸して了ふことになる。日本は列國側にも支那側にも双方に獨特の立場を有するのであるかう、英が租界をさへ投出せば、あとはどうでもよいといったやうな簡單なわけにはいかない立場に居る。十分の調査があり十分の智識があり、而して後將來に對する見通しもつくわけである。今日南方の露支の關係がどの程度のものやら、國民政府及黨員の腹の底が那邊にあるものやらその邊は薩張り判つてゐないのである。現實の支那民族生活の目標は非常な推移があり、思想輿論の力で南方國民政府の實勢力は如何に消長しつゝあるのであるか。之に對して北方張作霖の側はどの程度まで思想輿論の力を背景としてゐるか否かも疑はしく



且つその軍紀士氣の點に於いて果して南方と相軒軽する所のものあるや否や。この邊の調査は引いて日本の消長と密接の關係を持つてゐることであるから、それらに對しても日本は十分なる見通しのつく丈の支那内情に就いての智識を有してゐなくてはならぬ。支那と協調を保ちつゝ英米佛伊を指導して行く丈の經綸を有する爲めには、今日までの如く支那の輪廓を遠望するのみを能事とするなく、更に一步を進めて支那民族生活の實體に這入り之をよく具體的に實例を一々つかまへて調べ上げておかなくてはならぬのである。

吾人はこゝに抽象論をやめてどこ迄も實際問題として、この民族生活の推移に目標をおき、江湖の士に支那現代文化の神髓に向つて研究を進めて戴きたいと考へてゐる次第である。

## 十一 支那民族生活の表裏

### 四十七 支那民族性に現はれたる裏おもて

物に裏おもてのあることは日本人は嫌ふ傾がある。けれどもこは宇宙自然の理法に據つて然かるもので必ずしも之は拒むべきものではなく、寧ろ之に順應する方がよい場合が多いのである。速い話が地球の廻轉による一日二十四時間の間にも半分は夜間と云ふものがあつて晝間と相表裏して、又随分その夜があるが爲めに人間は調法して居るのである。支那でも古來云ひ古されて居ることであるが、かの陰陽思想の如きつまりは事象の裏おもてを指して居つたものに外ならないもので陰陽學なる學問さへ出來て居る。又現實の問題としても支那民族は此の裏おも



もてを日常生活の上に巧みに用ひ又それで調法して居るのである。

支那人の日常生活は之を實際に極めることは今日世界的の興味となり又支那を理解する上の一番大事なこととなつてゐるに拘らず日本では等閑視されて居た。否いくらか馬鹿にしてゐる氣持ちも手傳つてゐた。これまではあまり注目しなかつたものである。ところがこれからはさうしてゐられなくなつた。社會の事柄すべてが民衆そのものを相手に萬事計畫されなくてはならなくなつたと同様に世界の國際問題までも支那四億三千六百萬からある所のこの恐ろしい民族の實相輿論を知らずしてはやれなくなり、又それでは時代おくれになるの感がある所からして、列國は争つて支那の國情、民衆に關するあらゆる智識を求めんとして來た。日本は列國以上に支那の國情わけて支那人の不斷の生活の狀態から社會の特色牽いては民族心理、又家庭生活といつたやうな問題までを取扱つてよく之を徹底させる熱のあるものが出なければならぬことになつたのである。

思ふに今や東洋の形勢から云へば日本人は日本の研究と同じ程度に支那を知り悉して居る可き時勢となつた。日本、支那何れも日本人としては差等を附することなく兩國共之が十分なる

智識を常識として有すべき時代となつたのである。從來のやうに支那を外國視してその輪廓を知る程度に止めてそれ以上は調べないで等閑視してゐるといふことは許さなくなつた。日本人は從來とかく先進國の歐米のことのみ着眼し日本よりも以下の如き感じのしてゐる支那國內の社會狀態などにつきては無頓着でゐたのであるがそれは最早や時代おくれのこととなつた。日本が自ら世界の一等國を氣取り東洋の盟主を笠に着て貴族顔をし支那四億萬民の民衆の心理とその社會を侮つて居ると云つてゐると云ふやうな態度は今や非常な時代錯誤であることがよくよへ自覺せらるゝに至つたのである。日本の國是は將來必ずやこの支那四億萬の民衆を背景にその輿論の那邊にあるやを常に考慮に入れなくては日本の消長運命にも關すると云ふ時勢になつて來た。誰れしも云ふことであるが日支は共存共榮の實を擧げなくてはならぬ。それには何としても支那人の日常生活の實際を見てその特に著しい點又その機微の間に窺はるゝ民族生活の表裏の現象のことを先づ第一に注目しなくてはなるまいと思ふ。

支那人の民族生活に現はるゝ表裏の使ひ分けはささいなつまらないものにまでも明白に現はれてゐる。支那の人はそれを普通のこととして考へてゐるから何とも思つてゐないのである



が、日本人の目から見ると聊か異様に感ぜらるゝものが色々あるのである。

#### その一 褲子、敷物、卓物等に見る表裏の使分け

立派な貴顕紳士の間に交つてゐてよく氣のつくことはその人の身の廻りの衣裳の仕立てかたである。その緞子、絹帛の見事な所謂綺羅錦繡をまどうて居乍らその仕立てはといふと第一にその裏地を見るといふと興のさめることが多いのである。といふのはその表地にはいくら立派な錦を用ひても人の見えない裏地に用ひたものといふと木綿ものゝ極めて粗末なものを當てゝゐるのである。日本で云へばズボンに該當するクーツ褲子なるものを取つて見ても判るが極上のリンヅ綾子を表に用ひてゐる乍ら粗末なひどいあら布の裏地を之に合せてゐるのである。日本でならば少くともせめて秩父なり鹽瀬なり何か相當の絹布を用ひるところであるが支那では存外なものでそれで平氣である。

また支那紳士の邸宅を訪ねて客室や主人の書齋などに用ひてゐる敷物、金欄緞子の見事なものを見てえらい立派なものであるわいと思ひ尙念の爲め一寸裏地にはこゝでは何を打合せてゐるかと思つて見るとこれも亦相も變らぬ木綿地の悪いものを用ひてゐる。或は又卓上や凭りかけ椅子

に掛けられてゐる立派な蔽ひを見る。婚禮の時とか年中行事の時などには随分見事なものが机掛けとして飾られてゐるのである。けれども試みにその裏地を見ると全くひどいのでそれは同然である。いかに費用の方に餘裕があるうちでもそればかりは別である。その必要がなく又人に見えない所であれば出来るだけ粗末なもので間に合はせるといふ習慣があるのである。これほど裏とおもての材料に區別をつけるなどは氣が咎めさうに思はれるのであるがその邊は全く平氣なものである。之が普通の習慣となつてゐるのであるから何等見ともないとも氣恥かしいとも思はないのである。

#### その二 建築住まひに見る表裏の使分け

支那の都鄙をあるいてゐてかなり驚かされるのはその住宅建築が遠方から見るときは堂々としてゐるやうに見えてゐてその實近づいて見ると何のことはない。殊にその内部を覗き込むに及んであきれられるほどお粗末で又穢いには少々閉口することがあるのである。

支那建築の古いものは今日之を概評して見ると遠美近醜である。殊に山水に配せられたる樓閣の如きは畫圖に見る樓閣山水と同じく誠に雅致に富み風景を添へてゐるのである。しかし近



づいて之を見るに至つて案外興のさめるものが多いのである。されば支那民家の如きその輪廓を遠方から眺めてゐるときはいかなる名家の住まひにやあらん。又いかなる大廈高樓にやと思はせるのであるが近くに寄つて見たら興がさめるのである。今日支那南北の地方に見る中流どころの住宅なるものはそこからの見かけ倒しのものが多く仔細にその構造や部分々のデテイルに這入つて見るとよい加減な間に合せるものが可なりあるのである。

されば舊都を訪ねて古城の上から城内の街衢を眺め大廈高樓の堂々たる家並みつゞきの觀を呈してゐるところであつてもそれは實際に一々降りてあるいて見るといふとその割でなく豫想を裏切らるゝことが多いのである。支那の建築に、輪奐の美といふことは常套語の如くになつてゐるが大抵うちはその輪廓だけは堂々としてゐるからすべて皆輪奐の美を盡して居ると云ひ得るのである。又その規模も大きいのである。日本の民屋の伏せ屋になつてゐるものゝみを見てゐるとこれは朝鮮の農家の細で屋根の縛りつけられて居るものよりは増しであるが支那の軒や棟の高いのに比べると全く雲泥の差を感じるのである。それ丈心構へも大きいのである。

けれども兎も角住まひとして見るときはその形式の見上ぐる計り壓せらるゝ位に大きく、そ

してその堂々としてゐる割合に内部のひどいには潔癖性の日本人は特に異様に感ずるのであつてその形式と内部のあまりに懸隔があり過ぎるので變に思はるゝのである。

### その三 乗物に乗る乗客心理の表裏

北京に出來た城内電車の乗客心理を見るにその三等の方の室のガラ明きになつてゐるときは喜んでその三等に乗つたらばよきさうなものであるに好んでむしろ世間體を考へ満員の方の一等へおしかけ乗込むのである。中には車掌臺に無理やり乗つかり我れこそは一等の乗客でござるといはぬ計りの顔つきをしてゐる。かうしたわづかの處にでもその體面形式を考へてゐる様子はさすが支那式で興味深く考へさせらるゝのである。これは北京の話であるから特に著しく見らるゝのかも知れぬ。つまらない見えを切らなくてもよい所であつてもその心に裏を包み表面をつくらうとの心理の遺憾なく現はれ面白いところである。

又支那各地方出身者の會館に於ける話であるが、そこには同郷出身者の間に立派な相互救濟事業のやうなことが行はれ廣東から來てゐるものは廣東會館に集まるといふ風である。ところでそこに一人の不幸なるものでもあればそれが身の上の香ばしからぬ事又色々ゴタゴタのこと



など決してそれを外に洩れないやう萬事内部で片づけばるを世間に見せぬやうにしてくれる。こは日本だつてあることであるが支那人には特にその邊の友誼の厚い美しい所が見られるのである。殊にその間の裏面の秘密は實によく守つてゐるのである。

#### その四 文物制度表裏の使分け

支那はよく物を並べることが好きで文物制度規則何事でもざれ形式だけは美しく整へる。實業學校でも小學校でもその章程だけは中々立派に列國並みに組み立てる。又よく書き立てもする。しかしそれだけの話で決してそれが實現されてゐるわけではない。それは論語と同じわけである。

大清會典などを見ても又唐あたりの律令などを見ても實に條理整然たるものがあり、文質彬彬とも云へるのである。しかし文字上に書き立てることは支那人の最も得意とする所であるのであるからその事實行はれて居るや否やは別問題である。禮儀威儀を正すと同じくキチンと周禮、禮記の式に書き上げて後世へ残すことだけがその第一目的であつたのかも知れぬ。今日の社會の實際から考へて見るとよい加減のものであつたらしく考へられる。表面の形式を整

へておくことに特に興味を持つ民族であるから制度規則を作ることその事を實現するだけで大半目的は達してゐたのかも知れぬ。その裏に實を擧げることが教へて問ふ所ではなかつたらしくも見える。

#### その五 阿片禁絶施行に就いての使分け

支那では上下悉くの人々の民論は阿片の禁絶と云ふことにある。さればにや拒毒會なるものを四百餘州にこしらへて極力阿片吸煙の陋習を根絶することにつとめてゐる。實によろしいこととて吾人東洋民族はこの拒毒會の實効に多大の望みをかけて居るのである。

ところが全然これを裏切る別の現象が南北地方に行つて見るといくらでも見出される。といふのは其の材料たる罌粟の栽培は之をなすだけ澤山獎勵して出来るだけ多くの税を出させるやうに且つ又その製品の阿片そのものになるべく多額の税をかけて地方の財源に充てやうとしてゐるものである。されば地方では殊に四川雲南貴州といった奥地に在つては出来るだけ多くの罌粟を作り阿片を製造しなくては地方官憲の希望に添はぬわけである。

阿片禁絶の裏おもてにかゝる使分けのあることは一寸異様に考へられることであるけれども



よくよく地方の事情を審にしてくるときは實は全支にわたるこの禁煙の問題もよい加減のものとなるのである。表面だけを見て来たものは屢速断をして曰くその毒蛇の繪に中國滅亡の意をふくませ此の蛇ゆゑに中國は亡ぼされる。よろしく國民たるものは兵農工商學生の別なくすべて一致して之を退治なくてはならぬ云々と云つてゐる。中華民國が學國この毒蛇たる阿片に對してかゝる態度を取つてゐることはいかにも奇特の至りであるやうに見える。

ところが支那では此の阿片問題ほど裏おもての使分けが巧みに行はれてゐるものはない。支那は阿片を禁じてゐるとは云つて居てもかゝる反證の擧がるのを見ると又一方に人情として可愛いところが見出されるのである。と云ふのは支那人は永久に阿片の趣味から離れるとは出来ぬ。趣味は理屈ではないのである。全く思案の外であるのである。これが蛇のポスターやピラ宣傳でやまるやうな簡單なものではないのである。もはやその牢として抜く可からざる深い根をおろしてゐる所に行つてゐると見なくてはならぬのである。

#### 四十八 支那民族の體面論に同情す

舊正月の頃支那の田舎町で家庭を訪ねて見るとその大客廳(應接室)の正面、姿見の鏡の縁に持つて行つてたくさんの名刺がベタ／＼と貼付けてある。又七八寸大の紅色名刺が恭しく高く鏡面の硝子に持つて行つて仰々しく貼付されてゐるのを見る。あらずもがなと思はれるのであるが盛に殆んど鏡に姿の映らない位一杯に飾り立てゝある。これは何の爲めであるか。單に美しく飾り立てる丈の意味であるかといふとさうでない。無論これは虚榮の爲めの仕わざであると解せられる。曰く

「此の家には、これこれの交際がある。刺を通じて來訪したものがこの通り澤山ある」と説明に及ぶのである。これは日本の田舎に、理髮店などに年玉祝儀をもらふときは此の筆法であとのに婉曲に催促してゐるやうなのを見ることがある。それとはいくらか違ふがその宣傳の目的丈はよく似てゐる。年のくれ、又は年中いつ行つて見ても夏の季節になつてもそれを剝がさないで見せびらかしてゐる處がある。

思ふに支那民族の社會にては、どこの國だつて體裁を氣にしないものはないのであるが支那の社會は又格別である。時には人をしてハラハラさせるやうなことまで云ふことがある。例へ



ば支那の都鄙で若し自分がよい新しい支那服を着て人の集まつてゐる所なんかへ行つて見ると支那の友人から直接いきなり

「大層よく似合ふ仕立てかただ。馬褂兒、大褂兒、褲子すべてでそれはいくらしました。北京はどここの成衣局で仕立てさせました」

といふやうに聞くのである。物の價をきくのは禮になつてゐるのであるから、挨拶のつもりで御愛想に云つてくれるのである。

「これでもすべて六十弗はかゝつてゐませんよ、前門外の呉服屋に誂へたので成衣局にさせたではありません」云々と話したことなどもあつた。全く物の價を聞くのは友人に對する禮である。相手の顔を見てその入費のかゝつたことに同情して随分奮發したものだねといふ氣持を現はさうとするに過ぎないのである。

尙靴でも帽子でも見あたり次第に聞く。場所柄かまはず買つたときの相場を質問する。こんなことは日本では失禮の極であるが、支那人はそこは天真爛漫であるから少しも遠慮などしない。要は相手の品物を讚美するの精神に出てゐるのである。

されば時としては學校の先生などに細君を買つたとき（支那では迎へるといふよりも買取るのである）の相場はいくらと來ることすらもあつた。又あの校長の細君は六百弗ぐらゐなものであらうなど云ふ界限の下馬評を聞いたこともある。又事實船着場などでは船頭同志の間でかみさんの賣買授受の行はれることもあるのであるからかう云つた打ち明け話しは長江方面には珍らしくないのである。かやうなわけであつて、そのものゝよいのはよいと云ふ。ハオハオ好いと云ふのである。上海語であるとホレシと云ふ。何でも物を褒ちぎるのである。たしかにこれは相手の體面を發揚してやるわけになるのであるから、禮に叶つてゐるのである。

しかし餘りそのよい評判が立つときはそこで界限の噂が轉々として督軍大官あたりの耳に入る。するとそれは耳寄りの話だと云つて、どうかして手を廻して微發に及び返してもらへないこともあるのであるから、餘り大きな聲をしては飛んだ迷惑が來るので亭主は苦い顔をするのである。

支那民族の體面論から來た風俗はいくらでもあるが、左に興味のあるものを二三述べて見よう。



その一 節婦孝女の門閭旌表

支那人は頌徳表を奉ることを好む。こは又支那の美風の一つであるが實際その爲めよい氣持になる民族でもあるから随分面白いことが之には行はれるのである。四川省の長江上流萬縣のかみに行くとき豆腐屋夫婦が頌徳せられ後世に至り土民どもから石像まで立てられ「漢君墳墓」の石刻の添へてあるのを見たことがある。しかしかうした一平民で世の儀表となるものに石碑立像が刻まれてゐるなど云ふのは全く珍らしい方である。普通支那の城内や田舎の町外れその他陵墓などに見る所謂旌表としてパイロウ牌樓式ものの立てられてゐるものを見るに、例へば次のやうな文字を見る。

節孝旌表の聯句に

柏節千秋凌碧漢

氷心一片映清流

旌揚貞淑培風化

獎勵家邦樹典型

なごど色々な佳句が掲げられてゐる。節婦孝女は之を廣く天下に求めるならばいくらでも各方面に求められるわけである。田舎の江岸にもよく孝子岩といふのがあるので之は證明されてゐるのである。然るに苟しくも節婦孝子の名に於て石造牌樓の樹立せられてゐるのは大抵のものは官吏の細君、役人の子女に限られてゐるのである。官吏には寄附金がよく集まる。集まらないときは高壓で集めることも出来る。又收賄の方法で石造の立派なのを建て、日本でも別荘を建てそつくり進呈する御用商人のあるやうなわけにかゝる方法はいくらでもある。その爲め門閭に旌表せられた所の節婦孝子は嘘いつはりものではあるまいがそれ計りが村の龜鑑典型ではない。今少しく民衆本位に選ばなくては意味をなさないといふ感じを常に抱かせらるゝのである。

けれども支那の官吏だちはその思ふ所、自由自在になる所からして、かゝる體面維持面子の發揚といふことになるとかやうな勝手なことをして自分のうちのものゝことをやるのである。これもしかし單なる體面や頌徳以上に一種の形式表面をつくらふの虚榮の考が主となつて行はれたものと思はれるのである。



その二 文字美に現はれたる體面

支那人の辭令に巧みであること。巧言令色の特色を有することはこゝに贅するまでもないことである。つまらないことでも支那人の筆にかけると實に美化して現はされる。されば文人の詩文は固より誰人の手紙を見てもその文句は實にうまい。感心させられるのである。その人を敬し又人を反らせないやうに且つその體面を重んじてよくうまく書き立てるのである。

支那人の文章上の現はしかたはその古書であると書翰の上であることを問はず實にうまい急所を突いてゐる。従つて支那家庭を訪ねてその第壹の房室に掲げられたる聯語を見てもその文字美の手本とするに足るものがいくらでも見出される。例へば

德行 勳天地

著作 壽山河

これは德行と著述とに空間的・時間的の効力の異なるものあるを現はした句であるが尙更に詩書、孝悌に就いてはしんみりとした處を例へば

天地間詩書最貴

家庭内孝悌爲先

の如く歌つてゐる。又江南で杭州西湖孤山に遊び林和靖の放鶴亭を訪ねて見たが、その林和靖が鶴を愛し梅を愛してゐた気分も誠によく又上品優雅に現はされ、それが亭の左右の圓楹に高く掲げられてゐるのを見るのである。即ちその聯句に、若し梅の消息を問はゞしばらく待てよ鶴の歸り來たるをといふ有名な語である。

若問梅消息

且待鶴歸來

これが温潤優麗な隸書體で筆太くたつぷりと書かれてゐる。誰か之が前に佇みたる人はその林和靖の人柄を慕はしく思はないものはあらうか。その梅林に遊び又鶴塚を訪ね孤山半日の清遊はこの聯の芳語によつて十分に味ふことが出来るのである。或はよく民家に見る扁額で左右に聯句をなすものを見ると例へば

豐樂歲

大平春

花 港

柳 橋

吉祥草

富貴花

凌雲賦

復旦歌

支那民族生活の表裏



雨	我	日	永	梅	雪	綠	淺
風	人	春	酣	柳	煙	紅	酣

の如きものがある。實に何れも簡にして要を得た雅句である。かう云つた文字の弄びかたは支那人でなくては本當の深い墨戲は出来ないのである。その表面を優美につくらふことの技術は支那人の文字の使用に俟たなければ到底その妙趣に入ることには出来ないのである。その最も卑俗を極めたる方面の語にしても之を支那文字の墨戲にかゝる表現法を用ひるならば例へば

偃松入幽谷(偃松幽谷に入る)

と云つた類の語で見らるゝ如く表面は少しもをかしいことはないのである。されば支那の體面、形式と云ふものはその文字美によつてよほど表象され裝飾されてゐるものであるといふことが判るのである。裏面の意味はとる人によつて勝手にとればよろしいのであつてもかく支那人生活の麗しい方面を優美に現はすことが出来るのである。實に突込んで云へば支那社會の多くの暗黒面などでも支那に美しい文字のあるが爲めに大いに文字によつてその體面が保持せられてゐると云ふことが云へるのである。従つて又文字の爲めに逆に欺かれ文字の爲めに實

際の事實を買被つてゐるやうなことも確かに澤山あるわけである。その文字美によつて事實が婉曲に表現せられ文學化せられ藝術化せられてゐるものが多いと云ふことは、支那人の特性を重んずる特性と共に特に注意せなければならぬ點である。

その三 宣傳に終始せる社會生活

支那民族は宣傳好きの民族である。一犬實を傳ふれば萬犬嘘を傳ふと古くから云うてゐるし又市中に虎が出たと云ひ出すと市民はその事實の如何を確かめずすべてのものが之を信じて叫び三度目に傳はるときは始めは「だらう」位の話が「である」となる。所謂市虎三傳といふのが二千年以前の古い時からいひ古るされてゐるのである。

近くは又一時蔣介石が北伐軍の總司令として南昌、洞庭方面の間を去來してゐた時分の頃専ら蔣大人は長沙の米人の病院で外科治療を受けてゐたが遂に死亡したのだと云ふ飛報が大分傳へられてゐたことがある。大分有名な風説となつてかなり廣く擴がつてゐたのである。恐らくこは南京孫傳芳側から出た宣傳であつたのであらうがともかく支那の戦争といへば一種の宣傳戰である。百萬と號しても之で敵を恐怖せしめ退却せしむるとが必要といふときは盛に流言蜚

支那民族生活の表裏



語を放つのである。宣傳、廣告、號外と云ふやうなことはその支那人の最も得意とする處のものである。

又宣傳によつて輿論が醸成せられるのである。よかれ、悪かれともかく支那人には宣傳輿論によつて自動的に又他動的に行動をとりつゝある民族である。嘗ては上海方面から虞洽卿翁を團長とする商業會議所の會員たちより成る實業團體が來朝したとがあつた。團員はそのとき世人も知る如く廿一個條問題を日本の全國商業會議所の面々や澁澤子等の前で頻りに繰返してゐた。といふのは一行がその事に従事し國事に奔走してゐることがすぐその翌日の上海の諸新聞に出ることを必要としてゐたのである。固より双方が實業家のことゝ政治問題などかつぎ出して物にならぬことは百も承知してゐたのであらうが上海には青年學生たちの八釜しい空氣の存するが爲めに渡日後その事に無關心で觀光を事としてゐたやうに見えて翁始め一行の心外とする所であつたのである。しかしこの事はよく記事に出て翁の希望以上に反響があつたから定めし一行も上海の青年の方も満足であつたことゝ信するのである。

#### その四 租界回收の宣傳は面子論のみ

今日支那四億萬の民衆は果してすべて租界の回收を熱烈に唱へてゐるかどうか。自分は今冷靜に考へて見て甚だ之を疑ふのである。一部の政客や青年學生は頻りにその體面面子論からして回收々々と叫んでやまない。不平等條約の撤廢を絶叫して租界の無條件回收を唱へてゐる。支那の體面からして之を見るとそれに越したことはない。

しかし支那民族の爲めに少しく永久に互りて考へて見るに必ずしも租界の回收は支那人の爲めになるものとは極らない。今日此の熱の高まり半狂ひになつてゐる際に之が熱を冷却せしむる如きことを唱導しても耳に這入らないことゝ思ふ。けれども自分としては支那民族の爲めにこゝに大いに再考を煩はしたいと考へるのである。恐らく支那の社會状態はこゝ數年を出でずして又動亂に陥り民衆はその安全を期する爲めに上海なり天津なりの安全地帯を求めて之を避難所とするにちがひない。されば今から絶対に安全な緩衝地帯を得ることを考へておくの必要がある。従來その爲めには全く租界は外國の法律を守つてくれてゐたから安心であつた。今でも現に督軍階級以上の人々は幾百人と之に逃込み安堵の思ひをなして閑日月を楽しんでゐる。又敵にわからぬやうに徐ろに畫策を廻らすと云ふ時も亦租界地を選ぶのが何よりである。かの



廬山や莫干山に行くのは不便であることは云ふをまたぬ。

かやうな意味からしても今すぐ調子づいて租界の返還を迫るのは少々考へものではあるまいか。租界の名が悪ければ支那人の好きな通り顔の立つだけの名稱に變へる事は少しも差支ない。何とかしてこゝに支那民族の眞の安全地帯として新たにかゝる地區を選定しておくのは何としても必要である。然るに之を回收して了つて支那政府の力で治めるなど云ふは返還後の山東青島の例を見てもわかる通りお話にならぬ事が續出するにきまつてゐる。その地の住民はいつもその爲めに苦しまなくてはならず第一不安でたまらない。僅かなケチな體面論でさわぐことをやめて高所大所より今少しく冷靜になり本當に支那人の爲め百年の計を立て直さなくてはなると思ふ。支那人は國として立つよりもどこまでも民族として立ち、民族生活をやつて行く上からその都合のないやうに出來て行けばそれで満足が出來るのである。

今日支那人は唯租界の名のみは返されてもしかしその實を外人に押へられてゐるといふのは本意ではないのである。形式も體面もこゝに至つては寧ろ滑稽化せらるのである。餘り體面の一方にのみ執してゐるとやゝもするとさういふ馬鹿な目を見ることになるの恐れがある。南

方國民政府の連中は若いから租界の安全地帯としての味が判らないやうであるが少しく年を取つて來るとどうしてもかゝる地區の必要を感じて來るにきまつてゐる。ゴツタ返しの中絶えない支那には何としても之が必要である。今現に租界内にゐる名流で功成り名を遂げたやうなお歴々の支那紳士は一人としてこの租界回收と云ふやうなことに熱し足許に火をつけるやうなことを叫んでゐるものはない。この一事を見てもその回收を絶叫するなど冷靜を缺いてゐる一部の政治屋の宣傳に一般支那民族が誤まれ犠牲になつてゐるものごしか自分には見えないのである。

#### その五 四億萬の中國人士を以て如何となす

日本の朝野には支那の爲めを思ひ又日本の立場を考へ出來るだけの日支双方に有利なる方策を考へてゐるものは澤山ある。しかしそれは形式や體面論と云つた輪廓ばかりから立てた方策では駄目である。少々のごとは日本も犠牲にしてよろしい否妥協をして行くべきで先づ支那を第一に立てなくてはなるまい。

それには租界を今すぐ支那へ無條件で回すなどは租界を虎口におくやうなもので支那の爲め



に不親切なやり方と評さなくてはならぬのである。

面子論重きか。生活論重きか。不安におかれることを覺悟してまで尙且つ回收を叫ばなくてはならぬのであるか。むしろ此の際支那人を主としたる共同管理か何かの程度にしておく方がともかく賢明な方法であるのではあるまいか。何の必要があつて急いで今更調子づいて之を片付けなければならぬといふことがあらう。平和的にゆつくりと双方の利益になるやうにそして支那側の顔の立つやうに租界の名でもいめて支那の自主權の精神に添ふやうにして行くことが一番大切なことであると考へるのである。四億萬の支那人士以て如何となす。

自分は列國側に味方して云ふのでもなければ支那側を無視して説をなすのでもない。むしろ老朋友としての支那中華民國の人々の將來を思ひ社會國家の百年の計の立場に之を考へて見ると決してあとで支那の人々の困るやうな考の浅いことはしないがよろしいといふことを忠言するまである。租界は上に云ふ通りその名稱はいかに變へようとも又組織顔ぶれをいかに變更しようとも第一にその安全地帯と云ふ意味で避難所といふ取つておきの所として永久においておくことが支那民族のあらん限り必要なことであると考へるのである。

支那の將來を疑ふわけではないが支那四百餘州には安全地帯と見るべきものゝ設定なくしてやつて行ける柄ではない。又外人にしても支那で安心してゐられる所がどこかに新たに出来なければ取引も何も落付いて出来はしない。馬賊、土匪以外尙官吏に學生側に軍隊側にいくらでも常にその不安のたねとなるものがあり、根絶する氣づかひはないのである。元來支那といふ國はどうせ一種特別の國である。之を歐米や日本なみのキチンとした整然たる國にでもなれると思ふのは支那人士としては少しく見當ちがひの考であると思ふは深く信するのである。

自分は民族としての支那人には敬服する。又個人としての支那人士にも尊敬をする。しかし國家としての支那には信用するわけにはいかない理由をたくさん有してゐる。之を信用しろと云つても出来ないのである。固より支那が出来ただけ國家としてチャンと整然たるものになれる方針で進んで見ることは勿論必要である。それに努力することはよろしい。かうしていつ迄も安定しないやうなことは社會としても困る。隣國としても困る。旅行漫遊家の自分どもにはたいして之を妨げとはならぬがしかし靜穩で居てくれるに越したことはない。

たとひ將來の支那が一つの統一ある政局の下に安定を得るやうな時が来るかも知れぬが、し



かしそれは支那のやうな龐大な國土では長つゞきせぬ。暫くすると又すぐ動亂に陥る。集まつては離れ離れては集まる。一盤散沙。支那は三千年を經過しそして二十五史を作つた。今後尙幾度でも之を繰返すのである。永久固定的に宛かも郵便の小包みたやうなコツチリした國になるなんて考へるものがあるとするればその人はこの支那三千年の歴史を勘定に入れることを知らない人である。自分は飽くまでも支那民族の過去の歴史を見て今日の支那の國情、社會民族の狀態をも考へに入れ、民族心理の表裏に深く思ひをいたして見ていかに最負目に見ても今の處政局に永續性を期するなどむづかしいやうな氣がしてならぬのである。

#### その六 租界より觀たる支那國民性の表裏

支那人の國民性ぐらゐその豹變の妙を極めたものはない。或る目的の爲めには前言を翻して涼しい顔をしてゐるともあれば、見えすいた嘘を云つてシヤアシヤアした態度をとるともある。而かもよく平氣でゐられるものであると驚かざるを得ないことがある。これも國民性をよく理解して見れば不思議でも何でもなく立腹するだけ野暮なものであると云ふことが判るのである。

租界の支那に於ける支那紳士の生命財産の安固を計り得るところとしては支那では唯その租界あるのみである。支那人自身がその國の政府を信する態度が警察權に對することの出来ない爲めイザと云ふ時には先づ以つて誰れ人も皆租界に避難するのである。或は天津の租界に又上海の租界にと之を絶對の安全地帯となすのである。これあるが故に名士の身邊の危害もその災厄から免れ虎口の禍を避けることが出来るのである。従つてこれ迄外國租界を徳としその之に頌徳表まで上りたい氣持ちで居たものがどれ位あるか判らぬのである。これは確かなる事實で租界あるが故に幾度かその命拾ひをした名流革命志士もある。それを思ひ今日を考へると云ふとたとひ今日租界の返還を云ひ出し主張してゐる手合ひがかつて租界で命拾ひをしたものに限られてゐないにしたところで又いつ何時その名流がその生命財産を租界に托するの必要に迫らるゝかも判らぬのである。

その租界のお蔭を被つてゐた支那人の間からして此の度上海事件の行きさつからして不埒にも租界の回收を云々する氣分になるなどは以つての外の事であると云つて憤慨してゐる英人がゐる。英人がかくの如く立腹した考を述べるとはよくよくの事であると思ふ。又眞面目に考へ



たならばよくもかゝる鐵面皮の事が云はれた義理ではないと一本まゐりたい位の氣持になる。これは全く無理もない事と思はれる。

しかし租界の方から云ふと全くかやうに理窟は云へるとしても支那の事は支那人のあたまになつて考へ直して見る必要がある。支那人としては租界が必要なきは之を重要視したことを云つても見る。主張するときの材料に之を挿入して並べ立てる。租界がその避難時の如き非常の場合には前にも云へる如く非常に役に立つことを認めてゐる。けれども又時世の人心が之が回收を主張して來るやうな空氣になつて來るとあとききの考なしに又之が回收の説を努めて主張もして見る。支那のものになれば決してそれが安全に秩序正しく治めらるゝなど云ふとは望まれぬとは云はずとも判つてゐる。それは青島のあとを見ても支那が無能力であることを認めざるを得ぬ、けれども唯無暗みに租界地を返せなどと時事情もかまはず亂暴に云つて見たところで誰れが聞いても穩當と思ふものは一人もあるまい。實を云ふとその個人個人が眞に租界を支那のものとして返してもらつた方が自分の爲めに利益であると思つてゐるものがどれ位あるか疑問である。自分に利益でない事が判つてゐても國家の爲め悲憤慷慨したやうに見えるこ

とが人望を集める上にも徳であり、又かねを集める上にも看板がよいのである。その目的の方さへ達せられるなら將來の避難所たるべき租界はそのまゝにしておいても何等差支ないと云ふ考で肚の底はさうきめてゐるのであることを注意しておく。



## 十二 北京趣味津々たる界限に出入して

### 四十九 支那趣味の特徴は文字から古玩に

支那趣味の理解は決してむづかしく考へてはならぬ。その精神をとらへ、その要領急所をつかんでさへ居れば、極めて呑氣に風韻に充ち満ちてゐる所を達觀し得るわけなのである。又支那人の氣分から入つてもさうそのいつも哲學的に八釜しく肩の凝つたことをのみ考へてゐるわけのものでもない。元來が人生を美化し歡樂を事とするを以て日常生活の極意と考へてゐる連中どもが、即ち支那一般の民衆なのであるからその理屈よく考へ過ぎるなどは、支那社會を買ひかぶれる見解と思はれるのである。日本人の目からはとかく支那を見るに、之を經濟的に利

財の方から見る。又學問漢學の方から見る。又治國平天下の經國濟民の方から見る。そは何れもその着眼があまり固い。支那人の本當の氣質氣持は必ずしも、いつも道德のとで終始してゐるのでもなく、孔孟をのみ考へてゐるのでもない。快樂主義の生活、民衆主義の精神生活これらがその常態となつてゐるのである。そしてその根本には支那式の趣味氣分がアンダーカーレントとして漾うてゐる。又その氣分によつて着色されてゐる。これを理解しなかつたならば支那の社會はあまりに眞面目に過ぎ、又あまりに潤澤うるほひが乏しくなる。支那人は元來その身分の高下、富の程度如何によらずしていつもその個人々々の心の奥底に趣味を中心としたゆとりを深く藏してゐる。そしてそれが日常生活の精神方面に發露して來てゐる。こゝを看破することが支那人の人性國民性を見る上に最も大事な點である。

支那人の氣持を先づ第一に趣味的に見るみかたのことに就いて云はんに、これは日本人のあたまでは餘りにこれまで儒教の考へが先入主となつてゐた。その爲めに趣味の方はとかく閑却されてゐた。どうかすると全く忘れて氣がつかずにある人もある位である。時としては人は支那を解するに、趣味の方から考へるなどは以ての外だ。之を毒するものである。怪しからぬ事

北京趣味津々たる界限に出入して



だなどと力んでゐた硬派さへもあつた。今日の時世はもはやかゝる頑固な窮屈な見かたで支那を小さく固く日本式に考へるなどは誤りである。寧ろ自由に支那人の心のありのまゝを先づその通りそこねずに見ると云ふ態度を以て取扱ふ。これが大切であると思はれるのである。それにしても第一に支那人のゆとりのある趣味的方面のうちでも文字の上のこととなると相當に八釜しく考へられ、又むづかしいものとなつてゐる。少なくとも日本人はとかく自分で先づ無理にこぢつけてでも窮屈に考へたがる傾がある。ところが支那人自身は案外人を馬鹿にしてゐる。又滑稽なやうな文學的の洒落で表現してゐることもあるので決して理屈もなにもないのが多いのである。そこに支那人の文字上の趣味興味が深く存してゐるのである。

これは北京でぶつつかつた例ではない。が文字を對聯の上で讀んで其意味をえらいむづかしく考へたものであるから遂にわからなくなつて了つた例の話をこゝに挿入する。それは自分が民國十四年三月二十二日雨の日に南方も南方ずつと南で香港に寄港してゐたときのこと、その名も南の字を冠してゐる「南唐酒家」の樓上で讀んだ文字中に頗る趣味的の句を發見したのであつた。

醉月屋上（八層樓であつたかと思ふ）の花亭に對聯がある。その文字に曰く、

開 瓊 筵 以 坐 華。

結 幔 亭 而 梯 月。

と、その傍の綠蔭には扁額が見えてゐる。不醉不歸の四大字、この醉はざれば歸らずの句は酒家に最もふさはしい佳句である。そしてその屋上の客室は十七房もあつたがその入口の文字を一つ一つ根氣よく讀んで見ると、昔の國名が用ひられてゐる。その名所々々を用ひてゐるのは一寸面白い。今その室の奥の方から之を順次に云つて見ると、粵房、桂房、滇房などである。即ち、

粵。桂。滇。黔。湘。閩。隴。皖。蘇。

燕。魯。蜀。豫。晉。鄭。秦。贛。

と部屋割のしてあるあたり中々に氣がきいてゐる。そして尙その室の文字ばかりでなく地階よりルーファーターンに上る間のエレヴェーターに乗らうとする。その聯の文字を見るとこれが又振つてゐる。降昇機に聯と云ふは一寸ありさうでない。けれどもそのアツプか又はダウンの

北京趣味津々たる界隈に出入して



處で暫し待たせる間に、そこに文字の掲げられてあるのは人をして退屈せしめない。その聯の文字を味つてゐる間に一二分は立つてしまふ。そしてその文句が振つてゐる。曰く、

南唐酒家降昇機對聯。

有機可乘 九連易達。

諸尊光顧無限歡迎。

とあるのである。これまでは香港酒家の文字は譯なく読み去り読み來たつて、なるほどよいことを云ひ現はしてあるものだが、るに思つてゐたのであつた。ところが此の度自分が廣東省に來てゐるのだから粵房がふさはしくてよいとばかり粵房の鏡の室に入り紫檀の八仙卓や十景椅に凭りかゝり、例の廣東料理の運び來たるのを待ちながら熱い茶など啜つてゐたのであつた。すると、正面の壁にある文字が目についたのである。之を讀むと、次のやうにある。

建偉業於港

南唐大酒家開幕誌喜

塞些事乎廬

風人新社恭祝 □ □

とある。この二行目にある塞些事乎廬とある此の五字に至つて自分は行き詰つてしまつた。此を「些事を廬に塞ぐ」では何だかよく落ちつかぬので自分は不思議さうに思ひつめて考へてゐた。正金のマネジャー有馬長太郎君が酔の少しく廻つて來たときをつかまへ、大人は之を何と解せらるると聞いて見た。するとわからぬと答へる。土地の廣東人に聞いて見ると唯その通り發音するのみである。塞些事乎廬はどこ迄も腑に落ちなかつた。一座之を未詳としてゐたのであつた。

謙、酣にしてその掌櫃の來たつて挨拶をしてゐるのがゐたからすぐ之をつかまへ聞き質して見た。ところが相變らずその發音の通り之を讀んでゐる丈であつた。そこで自分は考へついた。なるほどこれは英語の發音の音譯に過ぎぬ。と云ふのはよく考へて見ると何でもなし。支那音で、

塞些事……Success  
乎 廬……fully } Successfully

これである。縁喜の佳句として恭祝の雅意を英語のまゝ寫してゐるものであることが判つて

北京趣味津々たる界限に出入して



一同大笑ひ。塞些事乎廬が建偉業於港の語と密接の關係のあることもこれで明白になつた譯である。漢字が音譯に用ひられたのを雅に思ふなどは少しく囚はれた方の人間の考へであるかも知れぬが先づかうした文字のいたづらは相當に澤山支那にはまだいくらでもあるのである。或は回文などにも吾、唯、足を知らんと云ふのを口の字を中心に固めて列べてかうする。

五  
唯  
足

……中央の口の字を共同にして大きく口の字に改む

これは青錢、孔錢式に中央に口をおき周圍に四文字を列べる。かやうに比較的密度の揃つた文字が並ぶのであるから圖案式に興味があるのである。その他すべて平仄を合はして絶句や律を作つて見たり、古人の名畫に賛をして見たり、卷軸に題跋を入れたり、書籍に題跋を書いて見たり、かう云つた文人趣味の方面のことは固よりであるが今少しくその程度の下がつたものでもかうした文字の趣味に浸つて遊んでゐるならば天下は泰平である。又これが古來の文字ある支那人の氣分にも叶つてゐるわけである。又支那人の公園などに這入つて見るとよく禁制の語が目につくことがある。上海の廣東公園でもその芝生のわきに並木に沿うて次のやうな文

字が讀まれる。これは誰れも知つてゐる語であらうが日本の何々無用と云ふに當たる語でもあらう。即ち廣東公園の綠樹の懸札を見ると、

母得折花 花を取るべからず

母得赤身 肌を出すべからず

諸君自重 (小便無用)

とある。公園内であるから小便すべからずで君子自重を乞ふの意であることは云ふを俟たない。かうして見たところで實際は目に一丁字なき手合どもが支那人口の八九割を占めてゐる社會のことであればたいした事はない。何の意味たるかも不明なのが多いのであるが、然かし文字を辨へてゐる方のものから云へば、支那趣味の特徴は何と云つてもその文字を趣味の中心にしてゐる點に在りと云ふを眞理とするのである。

南方各地方の文字趣味を見てゐた目で北京に歸りその文人氣質の人士を訪ひ又時に書卷畫卷の優なるものを見る。さすがに北京は他の地方にて見ることの出來ぬ稀世の珍寶に接することの出來るところである。故金紹城、楊獻谷、楊晋、周肇祥の諸大人始め多くの文人諸名家が秘

北京趣味津々たる界限に出入して



藏せらるゝ名品珍品も大分見るの機会を得た。文華殿や武英殿は云ふも更なり、それも却つて個人の舊家名門の跡を訪ねて見ると、まだく相當に立派なものが残つてゐる。又實業方面の人々の間にも、時には相當な逸卷を見出すことがある。北京は東城伯安遂胡同、黃氏邸内にて三上參次老大人招待譙席上その正面の壁に高く掲げられてゐたものなどは大變その聯句の文句が氣に入つた。又その筆蹟が見事である許りでなく筆者も立派な人であつた。即ちその聯に曰く、

剛日讀經、柔日讀史。

武進 錢維城

無酒學佛、有酒學仙。

錢氏は乾隆の狀元、江蘇無錫のそばの武進の出であることは周知のことである。其日常奇數の日には經をよみ隅數の日には歴史を讀むと云ふところは面白い。又その酒の話に酒があれば李白の遺風とでも來るかと思ふと、有酒學仙と云ふのだから興味が又格別である。これは當夜は日本の歴史の大家三上先生を嘉賓に北京大學の朱希祖翁や張鳳學君、それに潮川翁や濱田君、原田君、山口君始め大村、日野水、酒井の三井の主人公側の諸君、中々に史家を中心としての

盛宴であつただけにその壁の聯も席にふさはしい對聯であると思はれたのであつた。でも香港の南唐酒樓に見たやうな謎のメンタルテストがなかつた丈に萬事無難であつたのはよかつた。

しかし流石に三上先生も北京に見えられてからは幾度かその支那時式の文字用法に殆んど考へさせられることが頻頻であられたと見え、萬壽山から歸燕されたときも、その境内で中西式便飯のピラに現はされた文字に、

沙木吃火腿

(辨當として食べるもの)

ロロ

(飲みものとして仕度されたもの)

と妙なことが書いてある。これは汽車漫走(自動車徐行)の俗語よりは少しくむづかしい、メンタル・テストであるから一寸判りにくい。けれどもそこにはその火腿とある文字で思ひ付かれたやうである。鎌倉ハムなどに縁のあるいぶし腿であるが、こはサンドウィッチ(沙木吃はその音譯)を指したものである。次ぎの行に見えたロロとあるは何かと云ふとココアのことである。支那人が外國語を寫す要領はすべて此の筆法で行く。呑氣な方法であるがそこに面白味がある。乃ちココアの音譯と云ふ點に氣がつかれたのである。それから以來更に又三上先生には

北京趣味津々たる界限に出入して



時々支那語のエテイモロジを思ひ付かれニコ付き乍ら相談がある。曰く、

日本語のドロバウと云ふ語は支那語の少盜兒セウトウキの盜兒トウキから若しか來てゐるのではないだらうか。その泥棒の泥と棒との義でないことは固よりであるが、その泥のドロにはむしろ支那語の盜兒の訛音と見られないこともない。しかしどうだらうねど。松村任三老博士の支那語語源説を向ふに廻しての珍説がかうして時々ほどばしつて見えてゐたので自分は屢々それで考へさせられたものであつた。

自分は又平生古人の書の方では東都小石川の自宅に於いて支那安徽省は鄧完白山人の書卷朱拓を愛玩してゐる次第で鄧氏のものには特に興味を持つてゐるのであるが、折よくも北京に客中此の度はその鄧完白の後裔なる鄧初氏（仲純、皖懷の人）にあふこの機會を得た。これ迄度々北京に行つてゐても此のチャンスは得られなかつたのであつたが、此の度は小菅博士の紹介で北京後門、三眼井三十二號にその鄧氏を訪ふたのであつた。鄧初氏は今その藥學を専門としてゐらるゝが家には祖先完白山の遺墨をどつきり藏してゐられて、その中には篆隸楷の大幅より尺牘類などその頻々見るべきものが多い。羅聘の奇抜なる岩峭の畫幅に頑伯山人の像を入

れたる構圖などかなり珍なるものもあつた。が更にその珍中の珍なものは完白山人の正楷の書、双幅の對子である。その文字はその右半の聯が左文で書かれてゐる。杜少陵の詩、摩詰の畫、左傳の文と云つたやうな書き始めをば左方から始めて右方へと書き下してあるのである。即ち、

（時年五十七、六十三にて逝く）

絶藝置我山牕。鐵硯山房

右軍帖。南華經。相如賦。屈子離離。收古今

○少陵詩。摩詰畫。左傳文。馬僊史。薛濤箋。

○滄海日。赤城霞。峨眉雪。巫峽雲。洞庭月。

彭蠡煙。瀟湘雨。廣陵濤。廬山瀑布。合宇宙奇觀繪吾齋壁。

嘉慶改元春王正月。鄧完白

とある。實際これを見ても明な如く、どこもよく面白く讀み込んである。文學的の興味がこれ北京趣味津津たる界限に出入して



で喰らるゝのである。これは各地をあるいてその實景を一々見てゐるものには、一層この完白山人の句の意味の興味が深いのである。かうした珍しい嘉慶の遺墨が兵燹にも何にもかゝらず散佚もせず、よくも今日まで他の材料と共にその子孫のうちに傳はつてゐたとは幸福なことだ、又一種莊嚴の感にも打たれる。凡そ古人の遺墨を後世に見る場合も多いけれどもその子の邸内で古人の俤を偲びつゝその子孫が手づから取り出し壁にかけて見せてくれる位その感に孫打たれることはない。夙に轉々してわきに散佚し縁もゆかりもない處などへ財の力で飛嫁してゐるなど云ふものは同一の論でないのである。

北京は元來ゆつたりした處でその文人熱も相當盛なところであるからして寶物類に中々につきない。

自分共はそこで北京で又或る日のこと東城、東單、溝沿頭に邵嵩年と云へる大人の故宅を訪うて見た。このうちは前にも一寸述べた如く王同龢のうちと縁戚關係になつてゐるので、従つて中々書畫の類の貯へも多い。白堅、楊獻谷、中根齋、岩村成允、高橋亨の五大人と共に之を訪ひ主客互に文墨を談じて興味津々。何紹基の細楷、饒鶴銘の古拓、王若水の梅花卷軸など相

當に逸品も多く評判であつたが、あとで西觀音寺胡同の柳園で楊君の四川菜に呼ばれ、そこで洞中天、飲餠、食徳、群賢至畢、勝友如雲、など云ふ扁額の下に諸賢と忌憚なき批評高論が始まつて來たのであつた。すると大分皆怪しいものばかりだ。紙質がどうの又筆意がちがふのと云ふやうな話が誰れ云ふともなしに正直な處の打明話が始まつたのであつた。一同はそれから東華門外白堅邸の寶物拜見に行くプログラムであつたから、あまり時刻のたゝぬうちにと動議を出して自分はほど遠からぬ三上先生の旅社を先づ訪ねんとした。ところが白堅大人始め諸賢も皆一同老先生に敬意を表しに行かうと云ふことになり、失禮とは思つたが皆で押しかけて行つたものである。すると先生大いに喜ばれそれ〴〵三上先生を中心に樓上、紹介が始まり刺の交換が行はれ、熱い手拭が來る。顔を拭つてさつぱりした氣分になる。四川生れの楊君から四川省の珍話が出る。白堅君から書畫談も出る。岩村君も相の手を打つ。しまひには白大人自ら、

「今から皆さんが宅に見えらるゝのだが」

「三上先生にもどうか枉駕光臨の榮を得ば」

北京趣味津々たる界限に出入して



どの依頼である。はたからも大分慇懃した。先生には、

「それでは一つ拜観さしてもらひに出掛けませう」

と一同東華門指して出掛けることになつたのである。

東單から東華門外は程近い、馬車に分乗すると間もなく白大人邸の門前に到了。「白堅」の門表も鮮かに讀まれる。いかにも北京の讀書人の邸宅らしい落ちついた気分がしてゐる。門に俗客なく古人の書を読む主人の趣が偲ばれる。門を這入つて客廳に行く間の舗石路、長からずと雖も一院子の周囲の設備も先づ大體そろつてゐる。三上先生には北京に着かれて以來抑も初めての北京人の住宅を訪問されるわけであるから印象が深い。先づその門内、壁、小門、院子、部屋割、排置、居室から内房、植込み、對子の文字などすべてのものが細大となく珍らしくあたまたにしつくりと来る。すべて玩味され興味深く目を配つてゐらるゝので足の運びも自然はかばかしくない。やがて向かつて左方なる簡單ではあつたが清楚なる客廳に通されこゝに茶なども請ぜられた。次で白堅大人の案内で自身の書齋に一同通される。拜観するものは色々ある。

一、古玩出品の數々、文具類に古鏡類など。

二、三國志の原文（石版刷にして一同に頒布たされり）。

三、西域吐爾蕃の古文書類。敦煌出土經卷。

四、出土品唐尺。

など次から次へと主人は謙遜の態度に説明の勞をとられてゐた。一同はおかげでかなりよく詳細に味ひ得てその興味の益々深さを覺えたのであつた。そこで又やがて院子に出る。此の日、秋の北京の天空は又格別によく晴れ輝いてゐて、屋根のカーブの線と相映じ洵に見事である。屋根の梁に一パイかゝつてゐる椿樹の枝の茂れるが殊に北京の大自然の趣を漾はせてゐる。

三上先生しきりと屋上高く茂れるその綠樹を仰ぎ眺め白堅君に向かひ、たづねらるゝやう、

「白先生此の樹は何と云ふ樹ですか、實に立派な樹で」

「これはこゝでチェンス椿樹と申す樹ですが北京には大變多い樹です」

三上先生「字は椿でも日本のツバキとは全然ちがふ樹ですな。出来れば一枝參考にあとで頂きたいものだが如何でせう」

白先生「わけないことです。よろしうございます」

北京趣味津津たる界限に出入して



と、話はこの椿の日支比較材料の提供の話で誠に結構に進行した。それはよい記念になる話である。殊にその初めての支那紳士の邸宅を訪ねられたことゝて印象の強さは、何とも云へぬことであつたらうと察せられたのであつた。ところが取り巻きの連中の中からその話の進行中の處へ指して、挿んで曰く、

「あのチユンスなら北京到るところにいくらでもある樹だからお立ちまでにはどこからでも得られますよ」

と云ふものが出て來た爲め話は中絶してしまつたのは氣の毒であつた。老先生にはその後北京で到るところ北京産の椿樹と及び槐樹と梅檀、榆などの區別を注意してゐられたやうであつた。けれども如何にせんそばに植物學者が居なかつたので科學的には支那の椿樹の概念は得られなかつたかと思はれたが、葉の形や枝振りの様子ぐらゐは判明されたことであらうと思ふ。でもその折角のよいチャンスにせめて一枝でも之を具體的に土産にされたならば、何よりたしかなその證左を得られた筈であつた。往年黒木欽堂翁將來の山東曲阜の榛柏、實生の苗木が今日千駄木の邸の植木鉢に常緑の珍姿を現はしてゐるのを何よりの鍾愛の的としてゐらるゝ博士

の心事を知る自分は、北京の椿樹につき一入の情緒の纏綿してゐるものがあつたかのやうにお察しをする次第である。

かくて白堅大人の邸は學術資料に考古材料や北京風物聯想の椿樹やにら盡きぬ名残をどよめて門外まで見送る主人の慇懃振りに感じつゝ、一同之を辭し去り序でながら東華門寄りの何とか云ふ古玩店をひやかし、洛陽の出土品、土偶、道教の神々の偶像、わけて雷神の偉像、口喙天狗などと云つたやうなたわいもなき古玩の所せまき迄に並べられたる様子など瞥見し歸路にいた。それからその胡同の名前もなつかしい椿樹胡同に出て、滿鐵公署前の古玩店を訪ひここに三上先生圖らずも珍品を掘出されたのであつた。それは日本の國寶に選定せられんとする琵琶を手にせる辨財天と同じものを手に入れられたのである。その琵琶を倒さまに持つてるところが殊に面白く、ひごくこれが老先生の愛賞するところとなつたのは目出度い。東華門内の歸途白堅邸の椿樹は得られなかつたが、それ以上のものを掘出され入手されたと云ふとは何より喜ばしいことである。その後之を函に收められ老先生支那將來目錄中の白眉として之を家寶にされてゐるとは返す返すも目出たきことの限りである。

北京趣味津津たる界限に出入して



かくて支那は自分の経験やら友人の経験に又老先生どもの珍談などを加へて南北支那殊に北京あたりの趣味の巷で味つた話を次から次へと紹介して見ると云ふと果てしなく殆んど盡きる處がない。更に以下には玩具の方面や文具の方面、迷信あさりの方面と云つた香氣にして而かも北京の社會相のよく現はれた方面のことを、隨筆的に漁つて見たいと思ふ。この方面には又かなり色々のことがあるのである。

### 五十 ルンフース隆福寺の白市に玩具あさり

北京滯在中公使館轉交で自分に宛て東大心理學教室桑田芳藏君から手紙が來た。見ると、「支那兒童心理の研究資料になるやうな南北各地の支那風俗玩具を蒐集して送つてくれないか。あまり高級品の高價なものは困るがよい加減の處を見計らつてよろしくたのむ」云々。と、ある。かねてから玩具のことは好きで支那少孩兒のワニヤルばかりでなく、大人のワニヤルをも集めてゐるのであるから、此の手紙を見るなり自分は、すぐ東大宛にて、

「よろしい。承知した。北支那のは北京で、南方のは長江筋で出来るだけ蒐めて見よう。無

論あまり貴族的のはやめるが、多少はそれも入れておきたい」云々

と返信したのであつた。そこで前門外、大柵欄邊りから王府井大街、さては隆福寺白市あたりへかけて或は態々、又時には思ひ付いた序でに大體の方針を立て、漁り廻つたのであつた。

王府井大街は東安市場へ立寄つた序でにワニヤルの玩具店を二三訪ふた。風俗研究の立場から常に支那玩具に興味を持てる自分には何より先づ柵の上に飾られたる出門婦兒の紅事（婚禮行列）と出殯と稱せられてゐる白事（葬式行列）の小さい人形の並んでゐるものが目に付いた。婚禮の方のは五十五人、葬式の方のは六十七人の組になつてゐるのである。しかしこれは常に以前からよく見てゐる緑衣の行列であつて誰れでもよく知つてゐるものである。然るに現代式と云はんかこの行列を轉化させて「排日行列、排英行列」と云ふ實際的鹵簿の人形の列もある。關稅會議當時の事とて、これらは店頭に出さないに越したことはないのであるが、店のものの事であるからそこ迄氣がつかないでゐたやうであつた。長安大街あたりの目抜き紅壁あたりに見える排外文字と云ふ文字はすべて悉く削らせたり、塗替へさせたりなどしてゐた當時の事とてこれらはあらずもがなと思はれたのであつたが、玩具店などは何とも思つてゐな



い。お構ひなしで商ひをしてゐるのであつた。

これらはすべて排日排英の旗を持つた若いもの共が銘々矢張りその行列に加つてゐるのですぐそれと判断がつくのである。

又不倒翁(起き上り小法師)の大陸的な容貌をした一尺大のもの、この物が張り子ではあるが頗る要領のよい鷹揚なのがあつて氣に入つた。又その外彈弓子と云ふは弓に矢をつがへたもので頗る引く力の強いもの。烏鵲の類など一發で以つて落とすことが出来ると云ふ鋭いものである。丸は圓き石の丸を用ふるのである。その他トンコールと云ふデンデン太鼓でその四つ五つ長く續きたるものに長き軸をつけたるもの、或は又太鼓の周圍に花飾りを施してある花郎棒と稱するもの、又蕭に笛、響球、胡琴又響車、轎車、土車がある。又羽毛のかざりのあるピエントツ鞭子に斧、チェン鋼、牛耳刀、青龍刀に夜光の玉の揉球兒、その他すべて色々のものを合はずとかれこれ三四百點からのものを集めたのであつた。

殊にそのうちには動物で昆蟲、その他の各種の蟲おもちやに面白いものがあつた。こはルンフース隆福寺の方は中々細工のよく出来たものがあつた。と云ふのは日本では玩具としては一

寸取扱はれてゐないものばかりであるが、

やもり、むかで、ゐもり、げじげじ、かまきり、さそり(蝸)、かみきりむし、とんぼ、

はち、ばつた、とかげ、蝶蝶、かぶとむし、くも、蛾、いなご、こうろぎ、すゞむし、

の類である。又芝居の役者の似顔や隈取りには非常に奇抜なものがあつて、これも日本にはあまり見ない。道化もの、悪人、善人、老姿、將軍、僧侶、關羽、長飛、孔明すべて人口に膾炙した興味のあるものである。又假面にも日本にない奇想天外のものもあれば實に笑顔のよくておつとりした大陸的の圖なしに大きいものもある。こは首にづばりと全部はまるやうにゆとりを取つて作つてあるものであつて頗る快感を感じるものである。

隆福寺の白市は北京城内の市でも有名なものの一つである。かう云つた所へ買ひ物に出掛くるには自分一人で行くよりも宿の支那ボーイでもつれて行つてそれに萬事掛け合はせる方が得策である。ボーイと一緒に行かないかと云ふと、ボーイはニコニコ顔で、

「今日はルンフースの市の立つ日だからワンヤルでも何でも澤山出てゐます。今からお伴しませう」



どの返事をするなり早速ボーイは新しい水色の打掛兒に着換へて仕度をし、相當面子のことも考へてきれいな扮装をする。洋車を雇はせる。大道の方を向かひ大きな口を開き、

「ヤンチョー！ ヤンチョー！」

と威勢よく叫ぶ。三臺も四臺もの辻車がやつて来る。頗る安く談判をしてくれて之に乗る。東單を北の方四牌樓の方へと走らせる。支那の人力は、皆かち棒が莫迦に長く出来てゐるので、車夫は棒を前の方にウンと突出してその左右の肘は、丸で螞蟻のやうな恰好に十分に張るのである。車上から之を見てゐると丸で左右の肩を動かし拍子を取り足は唯ボタボタと運んでゐる丈のやうなものである。又ボーイたちの身分ではたまに人力に乗ることもあるかも知らんが、けふは晴れ衣で聊か得意らしい顔付で、揚揚たる威勢振りである。東四牌樓の先きを左へ隆福寺門前で車をのり棄てる。そこから自分共は人込みのうちに白市あさりを始めるのである。さすがはルンフースである。見ると世帯諸道具から古着、草花類、古玩類、玩具類、飲食店ずらりと門前内、堂側、堂後、あます所なく露店の立ち並んで居る中を玩具の店にのみ注意をして廻つたのである。

芝居のときに用ふるやうな大型の和尚の假面二三種を始め、風俗資料の人形、動物、笛類を二三十種もこゝで選びきめる。そして之を山のやうに堆く手前に持ち出し、あとの談判は面子を考へてくれるボーイにまかせるのである。その方が三分の一か四分の一かで話が出る。前の東安市場の時の買ひ物も實はボーイに云はせるとかうだ。

「私がお伴して行つて談判をしたのであつたらウンと便宜にまけさせることが出来たのであつたのに惜しい事をされた」云々。

と云つてゐた位である。隆福寺に来てからもボーイはうまくやつてくれる。こちらは知らぬ顔をして先へ先へと行き又別の店のかはつた資料に目を配り適當な材料選擇の方をやつて行くのである。勘定の方のかけ合ひは任せておけばうまくやつてくれるのである。たゞ今全部持つて行くにしても、荷物になる。歸途立寄るからとて仕拂ひをしてまどめさせておく。かくて、際限なくある玩具の店々をあさり廻り歸りに一緒にして積み込んだのである。ボーイは車上、子供の如くになつて又々聊か得意らしく車上でデンドン太鼓を高くかざしてクルクル廻しよい音をさせつゝ人にも聞けよがしに東單の大街を飛ばしてゐるのである。



かう云つた方法で尙各方面から之を蒐集して見ると云ふと支那の玩具は大體云ふと、其の心理意匠の奇抜なもの温和なもの、滑稽なもの風流なもの物足らぬけれども面白味の深いもの、芝居氣のあるもの風流なもの、恐ろしいもの、色々様々である。上海邊りにある泥焼に釉藥のかゝつた金殿玉樓式の美しいものとか人形にしても貴族的の垢ぬけのした高級品と云ふやうなものはどうしても割り合に少ない。之が却つてよろしい。支那民衆の心理、一般兒童の嗜好の傾向を見るが主眼であるからこれ位のところでよいと思ふ。しかし一轉しておとなの玩具類の方のものと頗る高級なものがあり又頗る機微を穿つたものがある。例へば、

その一、夜光の玉の揉球兒（一對二個あり之を掌中にて揉み廻し蛙の鳴聲を出す）

その二、胡桃の時代ものの揉球兒（一對二個あり之を掌中に弄ぶこと上の如し）

その三、景泰藍（七寶）の搬子（母指に嵌めて弄ぶ）

その四、漢玉その他の玉の搬子（同上）

その五、蠟燭葫蘆（鈴蟲を入れて鳴かせる瓢箪形の玩具）

このうちその五の葫蘆は形と云ひ大いさと云ひ又その表面の圖案と云ひ千變萬化である。山

水あり、人物あり、鵝何學の模様あり、無地のものあり、物は頗る上品に出来、象牙のすかし彫りをした蓋を施し轆轤細工の口の加へられたものが普通である。

けれどもこは單に蟲を入れて鳴かせ散歩のときとか又要談のときとかに蟲を聞きつゝ風流を樂しむと云ふこともするのではあるが、しかし裏面の消息は今一層深刻な意味を持つてゐるのである。それは宮中の獨身の女官たちに用ひらるゝものの形から考へると頗るシークレットに使用されたもののあることを知るのである。蟋蟀堂に鳴くとは昔しからよい上品な語のやうに聞こえてゐるが風俗の上殊にこの葫蘆の場合に見る蟋蟀は大變なものである。しかしこれは第二次的の方の意味であつて第一義がどこ迄もその表面ひろく用ひられたる用向きであらねばならぬ。又これにはその周圍に山水人物等の彫刻を施した如く見えてゐる圖案があるがそれは瓢箪の成つてゐるときに型を嵌めておく爲め出来たものである。これらの型も代表的のものを先年來自分はその蟲入れと共に蒐集して珍藏してゐるのである。

北京では四牌樓や、頭髮胡同の小市乃至曉市あたりに時々之が賣り物を認める。瑠璃廠邊りには之を求めんとしても却つてないやうである。近來はめつきり少なくなつた。でも最近に獲



たものは矢張り心理研究の材料にもなるので帝大心理學教室の陳列棚にも之を加へて入れておいたのである。

また上述の夜光の玉であるが、これはむかし戰國策に楚王が秦王に献上した夜光の璧と云ふものがあり、又述異記などに見えてゐる夜光杯と云ふのがあつて、もどこは何れも南海より出たと云ふ風に傳へられてゐる。今此の夜光の揉珠兒と云ふのは北京で自分が獲た珍物中の珍の一つであるが一對の丸い珠である。二個を掌中に入れて力強く摩擦して居ると暗夜その摩擦合つた所から著しく明かるい光りを發するのである。

支那人は之を夜光珠と云つてゐるが果して如何なるのであらう。自分は現に之を珍藏してその何が故に夜光するかを確かめたいと思つてゐるのである。

支那で民衆玩具を蒐集する爲め白市、夜市、店頭色々の巷に出入してゐる間に自分は最も興味深く感じた或る事柄がある。そのうちの第一は之を商ふ大抵のものが殆んどすべてと云つてもよい位に皆文字を知らないことである。これは北京だけでなく上海に行つても同じことである。長江沿岸にゐる多くの民人も大抵これである。支那人に云はせると、

「商ひの事と文字を知るととは別問題である。男兒字を識るは憂患の始め也と古人も云つてゐるぢやないか」

と云ふかも知れぬ。打ちあけたところ支那では自分たち、

「字など知らなくても商賣には差支ない」云々。

ことである。此の考のある爲め字を識らうとしないものが多いのである。テンデ字は知らずして而かも立派に言葉の發音は出來てゐるのである。それ故玩具で例へば、

花嫁さんをチュメンフル・チュメンフル

葬式をチュピン・チュピン

と幾度でも繰返して發音してゐるがその字がどう書くのかは少しもお構ひないのである。尤もチュピンのピンなどはかなりむづかしい。殯と書くなどは容易であるまい。別段北京小商人のメンタル・テストを試みるつもりではないが事實支那人の字を識らぬには案外である。これも最初から知らぬ人間だと思つてかゝつてゐればよいのである。

チュメンフルが出門婦兒であるとか、チュピンが出殯であるなどすぐ筆のとれるやうなのは

北京趣味津津たる界限に出入して



殆んど見つからぬのである。

第二に又面白く感じたことはこれは獨りおもちや屋に限らない話ではあるが、品物をどつきり買ひ求めた場合勘定のときにその總計のはしたを負けるかどうか。日本人なら大抵算盤からそのはしたの分だけは話によつて切り棄ててくれるものである。然るに支那では容易にそれに肯ぜぬ。一々個々の場合の價を繰返し繰返してその總締めがかうなつたのだから、負けることはならぬと云ふのである。尤もなわけではあるがこちらの話に落ちて來ないのである。手際よく手を打つてまけておかうと云ふやうな氣あひを示すことは先づないのである。そして宿まで届けさすればそれは又送料として別に勘定する。酒手はその又ほかの心付けとしてやることになつてゐるのである。若しその運んで來る間に破損の事などあつても賣り手は更にその責に任じないのであるからして割れものの時など殊に注意がいらるのである。

### 五十一 北京紫禁城に文華殿武英殿を訪ねて

北京趣味の津々として湧き起るところは誰れしも云ふ月並みお定まりの所であるが、紫禁城

行きである。わけても東華門又は西華門の方から這入つて行く武英殿と文華殿とがある。又午門の城壁の上の高樓を利用して出來てゐる近來評判の歴史博物館又は先般段執政府になつて公開して居た例の清室の乾清宮始め各宮殿樓閣並にそのうちの寶物類、先づこれ位のものであらう。或は又學術的方面では北京大學の第三院國學研究所あたりに列べてあるものである。

これら趣味學術の材料の豊かなるうちでも取りわけ文華殿武英殿は時々その陳列替へがあり逸品の差しかへがある。北京に出かけて行つた度毎に誰れでもこれらの宮殿へは足を向けると云ふが普通である。又行つて見なくては氣がすまないのが普通である。自分共は例の三上先生にお伴して、烏山君同道、秋九月の末雨の降るしめつばい日に東華門内紫禁城綠蔭の風情を味ひつゝ先づ文華殿さして、足もとの滑りさうな苔路を辿り辿りて行く。ツルリツと靴をすべらせること一度や二度ではなかつた。

「文華殿」と立札のある處を右へ樹間を進み殿に入る。見るとこの前のときはすつかり陳列がへが出來てゐて、董邦達の雪景萬壑の大ものなどは姿が見えない。しかし又新なる宋元明清の名畫ぞろひが見えてゐるのである。之に見とれてゐながら時に、三上先生に小聲で話かけ、

北京趣味津々たる界隈に出入して



花鳥山水の情趣をしんみり味ひ小首を傾けて眺め入る。

三上先生も最初東華門を這入らるゝまでは、

「今日は時間もゆつくり出来ないから、殆んど駆け足同様の素通りの積で」云々。

と云つてゐられた位であつた。處がさて殿中に這入つて見るとさうその驅足と云ふわけにはまゐらなくなつた。自分も亦先生と先きになりあとになりしつゝ順順に目を移して徐ろに視線を巻軸に投げる。何分物覚えのよい方でない自分は一々之を手帖にしるさうとする。すると中々頗る付きの嚴重さで見張つてゐる兵隊どものその見張の目が随分多いのである。八釜しいので寫眞や萬年筆は固よりのこと鉛筆でも何でも絶対に一切嚴禁してゐる。いつ來て見てもその點は同じである。故金紹城翁のやうにこゝに關係のある大人はともかくも外來の一觀客などに一分間のすきもなく絶えず窮屈に監視されてゐる。一寸でも鉛筆を手にしてゐるところでも見付けたら最後、付きまどうて來てうるさい。すぐと一々まぢ目に八釜しく咎めるのである。

小づくりの鳥山喜一君は機敏にも二三回、室外に出て鉛筆を甜め甜め好きな畫題か何か手控に書きとつて居た。それも掛軸をよく見て覺えて一々外に出て書き付けてゐられたのであるか

ら随分御苦勞なわけであつた。しかるにそれをまだ三四回もやらないうちに武装せるその兵隊が廊下の方へついて出て來て鳥山大人の書いてゐる姿の後方に立ち窺つてだまつて見てゐる。どうすることもかなとそれに自分は視線を注いでゐたところがやがて、兵隊は口を切り、やりだした。

「若しもし、何を書きとつてゐます。入口のこの規則を読みましたか」

鳥山君

「室内では書いていけない(ブシン不行)と云ふこと知てゐるからしてかうして態々廊下に出てやつてゐるのだ。この前來たときは廊下で許されてゐたぢやないか」

「絶対に不行である。一切やめてください。許しませんぞ」  
やつて殺されるわけではなかつたが然かしさう迄して書くこともいらぬと思はれたか、大人はやめられた。

しかし自分はポケットの中で手さぐりの符牒的にやたらに書いておいた。これを暗中模索と云ふのである。そしてその晩記憶の去らないうちに宿に歸り之を一々清書して見た。

北京趣味津々たる界限に出入して



これもその文華殿の前で丁度武英殿の陶磁器のやうなわけで刷り物にでもして售つてゐるならよいのだがそれもない。大體は一二その繪を見てその畫題を聯想するの外はないのである。自分の苦心して書きあげたものはこれだけである。これは全體の百分一にも足りない。郎世寧邊りの洋畫式のものや色々の變つたものもあつた。龔半千、唐伯虎あたりのもあつたけれども略する。尙ほこれは烏山君の方の苦心されたのと合せたなら二倍ぐらゐの目錄にはなるであらう。

その一、冬至一陽 明憲宗筆

その二、雲山煙樹 宋米芾

その三、寒江放棹 明袁尙統

その三、仙岩坐月 宋馬遠

その五、江山雪霽 宋燕文貴

その六、甘霖應禱圖 清錢維城

その七、茄子園 陳居仲

その九、絳絲——山仙壽芝。

その九、絳絲——瑤池集慶（ツヅレ錦、コブラン織四大幅）

その十、絳絲——松鶴靈芝

このうち馬遠は夏珪のものそばにあつたのであるが共に本當のものかどうか判らぬ。北京個人のうちに見るものにも馬遠と稱するものが澤山ある。しかしどちらでもよい。所謂馬遠らしき氣分は十分に現はれてゐて淺野侯爵家のそれと相去る遠からざるものであつた。燕文貴のものもこは以前、顔世清君の將來したものと似たものであつて、筆致がいかにもと停回去るに忍びないものであつた。又陳居仲の茄子その他野菜類の洋畫式の繪は殊に目立つて面白く眺められたのであつた。

かくて文華殿を出て大理石の舗道に傳ひ、大規模の豪華な建造物に威壓され乍ら路を大和殿にどる。次で中和殿、保和殿にと取り一巡を了へて武英殿に入る。武英殿の古美術、彫刻、磁器、玉器、古硯、古銅器、堆朱、竹器、景泰藍、刀劍、佛像、即位服その他大體は從來のとはりでいつも見るのと少しも變つてゐない。

北京趣味津津たる界限に出入して



古硯などの方もこの前とたいして變つたものは認めなかつた。數も場所も是れ迄通りのものと思はれたのである。しかし焼物その他には吾人の印象と多少變つたものが出てゐた。それは次の如きものである。

- その一、宋均審洗(短き三脚あり)
- その二、明歐審瓷文供佛(半坐像)
- その三、明花耳拱菊瓷瓶
- その三、康熙翡翠釉瓷瑞獸(獅子の置物)
- その三、康熙三采瓷琵琶尊(左右兩耳あり)
- その四、康熙鬩采瓷盆(六方形、香座あり)
- その五、康熙采繪海棠式瓷花盆(一對あり)
- その六、康熙五采魚藻瓷尊(群鯉戯むる圖)
- その七、乾隆料采旋轉綬耳瓷尊(兩耳あり)
- その九、乾隆三彩瓷瓶(花鳥の圖)

- その九、乾隆五彩三子瓶(周圍に唐子を配する圖)
  - その十、乾隆白健瓷佛(觀音坐像)
  - その十一、乾隆藍地描金開光彩畫瓶(花卉の圖一對)
  - その十二、乾隆墨繪瓷梅瓶(山水の圖一對)
  - その十三、乾隆三管采繪寶月瓷瓶(一對)
  - その十四、乾隆文竹挿屏(秋草に鶉一對)
  - その十五、乾隆雕牙山水挿屏雪景(一對)
  - その十六、乾隆雕牙耕織圖挿屏(雪景)
- 此の外玉器類などにもかなり變つた青金石や翡翠の大きな彫刻があり、漢玉があり、玉白があり、いつもこのあたりのものはいくら見てゐても飽かないのである。三上先生にもかなり珍らしく感ぜられたものの如く日本より贈つて居た太刀の如き殊に興味深く眺めてゐられた。又鍍金の髑髏盃の如きや、薄氣味のわるいものではあつたがいつもの通り同じ場所に二個安置してあるのも不思議に眺め入つてゐられたのであつた。かくて武英殿もひとわたり見をはりこれ

北京趣味津々たる界限に出入して



で約半日を武英、文華の兩殿で費ししぐれの驟雨の中を西華門に出て路を北へとりて雲煙摸糊の間に車上高く景山の輪廓を眺めたのは又よい氣持であつた。

### 十三 北京城外に漲る異國情緒

#### 五十二 雙橋の無線電信を見る

北支那へ見學に出掛くる青年だちに向かひ、質問を發して、

「若し諸君が北京へ行かれたら、日本人の最も誇りとする物を見て來たまへ。一體それは何だらうと思ふかね」

と、やつたら大抵のものは小首を傾け、むづかしい口頭試験だなど思つて色々考へる。

まさか、萬壽山や紫禁城なんかではあるまい。又さらばと云つて日本公使館でもあるまい。

實際何だらうと互に顔と顔を見合はす許りで誰れも本當の見當を付け得るものはない。よく北



京に出掛くる連中に特別の注意を與へて見ても見當がつかないらしい。中には天橋路や城南公園と頓でもない所を云ふ。勿論あたらない。文化事業の研究所なんて、それもいつ出来るものやら、土地の選定さへ天壇とか城内とかでまだ公表されてもゐない。日本人の誇りとする所のものとは一體どんなものであらうと聞き直すものが多いのである。それは

「北京の郊外日本里數で三里の田舎に在る最新式のものである」

「國際問題になつて居る八釜しいあの雙橋の無電がそれである」

「米國と日本と支那とが三つ巴になつて始終騒いでゐたが今尙問題のきまらず、呼び聲のX Y Zの符號のついてゐるのが縁喜の悪いのか。國際間にもそのまゝ未知數で残つて居るあのワイヤレス無電である」

北京の東郊で城壁は朝陽門を通り抜けアールチャ二間を過ぎ自動車で以つて眞一文字に田畝の間の大路を飛ばすのである。すると、僅か四十五分で着くところがこの雙橋である。こゝに日本人の手で作り上げた完全な大仕掛けの無電ワイヤレスが設けられて居る。實に宏大なもので五百キロのタービンに二百十メートルからの高塔六基は大空のかなたに聳え懸かつて居る。

之をかの一キロしかない東京愛宕山放送局のその規模なんかに比べると、五百倍からの偉力を有してゐると云ふことが云へると思ふ。主任技師小名瀬松壽氏から大分専門的の説明も實地に就いて承つて見たが何でも八百萬金からの大もの入りで東洋第一のものらしい。

北京の三井出張所では日本を背負つて立ち之に殆んど死力を盡して支持してゐる。あとから横車を押して之が使用を妨げ否認して來た米國に對し非常な熱烈な抗議を支那側を通じてやつてゐる。支那側では交通總長をしてゐた葉恭綽氏を始め張志潭氏などもこの問題には少なからずあたまを痛め病氣になつて寝てしまつた位である。それで折角吾人の誇りとする無電も今尙公然と使用する運びになつてはゐないが實に勿體ないわけである。最早や立派に今日物の役に立つやうになつて居る。佛蘭西の巴里の演説も聞こえて來れば日本の東京名古屋大阪大連のラヂオでも手にとるやうに明瞭によい聲で聞取れて居る。勿論この無電には別にラヂオも仕掛けである。メルボルの話でも印度の演説でも露西亞の講演でも米國のでも其の持運びの出来る團扇の骨組のやうな並んだアパラスを取つてその方向に向け直しておけばどんな所の話でも肉聲のまゝ聞こえるのである。これを



### 雙橋無電 Zhang Chiao Radio Station.

と、云つてその邊で聞けば必ず評判の高い所だから世界的の智識のある紳士なら皆知つてゐる筈だ。北京から日本里にして三里の所にある。乗合のバスもあつて日に何回か通つて居る。かう云つた最近の文明式の而かも北京で日本人の最も肩身廣く感ずる名所を有して居りながら日本人にしてこの雙橋のワイヤレスを知らぬなんて怪しからぬと云つてやりたくなる位である。その春の青空に塔の尖端から尖端へと三十本の架空平行線のカーヴをなしたのが高く吊橋のやうに渡されて居る。天空の大きな光景など實に何とも云へぬ誇りを感じる。その各線を悉く境内の地下に導いて来て深く之を埋めてゐる所の恐ろしい光景と云ひ、又その線を水に導き冷却してゐる貯水池の噴水の霧降りの光景など夏の夜は之が池畔に岐阜提灯の百ぐらゐもつけて日本式の夕涼みの場所にもがなと思はれるよい所である。

日本の此の東洋第一の無電に對し米國は氣がやけて、之を無視して更に強力のものを上海邊りに創設せんとの考を存してゐるらしいので中々八ヶ釜しい問題になつて来てゐる事は周知の事である。友人の賀嗣章君などのその間の接衝通譯の任に當たつてゐる者も爲めに大變な心配

をしてゐると見え、自分に向かひ、

「いつかもこの無電で下手をすると雙方の行き係り突張り合ひの結果、日米戦争の氣分にも導くやうな事になつては全く困りますので、そこを大變……」

と、そこ迄肝煎りになつて居る。日本の新聞記者達も特に之に心を籠めてよく／＼見てもらひたいのであるが日本の學生青年たちの北京に乗り込まれたものはどうしても先づこれだ。之を見通した北京見物なんかは時代おくれの感があると云つてよい。北京大學生邊りの新人の赤化に傾いて居る所などは見なくてもよい。此のワイヤレスの新しい名所許りは忘れてもらひたくないものである。

### 五十三 通州古塔の影

この東洋最新の雙橋無電を見て済んだら序でに全く舊式の支那街通州の城内を見學に行くのもコントラストで面白い。或は又季節さへよければ此の地方は遠近隨所に樹林の多く鳥の獵も出来るどころでよい場所である。鐵砲の好きな連中にはそれもよい。しかしへたをするとよく



あることだが民國の農民に丸をツイあてたりして頓でもない八釜しい問題を起すことがある。だからそれよりも上述の通州行である。これには更に東して日本里の二里も行く。すると路はよし通州トンチャウには譯はないのである。その城内の白塔は有名なものである。通州は見るからに寂れた汚い色のついた街であるが日本には親しみのよほど深い所である。騒動のあつたときなどその紫清宮の寺まで出かけて行つて土民の爲めに日本人が施粥處を本據に粥の煮き出しをしてやつたと云ふ聞くも香ばしい事實もあつたのである。

自分は最近北京に長らく滞在の間に山西省の天龍寺や太原から歸燕すると間もなく民國政府審計院の顧問屋大人や新潟高校の鳥山文學士の君と先づ請ふ隗より始めんと例の雙橋ワイヤレスの痛快味を味ひにまわり東洋一のラヂオの室にも這入つて見てラヂオ氣分に浸り、

「東京の愛宕山のラヂオや、大連の放送局でやつたときの事など思ひ出すが、雙橋のこればかりは又格別だ」

などと口ずさむ。すると係員の某君は勿論、それは日本人であるが、その装置を手で動かして或る方向へ向けかへて見せてくれる。そして

「今これで倫敦の方角に向きました。英國の放送の聲はこれでこの線に感じて來ます」

と、例の密閉された室でラヂオの興味深い説明があつた。支那に來て東洋一のラヂオの話に聞入るなど城外の新し味のある舞臺だけに一入の感興を引いたのであつた。境内の名残を惜しみつゝ門を出る。更に雙橋の文明を七百尺の空に眺め、塔上遙かに軽く動ける小猿大の工人の作業振りを賞しては支那工人の存外氣味わるき業に慣れたものであることに感心したりなどしつつ無電の六塔をあとに通州へと向かふ。

通州の町外れに差しかゝると左に城壁右に白河。兩側の軒並み古き大街をどこ迄も一文字に進む。乗り込んで來たわれく三人の香氣坊相揃つて、

「通州に來たことは來たがさて先づどこを見よう」

「城壁に近いあの白塔の下へ先づ……」

と、話がどうやらきまる。一見外國文明の香の少しも這入つて居ないひからびた此の通州の目抜き。目抜きと云つても軒並み店頭はひどい葷酒便飯や山貨煤煙の小舗續きで、路面又かなりひどい。がその田舎町らしくて、寂びれたうぶな處に異國の情趣が深いのであるとも云へる。



突きあたりを左へ折れて扁額の文字の古色蒼然たる高樓の門を通り過ぎやがて白塔近き邊りにつく、ざる、草鞋など賣る店の曲り角で年寄りの行人に合ふ。まだ辨髪をつけてゐる田舎の老爺にふさはしい朴訥な姿をしてゐる。立ち止まりて頻りと自分共一行を珍らしげに眺めてゐる。

誠に生きた道しるべだ。此の老爺に白塔の古寺の名前でも聞いておいたらと先づ自分は老爺にそつと挨拶して、

「老爺。あの寺の名は何と云ひます」

「何と云ひますかな。知らないが」

と答へる。此の小さい通州ぐらゐの城内界限で寺の名がまさか判らぬとは受取れぬ。そこで又少し語を加へて、

「あの高塔のあの寺ですよ。あそこは何寺と云ひます」

と、少し聲高かに耳に近く云つて見た。すると老爺、アイヨウ、あれかあれなれば判つたと云つた顔付して大きく、

「ターガミヤオ」。「ターガミヤオ」

と發音するやうに聞こえる。ステツキでも渡して横町の路面に字を教へてもらふ積りでターガミヤオとはどう云ふ字を書くのですかとかいて見たが、老爺、

「字なんかは知らぬ」。「ターガミヤオだ」

と云ふ。習慣上人間の歩く往來の地なんかには字は書けぬ。勿體ないからとさう考へた爲めでは無論なく、全く字を知らなかつた爲めである。通州訛りの爲めでもあるか、高聲ではあるがよく判らぬ。こちらでその通り發音して、先生の前の生徒のやうになつて、

「ターガミヤオ」

と、やつて見たが違ふと云ふ。腑に落ちない。土屋、鳥山兩君もスベルの稽古の如くのを掘る音を出してきつくターガミヤオを繰返す。それでもいけない。と云はれる。大童の生徒は評定の結果それは定めし、

「大觀廟(タークワンミヤオ)だらうよ」

「その通州なまりであらうよ、字は判らぬが」と云ふことにして鼻を付けることは付けたが



そのとき大笑ひ。同じ直隸でも言葉の方では北京を僅か出ただけでデリケートな此のやうな遠ひがある。それ共われ／＼の聞き分ける耳の方が間違つて居たのもあらうか。しかしかうした無駄な彌次をして見る間に城内の田舎情緒の味が出るのである。

いよ／＼そば近く行つて塔下墻外から白塔を仰ぎ見るとその様式と云ひその年代と云ひ、千有餘年の星霜をたしかに經て居る。堂々たる十三層の古塔である。よく其のデテイルに就いて見ると軒端の瓦は大分落ち各層各層の輪廓も壞れかゝつて居る。そこに繞らした古い墻壁の嵌め石の刻字を讀んで居ると、これは珍らしい唐の時代の舍利塔なのである。

燃燈佛舍利塔 唐貞觀七年癸巳建。

明萬曆三十五年庚戌工部郎中平湖陸基恕識。

とかやうにある。六朝から隋唐にかけての佛教全盛期の建築の遺物であるだけに立派な美術的彫刻など周圍に現はされてゐる。日本では奈良の正倉院や法隆寺にも比すべきもの。雙橋の無電を見た目で、唐代のこの古塔の下に來たり千古の詩趣に浸りたゝすんで見ることはあたまのチェンジマインドになつて宜しい。しかし折角こゝ迄來て唐の古美術を味つて見るに墻を隔て

て塔を仰ぐのでは少々物足りない。靴を隔て、痒を搔くと同様な譯だと先づそこら邊りの高所に登らんとする。半壞の縦に二つに割れた城壁の上を一つ一つ煉瓦傳ひに足場を見出し、見出し殆んど恐れ恐れに四つ匍ひの如き恰好して攀ち登る。おほ童の鳥山君好機逸すべからずとばかり又と得難きこの珍場面をカメラに收めたるは傑作中の傑作であつた。壁上に立ち鯨け目の壑谷に沿ひ塔寺の境内を臨み見るにその規模廣からず荒れ果てた寂しき廢墟の光景で支那の片田舎によく見る無人の廢寺のやうである。唐代の佛教全盛時代に思ひ比べて此の境内の有様こそは全く世の榮枯盛衰を物語れる好個の遺蹟であると見た。通州城内の大觀は高塔廟臺を主題に大小數多の町家樓屋の相櫛比して眺めらるゝがその白河の舟楫の便を有し天津方面と水路の聯絡を有する割合に通州と云ふ所は市況に活氣なく殷盛の氣分を漾はせても居ない。北京を一つ出ればこれである。矢張り何と云つても北京郊外の一田舎町としての廢墟の情趣以外の感じはどうも起らなかつたのである。

十三層の古塔を背景に、城壁の上から城外景趣の展望を肆にするに雙橋の六基の高塔は幽かに樹林のかなたに指顧せられてゐる景色はぼんやりと見え、城壁に沿うて長く打續ける水澤の



汀は楊樹の並木の影淡く、夕暮れの雲煙低く垂れ來たつて城外の大平野の暮色は將に恰かも大陸を包む眞綿か薄絹もて蔽はれんとするにも似たり。懐かしいこの通州城外のパノラマは髣髴として見る／＼雲煙模糊の間にその景趣はぼかされて行つて古の宋元あたりの水墨の畫卷そつくりの感じを起させてゐたのであつた。

北支那城外の夕暮れの詩的情趣は多く此の氣分である。ぼんやり乍らその見渡す限り視線は地下線まで届きそのスケールは廣大である。けれどもその大に漾ふ氣分に何となく哀れつばい古人の詩や歌に洩らしてある感じと同じ情緒が咬られてゐる。殊にその雲煙に包まれてゐる楊陰農家の門に亡國的の音を象徴せる驢馬の嘶く聲を耳にする時とか東方地平線上のゆふべ朱の如き紅き満月の登り立つとき秋の蟲を聞くなど何れもその詩趣深き丈にその哀調の印象を一入深からしむるものである。

かうした氣分で通州城壁の一角に立ち思ひ出多き民國の大歴史を顧み大陸の異國情緒に打たれつゝ之を下る。するとやさしげな一人の寺僧の土民どもと樹下に路傍に語りあへるものがある。寺僧に教を乞はんと自分は、

「この塔のある古寺は何と呼ばれるか」

「ターガミヤオとは云はずや」

と、たづねて見るに、寺僧ニコつきながら答へて云ふに、

「さうでない。勝教禪林と云ふ寺だ」

と、教へる。「ターガミヤオ」の名は遂に要領を得ずしてこれも模糊となつて了つた譯である。が或は禪林の俗名かそれとも全然別寺の稱呼でもあるかと云ふ氣もした。しかしこの僧の親切なる開門東導によつてこの塔寺が古い禪寺であつたことは判明した。そして奥の正面の御堂に古ぼけた崩壊せる一二の佛像の傾ける者が寂しく眺められた許りで經堂、講堂、客堂、庫裡、石卓すべて荒廢に歸し古塔の下に出入の出來てゐた牆門まで煉瓦を一パイ嵌め込んで塗りつぶし全く塞いでゐる所まで判明したのであつた。その兎角古寺に多いホワツ（花子と書き乞食のこと）の住まひに占領されたり宿なしの賭博場に使はれたりなどしないやう固く門の銷されてあつた丈けはまだ／＼廢寺ながらもよかつたと思はれたのである。



#### 五十四 道教の寺紫清宮に詣り

廢寺古塔の下を出でて案内せらるゝまゝにどこ迄でもくつ着いて行く。「紫清宮」と云ふ立派な道教の寺に來た。見るからに寄進喜捨の豊富なる裕福な寺である。觀門堂宇、壁一つ剝落の跡もなく、蔓一つ落ちた形跡もない。修繕のよく行届き裝飾塗抹至れり盡せりである。自分は寺僧と話しながら、

「道教の寺はこの通りの繁昌だ。結構なことだが佛教の寺と來たらかくの如き荒廢だ」

「これは支那一般の寺相の縮圖だと見るべきで一般に支那各地皆この傾向を示してゐるやうだ」

など多年南北各省の山門寺觀を巡歴してゐるところから考へて見ると、清の字のあるのでも想像せらるゝ通り道教の寺である。が老子や莊子のやうな汚い本尊を祀つた寺でもなく又六朝の葛洪あたりを祭つてゐるのでもない。極めて卑近な道教金ピカの先師三尊の土偶を祭神とし之に「聖蹟仙宗」の扁額を奉つてゐるのである。支那の寺は仙宗の二文字のあるので一見して直

ちにその道教系統の寺なることを察知し得るが尙この寺邊りでは大道に面して長く繞らせる塔壁の壁面に持つて行つて横に楷書の文字で以つてその筆蹟も麗はしく紫雲仙境とあるが讀まれる。これが又道教の色彩を浮べたる文字である。また之に並べて、

#### 「敬信齊」「施粥處」

など、云ふ語のこれも壁面に大書せられてあるなど見るからに今様道教の教理の益々實際的又民衆的に理解され易い所以の言葉であるとも判るのである。支那では各地の道教の寺で種々な尊き民衆的の社會事業をやつてゐることをこゝに特筆しなくてはならぬのであるが、通州のこの紫清宮に於てもこのシステムが設けられあることは上に述べた日本人が先年粥の煮き出しをこゝでやつた類のことを見ても推測されるのである。尙しかしこの寺ではそれ許りでは寺が寺だけに又その教理の上からでもその色々の文化的又教化的の慈善事業をやつて居る。つまり之を現代的の見方からすると、

- 一 教育、二 學究、三 印刷、四 接待、五 博愛、六 施療、七 救恤、八 施米、九 社會葬、
- 十 共同墓地の提供。



と、云つたやうな今日吾人の目から見ても其の可なり進んだ社會政策的の事にまでも及んでやつてゐる。之を今日の青年團であるとか一般自治團體であるとか云ふ所で營む事項に比べて考へて見ても決して遜色はないと云つてよろしい。寺内の軒端廂近く掲げられたる扁額の言葉をその文字通りに見て行くと頗る面白い文字がある。今之を茲に紹介して日本の社會事業、青年團方面の参考に供して置く。

一 敬惜字紙、二 刑印善文、三 義塾育才、四 淨手施茶、五 結社放生、六 捨藥救疾、  
七 施衣禦寒、八 施術飽衆、九 施棺殮殮、十 義地埋殍、壁面に又國誼學塾。

などである。こゝに義塾と云ひ義地とあるは一切その費用に充てるかねを取らざる塾また只の土地と云ふ意味であることは云ふを俟たぬ。猶こは南方支那の田舎に義渡とありてはしけ賃不要の渡しを云つてゐると一般である。紫清宮の境内にはすべてその看板が掛かつてゐる。自分共が行つて見た時にはこれらの仕事全部各房室にそれ〴〵やつてゐたと云ふわけではなく、單にこれら各般の事は何でもやると云ふ活動振との内容が分類されて示されてゐたに過ぎなかつたのである。

支那の民俗を大觀するに儒教や佛教が社會的にあまり力を有して居らず民間の信仰喜捨、參拜焚香と云へばいつも擧げて悉く道教の寺に限つて居ると云ふことはこれら民衆に直接理解のある生きた實際的の事業をドン〴〵やつてゐる現實に基づいてゐるからである。この點から見ると北京や山東の孔子廟が年に一二回爲政者を中心に祭をするとか佛寺が人間の死後の冥福を祈らせる爲めに人を集めてゐるやうな力の入れ方によいやり方とは違ひ餘程社會救濟の方面の意味から云つても有意義なことをしてゐると稱してよろしいのである。そしてこれらの仕事をその中心の信念を表現する爲めに此の紫清宮では中央金ピカの神像の前に「聖蹟仙宗」の大文字を高く掲げてゐると見るべきであると考へられたのである。

自分は支那漫遊途上かうした按排に北京にゐた間に漫然と雙橋を立つて何と云ふあてもなく通州に漂然來て見たのであるがかやうに意外の掘り出し事項に會つた。通州と云ふ處は南方に江蘇の南通がある。南通州である。最近に亡くなつた有名な張謇が棉花、紡績を中心として社會的に泰西文明をとり入れ電氣、交通運輸、印刷、財政、經濟、教育、衛生と何でも至らざるなしのやり方をやつてゐる事は周知の事である。今北京東郊のこの通州に上述の舊式とは云へ



社會事業的システムの看板を寺内に見ると云ふことは意外に又頼もしく人一倍興味深く感じたのであつた。

一同歸路に就き途上ちよつとしたささやかなる古玩店を見付け何とはなしに立寄る。がらくた物のみを列べた小店に過ぎなかつたが空き集狙ひの目もかくやとばかり棚の上下を隈なく三人で見廻はす。すると、康熙の染付、乾隆の大花瓶、辰沙の水滴、染付の鼻煙壺など目星しきものも目に止まる。勿論皆寫しものみではあつたが藍のあがりのよいもので染付の味など殊によし。田舎の老爺なれば負けてもくれるだらうといくらから見縊つた氣持で先方の云ひ値の五分の一に低く付けて見る。樽俎接衝に大分ひまどる。その筈である。東京なら縁日の植木でも冷やかす氣分であるのである。すると里人行人の店頭に來たりたかつて見てゐるもの黒山の如く七重八重に押しかけてゐる有様。鼻煙壺の蒐集に熱心であつた烏山君のみは最もその品物に未練があつたやうであつたがしかし朴訥ながらも言ひ値から少しも折れて來ない老爺のあまり固たい態度が蟲の居どころを悪くし、こちらも剛腹なやうな氣もして、

「是非要る品でもあるまいし」

「まげなければ幸ひよ」

と、許り棄てせりふでいざさらばとて門を立ち群集おし分け城外町外れの折れ曲りまで出た。思ひが残つてゐて「ショップファー」を使に老爺の處へ念の爲めやつて見ようと、

「今少しく歩み合ふ氣はなきか」

と、確かめさせにやつたのである。使の歸り來ての言葉は、

「とても駄目。その氣はなし」

とのきつぱりした返事に、愈々以て斷念し通州異國の情緒、盛りたつぷりに色々の經驗を重ね重ねて、あとは一直線に照明の光りをたよりに大路を飛ばして雙橋の村も暗みの森かげに朝陽門のかぎの手の大通りを城門内に入り、東四牌樓街電飾明るき北京城内雜沓裏の夜景畫中の人となつたのは六點鐘の頃であつた。かくて北支半日の清游に北京城外は此の頃有名になつた雙橋の森影から通州の天地に漲る異國情緒を親しき友と味ひエンジョイすることが出來たのは何よりの思出多き一夕話である。



#### 十四 北京東城に鄧完白山人の後裔と翰墨談

清朝の初期康熙から乾隆にかけての支那の金石學が隆盛を極め多くの金石學者の輩出して後世の鐘鼎金文研究や龜版文字研究の先驅をなしてゐることは學者の夙に知る所である。中にも乾隆末から嘉慶にかけて安徽出身の金石家に其の人ありと知られた碩學は鄧完白(頑伯、石如)山人である。自分は夙に金石の癖があり故拓川加藤翁などと支那に古硯、金石を漁つたときの如き主としてこの鄧完白山人の古篆の名作を獲んことに腐心したものであつた。又先年安徽の山郷を游歴し文墨行脚に雲水をきめこんだときにも鄧完白山人を慕ひその書を漁つてゐたのであつた。當時幸に鄧石如の落款にて朱拓の對聯を歙縣に獲ることが出来て今以つて之を好記念に東都小石川の小廬に掲げ朝夕その筆蹟を眺めて人知れぬ詩趣を感じてゐるわけである。

最近北京滯在の三ヶ月の間に偶然にも安徽鄧完白の後裔、鄧初氏(仲純、皖懷の人で完白五代の子孫)が醫者を業とし北京東城、東華門外に寓してゐることを耳にした。小菅醫學博士の紹介で鄧氏の邸を訪ね完白先生の遺墨尺牘その他の書影拜觀の榮を得た。公使館の岩村成充君審計院の土屋法學士の君も同道共に翰墨癖の濃厚な仲間のこととて鄧氏を中心に趣味深き先人の追懷談が始まつた。長江江岸皖懷の地は完白先生の故地であるが幸にして長髮賊の兵亂の際にも災厄を免れ兵燹掠奪にかゝつたこともなく、爲めに完白先生の遺墨は大小完璧、殘簡、斷箋大抵のものは保存してあるとの説明があつて、目星しいものを舍弟の處へ使を差出し取りにやつて迄くれたのであつた。

外人のわれわれが支那の名流の後裔を訪ねその遺墨を拜觀するなどは珍らしき出來事と考へたものでもあらう。今どきの北京の新人など振向きもしない世時に古人を慕うて門を叩くなどは一種の清香氣分に驅られたと云ふよりも懐しさのあまり出かけて行つたものであつたが心よく一行を取持つてくれた。壁に掛けられてあるもの、神秘のうちより取出し巻を開いて見せてくれるもの、時には軸の片方の抜けて壞了してゐるものもあつたがとに角、豫想の如く完白先



生の面目を百五十年後の今日逐一窺ふことが出来たのである。とかく有名なものは金冬心にしろ、高鳳翰にしろ又鄧完白そのものにしろ北京の瑠璃廠あたりにあるものは十の八九、疑の存するばかりである。あつても金農に倣つたもの高南村を臨したもの、鄧完白を模したものばかりである。イミテーションのみである。支那人は日本人のやうに模寫偽作に就いて左程八釜しくは云はぬのであるがそれにしても眞物眞蹟を手にすることの方がよいにきまつてゐる。今、鄧家の當主、北京後門三眼井三十一號の邸に拜觀してゐるものは總べてこれ祖先そのまゝの傳來のもののみであるのみならずそれを五代目の子孫から直接説明されてゐるのであるからすべて疑問など云ふ觀念からは全然超越して見てゐるのである。完白先生の面目を躍らせてゐるもの計りで篆隸楷行草の書幅、卷軸大小何でもござれである。又有名な羅聘が奇抜なる山上の巖を畫きその巖頭に頑伯山人を描ける如き最も興味ある大幅も雄物の一であつた。完白先生は鄧初氏の談によると六十三歳で亡くなつてゐられるがその晩年五十七歳のときの筆に成つた正楷の雙幅にはかなり面白いものがあつた。大幅と云ふではないが極めて謹直な書風で書かれてあつて而かもその句が頗る振つてゐる。その句に何もかも包括するやうに取入れて甘いことを云

つてある。その双幅の一つは地理的のもので他の一つは歴史的文學的のものであつた。がしかしそれは既に二百七十三頁にその對聯を原文のまゝ詳しく示しておいた通りである。

その雙幅對聯の句は尙北京總布胡同、黃氏の宅で武進錢維城の對聯に剛日讀經、柔日讀史。無酒學佛、有酒學仙。とある佳句と共に快心のものであると感じたのでこゝに再度之を紹介しておく次第である。



## 十五 北京貧民學校に觀る落花流水の遊戲

### 五十五 異彩を放つ日人經營の學堂

北京は東城の朝陽門、東四牌樓の大街に面して育成學校と云ふ支那貧民の面倒を見てゐる學校がある。支那では四等五等の列車に貧民車と銘の打つた火車もある。學校に貧民學校と銘を打つても差支はない理窟であるが教育のことであるから殊に面子を考へ育成學校としてある。この名前の方が人聞きもよし字を見た感じもいくらか判らぬ。支那には民國になつてから澤山の小學校を増設されたやうに宣傳せられてゐるがたいした事はない。

上海に北京、山西方面は別であるが概して一般から云ふとまだ小學教育でさへもいくらか普

及してゐないのである。文書や規則面ではそれが殖えたことになつてゐても事實はそれ程に設けられてはゐない。日本に比較して見るときは特にその感じを深くするのである。先づ支那の都鄙全體から考へると矢張りまだ支那は何と云つても寺小屋式の所が多いので寺觀のうちの一室に學童を集め村夫子然たる人の之が教鞭をとり咿唔の聲のその窓外にさわがしく漏れ聞こゆると云ふが普通である。その程度であるから游歩場など云ふも設備されてゐないのが多いのである。

育成學校は元來日本に最も深い縁故を有してゐる。南方の福州にある東瀛學校（野上英一君を校長とする）あたりと相並んで日本人には是非知つてゐてもらひたい學校である。福州、廈門の方面は臺灣總督府に關係がある丈に日本人の間ではときどき話題に上つてゐることもあるが北京の育成學校の方は殆んど誰れも之を云はない。自分は北京に客中特に此の學校が日支兩國の兒童の友情を結附けてゐる意味に於いて最も熱心に此の學堂の實際を親しく見ておきたいと思つた。と云ふのは抑もの創設の初め費用が北支那に先年大飢饉のあつた際日本内地の各小學校で生徒が一名十錢づつであつたか同情の贖金をしてそれで一つには色々あちらの救恤の事



を助け又一つには此育成學校と云ふ貧民學校を起こした。この事については帝國教育會が多  
大の骨を折つて今日ではその苦しい中にも既に一異彩を放つた貧民學校と云ふ立派な事業を經  
營せられるに至つた。その學校内部が極めて清潔で運動二つ教室四つと云ふチンマリした純支  
那式の學舎である。生徒は始め貧民の子弟をのみ目的に開いたのであつたが次第に中流の家庭  
から入學して來るやうになり貧民の子供は自分の家の生計を手傳ふ爲めとか又はその色々悲惨  
な家庭の事情があつただんぐと來られなくなりその結果今日では本來の貧民生活は殆んど迹  
を絶つに至つた。見るからに校舎はその清楚和平の氣分の漾うてゐるに調和してこれに通學し  
て來てゐる生徒の身なり容姿も決して賤しからず男女教習の諸先生の風貌も又かひぐしく洵  
に吾人に好印象を與へてゐるのである。北京に數ある支那人小學校のうちでも此の育成學校と  
云ふはその規模こそ小さいが東四牌樓の大通りでたしかに最も留意すべきものゝ一つになつる  
と推察しても憚らないのである。

### 五十六 かいがいしい學童の所作

日本人の北京觀光は多く宮殿寺廟の見物か諸名士との會見で大抵濟んで了ふ。雙橋の無線電  
信を見たり、北京の各學校を視察したりする者は割合に少ない。學校と云へば北京大學、師範  
大學などが視察されるので貧民學校などは殆んど眼中におかれない。表面の支那文化の魁は北  
京大學に見られる點もあるが又その反面の支那は低級な方の社會現象の上から見なくてはなら  
ぬのである。小學校方面に於いても亦色々隠れたる支那の社會相が窺はれてゐるのである。  
自分共は北京滯在中偶々日本から澤柳政太郎博士の來遊を機會に北京朝陽門内に此の育成學  
校を訪ねた。支那側では湯中氏。日本側では中山龍次君、土屋禎二君などと云ふ熱心家が専ら  
此の學校の經營方面に久しく努力してゐられる。學校は一年より四年まであつて男生女生の共  
學であるが各教室には生徒の收容數を少なくし、わざと多く容れないやうにしてある。自分共  
は先づ一年生の教室から參觀を始めた。

思ふに田舎の寺小屋や書房などへ行つてかうした參觀でもしやうとするとすぐ子供たちはそ  
とへ逃げ出して行くのであるが流石はこゝは北京である黑板の前に姿勢正しく立つて教鞭をと  
れる先生の方も頭髮をおさげに垂らしてゐる學童や唐子の如き男の學童は何れもかひぐしい



姿で低い小さい四角の腰掛に納まり卓上の教科書に目を注いでゐると云ふことは實によい氣もちがする。自分共は元の東京青山師範の校長であつた瀧澤翁や中山、土屋兩君それに校長の某君等も興味深くその教授振りなどに留意をしてゐた受持の先生は白墨で黒板に漢字を大きく一字書いた。そして生徒に読み方を答へさせやうとして先生はそこで「知つてゐる者は手を舉げてと云ふ。指名せられて立つた生徒は快活に之を發音するそれ計りでなく先生は生徒を前に呼び表音引の新字でその字の北京音を發音の通りに書かせる。日本で云へば振り假名に當るわけの音表である。少しでも違へばすぐ更に又手をあげさせて他の生徒に直させるのである。國語(支那語)算術理科をそれ〴〵教はつてゐる二年三年四年へと順次參觀する。

日本では兒童が教室で答をするに時々恥かしがつて兎角からだを半分斜めにねぢり乍ら云ひたいやうな云ひたくないやうなはつきりしない態度をとるものがあつたりして先生を手古摺らせることがあるのであるがこれらの兒童は割合にはつきりしてゐる。無雜作に答の出来るので感心した。

やがて時の鐘が鳴ると兒童は整然と運動場に出てはしやぎ遊ぶ。校長の指圖好意で次の時間

は繰合せができる全部遊戯となる。何れも制服としての揃ひの支那服をつけてゐるのでその可愛いこと何とも云へぬ。これは通學して學校に這入つて来るなり毎朝その控室で皆制服の揃ひに著替へさせることになつてゐるのだと云ふことである。そしてその生徒の遊戯は運動場の狭い關係上手廣い遊戯は出来ない。初は一クラスが濟んで場所があれば其の跡へ次のクラスが出て演ずると云ふ有様である。三年四年の遊戯となると複雑で又巧である。圓舞と云ふ見たがその圓が或は大きくなり或は小さくなりその可愛い手の翳しかた、足のつまさきの運びかた、すべて一齊に女の先生の呼子の笛とオルガンの調子に合せて一進一退實によく仕込まれたもので何とも云へぬ優美典雅な感じを起させたのであつた。

然かしそれよりも更に上品な落花流水の遊戯はめい〴〵揃ひの薄桃色のたすきに青のたすき、それに両手に又揃ひの花房を翳し足並みそろへて大團圓の輪をなしたかと思へば二つに桃割れにわけて中央には手に手を取つた手つなぎの門の出來たその下を一人一人どくどく流れて行く。流れては集中し、集中しては散じて行く。全く十一二歳の花に飾られたる兒童のこの落花流水の遊戯は日本でも以前には行はれたことがあると聞いても居るが北京の都で目の當り支



那唐子に演じさせて見てこそ始めてその眞の落花流水の優趣を羨はせることが出来るやうに思はれたのである。これは支那兒童のそろひの服制の可愛いく出来てゐることが何よりであるがこゝ迄一々仕込まれた育成學堂の先生たちの努力も又大抵でなかつたことであらうと思ふ。北京朝陽門内に此の落花流水の唐子の遊戯を見ることは今後日本觀光雅客の北京視察プログラムの中に入れてもらうやうに慇懃しておきたいものである。

## 十六 北京の大武術と手品

### 五十七 北京の輕業師

北京語で輕業のことはターウーシユア(大武術)と云つてゐるが流石は四百餘州の都だけに妙技の神域に入つた輕業師が色々居る。北京は有名な歡樂の郷であるから天橋路や各所の白市に行つて見ると大武術だの變職法奇術だのと中々盛に流行してゐるやうである。それらの數ある輕業師のうちでも前門外の姜福林(三十五歳)と常岐山(十九歳)の二人は日本人の間でもよく知られてゐる輕業師である。日本へも關西地方から中國九州あたりまでかけて巡業に出かけて來たこともある。



日本人の輕業師の演ずる舞臺だけを見てゐると多くは日本人の發明に係るものの如くに思はれてゐるが支那であちらの輕業師のやる所を一々見てゐると大抵日本のと相似てゐる。もどが支那オリヂンのものであるか、それとも更に西洋から來てゐるものを雙方で習つたものでもあるか。系統はよくは判らぬ。しかし兎も角も支那人にやらせると又格別に鮮かに行く。からだを逆立ちさせてゐる姿から次第に前方へ彎曲させ兩足を首の左右まで下げて來て一つの輪狀をなし提げられるやうになつたと思ふと下の方から何か歌を唄ひ始めて人を笑はせたりする位のことは何でもない、或は直立の姿勢から仰向けに反り身になり次第に首を後ろに垂れ下げて板まで届かせる。仕舞には二つにからだ折れて了ふかと、はたで氣遣はれる位であるが如何にも柔かに行く。かるい懸け聲の一つでまたもとの姿勢に直つて來る。常岐山君の方はからだは若い丈に自由自在になり、妻福林君のからだの蝦なりになつて來る、その上に乗かつたり飛んだり跳ねたりする。さうかと見てゐると又姜君が常君の上にその反對を繰返して行く。その邊の大武術は既に妙に入つて感心なところを洵に軽く行くのであるが然かしその邊のことではまだ月並みである。その眞に觀るものをしてハラハラさせる最も得意の妙技は柱頂人と云ふ有名

な武術である。日本に來てゐる李載などもかなり色々なことをやつて日人をあつと云はせる達人であるがまだまだ柱頂人の武術はやつたのを見ない。

「柱頂人」と云ふは常姜兩君の共同動作になつてゐる最も努力のわざであるが極寒尙全身に汗すると云ふ程の妙技でその時間も亦かなり長くかゝる。その佳境に入つた所は姜君の頭上につて行つて倒さまに常君のあたまが來る術である。倒さまの姿のまゝで姜君の動くどこへでもあたまのくついたまゝ動きなが藝當をするのであるが頭上の常君はそのあたまこそ動かさないが手足は自由に動き拍子に合せて種々な危ぶない藝當ばかりを次から次へと續けるのである。即ち之を支那流の名で云つて見ると

人頂人。 淺大頂。 蹠頭人。 倒腰頂。 平身子。 椅子頂。

などと呼んでゐるが何れも皆實に奇異なるものばかりである。その頭上に始め乗るのにはどうするかと云ふと人から力を借りるのでなく先づ兩君互に頭と頭をつけて共に板間に平身に横臥し常君は柱に直角に足のうらを當て力を入れて踏ん張るのである。そして次第に足の腹で柱の面を攀ち登つて行くにつれ姜君の方でも少しづゝ身を起こしてあたまを持ちあげて行くのであ



る。

姜君が完全に直立して一本立ちになつたときは正しくその頭の頂上には倒さまに常君の頭もかたく附いたまゝつながつてゐるのである。それから歌を唄ひ出したり支那料理を箸で取つてたべたり又茶を飲み乾したり乾杯したコップの底を客に見せたりなどするのである。而かも慣れたもので全部平気でやつて了ふ——とは云ふものゝ直立せる二人の先生の顔をよく見てゐるといつも口を嚙みしめて非常な力を入れ口角に泡を吹いてゐるのである。渾身の力で顔は赤らみ汗はビツシヨリ出てゐるが絶えず舞臺をクル／＼あちこちと靜かに動き演じてゐる。頭上で逆さまの常君、上にゐる丈に少しは樂であらうが、でも全身の重みも頭蓋骨で受けて居るわけだからこれも並大抵ではない。けれども平気で左右の両手に紅黄青白黒の五色の民國旗を翳して何の苦もないやうに輕快な氣分を客に與へてゐる。肌にはあれ丈の骨折りであるから油汗を出してゐることであらうと思はれたのであつた。氣の弱い観客は之を見てゐる丈でも疾くに腦貧血でも起こして暈れて了つたであらう。暈れない迄も淑女たちは見るに堪へずしてどうぞ止めてもらひたいと云ひ出したものもあつた位である。實際見てゐるものは皆息を嚙み殺して

間髪を入れぬ速わざにハラ／＼させる藝當ばかりである。

やがてプログラムの藝當の終る頃になると素との柱のそばにそのまゝ戻つて来て、常君は足のうらを高い柱面にベタと當て次第におりる仕度をする。滅多にやり損んじて怪我をすることはないがしかし首尾よく行く観客は思はずヤレヤレと重荷をおろした氣持ちになり安心して胸をなでおろすとして兩人のあたまは完全に離れふたりは相並んで舞臺に直立しニコツと笑ひ愛嬌をたゞへ何事もなかつたやうな涼しい優しい顔附きで樂屋の方へと姿を消して行つたのである。

註に曰く。頭上に倒頭を重ねるときは布で拵へた輪狀の釜敷きの如きものを當てがつて充分シツクリと雙方の腦袋を融著させるやうに努めるのである。グラついてゐては危険此の上もないのである。

### 五十八 北京蛇づかひの手品

支那の人々が支那拳で打興するときの場面を見てゐると聲の八釜しく賑かに叫ばれてゐるこ



とよりも手先の巧で一心、二喜、三元、四季とやつてゐるときその手の器用さ加減又その機敏なることの非常なるを認める。しかし支那人の手はよい意味に於いて物を手速くかくしたり操縦したりするには一番よく適してゐる。實にまめであつてよくこなしてゐる。上海あたりの自動車のシヨツプファーは支那人に限る。西洋人自身やるよりも支那青年にまかせる方が手があつらへ向きであつて事故を起すことが少ない。

かやうな傾向を色々い方面のことに運用發達させて行くならば有望なことが色々あるであらう。古來支那奇術の如きは支那人自身の最も得意とする所であるが吾人より之を見ても實に支那人はお誂らへ向きであるとの感を深くする。日本の手品には西洋だねのものも色々あるであらうが支那だねのが中々多い。手品は支那が本場だけに支那人の手は實に手に入つたものである。

北京東安市場の廣場で自分ともひまさへあれば行つて見たものであるが簡單にしてうまいことをやつて見せる。黒山の如く人の集まつてゐる真中に風呂敷やうのさらさの布を持つてしやがんでゐる手品師がゐる。地べたに布を擴げ黒扇を以つて之をバタ／＼煽ぎ立つる。色々

はや口で滑稽なことをしやべりつゝいつまでも煽つて居る。時々地面から布を両手で取り上げその下に何物も這入つてゐないことを示す。しかしその扇を使つてゐるうちに布の下は風を争み風がこもつて來たらしく中央部が僅かばかりであるが高くなる。風が這入つたと考へるより他に何物も這入つたとは見えない、然るに扇をたゝんで之れを叩いて見るとかたさうな音がする。次第に高くなつて來る。鐵の五徳が這入つて居るやうな音である。そして布は圓く高くなつてやがて三四寸ももち上がる。

手品師はちよつと布を取りのけ見せてくれる。果して鐵の五徳が現はれる。又布で之を蔽ひ更にバタ／＼もあふぐやうな恰好で之を煽いでゐる。そうすると中央が益々高く持ち上がりしまひには動き始めるものがある。ウント高くなる。たしかに動物でも這入つてゐるかど考へさせられる。手品師はニコ／＼顔で速くちでおしやべりをつゞけ、やがてバット布を鮮かに両手で取り去ると何ぞはからん果して生き物がゐる。うす氣味のわるい二尺大の蛇がニューと胴體を螺旋状にしたまゝ首を高くさし伸べ舌をペロペロと出してゐて南に向いて目を光らかしてゐる。満座大いに驚き怕れる。ブウウン、ハイバと云つてゐるが少娘など色をかへてしまふ



のである。気味はよくないけれども好奇心で人は尙つゞけて見てゐる。之を視詰めてゐる支那民衆の顔付と云つたらない。口をしまりなくあけてばかんとしてゐる。全く蛇の催眠術にかかつてゐると云へるであらう。

### 五十九 上海の壺ころがしの妙技

江南は上海杭州邊り正月になると手品奇術師が巡業して來るものが多い。上海邊りで見たり手品師が一日兩手に二尺圍りの丸い壺をかへて客の前に現はれる。ヒョツと投げるやうにして片手の掌の上に載せたかと思ふまもあらせず腕をあげる。壺は肘を傳たはり肩の方へどく／＼廻り乍らすぎつて行く。そして兩肩を屈すると壺は肩から又片方の手に傳はる、手をボント揚げるどあたまの頂きに壺は載る。そして自動的に廻轉してゐる。それが足頸のところに移つたり股の下をくゞつたりして頗る危ぶない。はらく／＼するがまだく／＼やさしいと云つて笑はせる。そして手品師はそれを尻の腰骨の上にあんばいよく載せて背中ちうを一巡させ肩から手に戻して來る。全く油汗をにぎらせたり冷や汗をか／＼せることが度々である。頂好と云ふも

のがある。當人平氣にして何一つしくじりもなく無事にもとの如くに兩手に壺をいだいて大向ふの賞讃を買つてゐる。

また上海で見た手品であるが油のひいてある雨傘を舞臺でバツと開きそばの手品師から火のついて燃えて居る七八寸の輪を傘上に投げさせる。始めは少し計りもえてゐた輪が次第にたくさんもえて來る。傘は淀の川瀬の水ぐるまでよく廻つてゐる。そしてその傘の上で燃えつゝある輪はよく廻つてゐる。がしかし燃えてゐるのは輪のみであつてどう云ふわけか傘にはもえ附いて來ない。仕懸はあらうけれどもたねは判らぬ。判らないから不思議に思はれる。今もまだ判らぬ爲め感心してゐるのである。

蘇州の玄妙觀は城内の淺草見たやうなところで露店や見せもの小鳥店などで雜沓してゐるところである。寺のうら手は靜かである。そこに手品師が人を引つけて居る。引つけられて行つて見ると寄りかけ椅子を倒さまにしてその一方の一本棒のみ支へられたその椅子の上に蝦なりにしやちほこ立ちになり色々の藝當をやる。しまひには手提靴のやうな恰好になつて兩足を兩肩のところに持つて來る。酢でも飲ませてある爲めか骨が自由自在でその蝦なりの子供は點



心の菓子でもお茶でも何でも口に入れる。食道や胃が上方になつてゐるのであるが譯なく平げ  
る。而かもそれを倒椅子の上でやるのでハラ／＼させる。かなり慢々的にやりづらさうにして  
やり首尾よく行くと黒山の立ち見をしてゐた客に興行師から哀を請ふ、大抵小洋の一毛か二毛  
を恵むのである。かやうなたぐひの奇術手品輕業は支那各地の縁日、大世界、新世界と云つた  
ところには終始行はれてゐる。ひと風かはつた趣味であるが支那人の歡樂氣分でこれもかなり  
興味をそゝりいつ迄見てゐても見あきが來ない。終日茶館で遊ぶよりも物によつては面白いで  
あらう。

かやうにいづれの方面から見ても支那は民衆の歡樂氣分を満足せしむるやうに出來てゐる。  
そこが支那社會の現代的にまた文化的に面白いところである。支那の社會にはその方面にまた  
棄てがたいところがいくらでもあるのである。

## 十七 支那上代の貨幣と裝飾用具

### 六十 支那上代の經濟

支那人の財貨を溜めると云ふ考は、獨り此の頃になつて盛になつた譯でない。よほど古い時  
代から財貨は溜めておかなくてはならぬと云ふ自覺を持つてゐた。財貨を持つてゐなくては、  
物を買ふことも出來なければ物を貿易することも出來ぬ。人の祝賀に行くことも出來なければ  
賓客を迎へることも出來ぬ。貢物を納めることも出來なければ賦役を出すことも出來なかつ  
た。賄賂の如きものは使はぬものにしても贈物なり贖(はなむけ)なりをするにはどうしても財  
貨の貯へといふものが需要であつた。贅澤を購ふ程のことはなかつたにしてもすべての諸雜費



のかゝりと云ふものは昔の時代であつたところが矢張り同じ事で資産財貨の貯を必要としてゐたことは説明するまでもない。かう云つてゐる言葉のうちからその文字に注意して見ても財貨の貨だの買だのその外資、貢、賦、賄賂、贈、贖、貯、贅、購、費などの古い文字が使はれてゐて、その中でもわけて貯の字のやうに貯金の貯といふことを表はしてゐる文字が既に古くから出来てゐる以上は溜めると云ふ考の年代も今からよほど古い時代に遡られるのである。日本の神武天皇の時代より或は更に一千年位も古い時代に於てたしかに財貨の貯蓄といふ考はあつたであらうと想像せられる。或はそれよりもつと古くから行はれてゐたかも知れぬ。兎も角支那でも文字の出来初めた時分に貯金のこと既に行はれてゐたと云ふことは云へるのである。

文字の古さと云ふものは日本では一千七百年の古では支那傳來の年代がおそかつた爲め甚だ新しいのであるが、支那の本場では今より三四千年の昔に持つて行くことが出来。そして貯の字だの買の字だの買の字だのといふものはそのうちでも最初に持つて行くことが出来るのであるからよほど古くから貯金の考や賣買上のこと行はれてゐたことが推測されるのである。

勿論貯金といつてもその貯へたもの、溜めた所のものが貨幣に關したものであつたことは明白であるが、然しそんなに古い時代に支那ではどんなものを貯へてゐたか、溜めると云つたところでどのやうな貨幣を溜めてゐたのであるか。此のことは貯金の歴史を見る上に興味あることである。太古日本ではまだ經濟上の問題の現はれてゐなかつたと思はれてゐた時分に、支那の方ではどのやうな文明の曙光を放つてゐたか、その頃の支那人は經濟的にどんな活動をしてゐたか。すべて賣り買ひのことなり貸借のことなり、賃銀のことなり、商況のことなり、資本のことなり、委任、依頼のことなりは立派に行はれてゐたやうであるが、此のやうな經濟生活の方面のことがいかに行はれてゐたかと云ふことを見るのは中々面白いことで又歴史その他の學問の立場から考へて見ても有益なことであると信ずる。左に先づ古の支那人が貯へてゐた貨幣は何であつたかと云ふことから述べて見よう。

## 六十一 支那では上古貝を貯へてゐたこと

今日貯金といふ考は、かねを溜めると云ふことにきまつてゐるが、古の支那の社會では貝が

支那上代の貨幣と裝飾用具



經濟上は勿論家庭においても社交上に於いても餘程貴重なものと思われ、従つて貯金の意味で貯へてゐたものも之を溜めてゐたのである。日本でも古は後世のやうではなく今日よりも比較的澤山の貝が各種の方面に使用せられてゐたものである。その名残りは現に貝塚といつて古の貝捨て場の迹として考へられるものが澤山遺つてゐるので了解せられる支那でも同じことで昔は山東省邊に貝州と云ふ州がおかれてあつたことがあり、又古く周代の頃は貝丘と云ふ地名のあつたことも左傳のうちに見えてゐる位で、これから想像すると、貝塚式のもものが海岸に近い地方には所々に散在してゐたらしい形迹がある。又實際貝を色々の方面に使用してゐたことは事實として考へられるのである。但しその貝にも種類がある。その貯金の目的に使用せられてゐた貝は一定のきれいな寶貝であつて、普通扁平な形をした雜物ではなかつたらしい。

支那の古の貯金の貝は日本で云ふ所の子安貝(こやすがひ)一に又(たからがひ)といふもので西洋では之をカオリ・セルと謂つてゐるものである。これはよほど支那人の氣に入つた貝であつたと見える。左にその圖を示して見よう。これは日本の海濱に随分たくさん見出される。

一、貯の字



支那の古に貯  
へられたる有  
名な貝



子安貝一名た  
からがひ(寶  
貝)を示す

二、貝の字



文字の上に見  
えてゐる形



貯蓄されたる  
貝の圖

現に滿洲關東州あたりの古墳から掘り出されたものや、また古い時代の文字の上などにもたくさんに見えてゐる。その貯藏用の貝の形と大きの點を注意して見ると、全く茲に對照して示せるやうなものであつて、あまり大きいものではない。大概七八分位のものである。日本にては貨物として随分大きなものがある。中には二寸以上に達するものもあるが、支那ではその古代のものとして發掘されたものから云つても或は又その模造されたものから云つても大きは七八分以上に大きいものは未だ見出されない。此の子安貝を貴重なものとして貯藏してゐたといふことは、貯と云ふ文字の出來かたを見ると一番手とり早く判るのである。即ち貯の字のうちに貝の字の含まれてゐるものは貝が蓄積せられてゐたことを了解せしむるものであるが、但し



貯の字の片方に付いてゐる四角形のもは何物を意味してゐるか判らないのである。唯此の文

貯貯貯貯貯

貯と云ふ文字の構造を示せる最初の形(貝を藏す)

字によつてその溜めてゐたものが貝でその溜める

ことを稱してチヨ(貯)といつてゐたと云ふことだけは云へるのである。次に然らば古代の支那には何故貝を貯めることをしてゐたか。これには深い譯がある。

### 六十二 古代に貝を貯へてゐた理由

支那の古に貝を貯へてゐた理は色々の方面から昔その貝が貴ばれてゐたと云ふ事實がある爲め其れによつて證明せられるのである。その證明は文字の方面からも出来る。また遺物の方面からも出来るのである。然しこゝに最も判り易く且又最も面白くて學術上價值のある材料から之を證明するとすれば、文字の方面から入るのがその條件に合ふのである。

その一 貝は貴ばれてゐたもの

文字の上で貝が貴ばれてゐた事實を證明してゐるものは甚だ多い。第一に貴の字其のものは

貝の上に跨つてゐる所の人を表はしてゐる字であつて、此の字は富者が貝をたくさん貯蓄してゐることを寓意させてゐる文字である。これによると貴の貝そのものが貴重なものであつてその貴重なるものを所有し貯藏してゐることの合意が示されてゐるのである。而して貝の貴いことは色々の側に現はれてゐるが文字の上に之を頸飾りとして用ひられてゐたことを表示してゐるものゝある一事に依つても略想像がつく。今日では使用せられなくなつた古字であるが上古にその意味で出来てゐた文字がある。それは左に示す子の字である。此は子の字の異體として見る



子の貝を飾れるを示す文字今之を傳ふる文字は朋の字也

方が適當であるかも知れぬ。即ちこゝに示せる文字は現にも述べたとほり天の字と貝

の頸飾りとの會意で出来た文字である。天とは天地の天の字のことであるが、宇宙の意味ではない。唯、人の正面向きを寫した文字に過ぎぬ。あたまたの頂巔の部分を注意點として之をテンと云ふまである。そして此の人の繪に文字に持つて行つてその頸のところには貝の珠數をかけたのが此の古文字である。その頸飾りの掛けられた所の書方は頗る幼稚な表はしかたであるが、文字はもと略畫の如きものであるから、かやうにだらしもなく左右兩肩に之を虹形に書



き加へてゐるのである。表はしかたは幼稚であつても之によつて貝が裝飾用として重んぜられてゐることがわかる。貝の珠数はなほ患の字の上半の串であることが判るのである。



(繪としての串の字の古形)

實の字の中央母であるとか云ふものゝ古形を見ても解る通り、子安貝又は之に頗る似てゐたものを糸で貫いて連鎖としてゐたものである。貫の字の上半ももと貝の珠数を示しゐるものである。又「實」の字を見るに此の文字は又面白い。即ちその構造に於て母冠の下に貫と云ふ字の含まれて居ると云ふことは意味の深いことである。先づ實の字のつはもと

↑  
と書かれ

てゐたもので寶庫の建物と云ふ意味のある字である。然るに實の字の下半は貴重な貝の串、貝の珠數で充實されてゐたものと解釋せられる字であるから古人の貝を溜めるといふ考への根柢のよほど深いことが見られる。貴いものであつたから溜めるのである。貴の字や實の字に貯の字が含まれてゐると同じわけで貯の字中にある貝の字もその意味で解釋せらるべきものである。

る。

附記

貯金のことに少し縁遠くはなるが古、貝の頸飾りの行はれてゐたことを證明せる文字に嬰の字がある。こは後世の纓絡の纓の字の旁りになつてゐる字である。この嬰は貝二つと横向きの人との合字であつて前に述べた人の象形に貝飾を加へた文字にあつてゐるものである。つまり嬰は此れと同字にしてその形は違ふのである。嬰の下半の女と云ふ字は今日は何の象形とも判らぬがもとは人の姿を示したもので人の横向きに座つてゐる形を現はしてゐる字である。貝

貝の頸飾をかけた人の象  
を飾れる古い文字は茲に示したやうなもので

今この嬰の字の古字に當る  
ある。



荀子といふ二千數百年前の古書によつて見ると當時處女は頸に寶玉の珠数を頸飾としてつけてゐたと云ふ風習が見えてゐるが、文字の出來た時代はもつと千年もそれ以上も古いのであるから字に見えた所の所の飾はよほど前の古俗と考へられる。尤も文字の上で貝は數個しか見えてゐないが現今フリッピン土人の頸飾の如きものを見ると子安貝を幾十となく紐で連続して

支那上代の貨幣と裝飾用具



ゐる。支那の昔もそれであつたと見られる。嬰の字や申の字などはそのうちの二つ丈けを残し他を省略して了つたものと解せられる。

兎に角、貝は上古身の廻りの飾として使用せられてゐた位に貴重な品物であつた。この事實は貝を貯へると云ふ考への一因となつたのである。

#### その二 貝は貨幣として使用せられてゐた

今日物を數へるときに貝と云ふことを云ふ、會員の一貝と云つたり全員舉つてなどと云ふ貝がそれである。貝と云ふことを文字の方から云ふとまる〇と貝とで出来てゐる字であつてこれは物を數ふるとき〇でしるしをしたり貝で數へてゐたりしたことがあつた故此の字が出来てゐるのである。然るに此の貝と云ふ文字は魚介の貝と云ふ義ではなく貨幣の意味である。錢としての貝と云ふことである。これには色々の證據がある。貝が貴ばれたり又飾りとせられたりするものもその爲めである。今でも在邦の支那人は二十圓の金貨を時計に附けて飾りとして吊げてゐるものがある。金貨に輪をかけてそれに鎖を甘くつけてゐる。此の金錢をかざりにする考は古は貝で現はれてゐるのであるから今も昔も變らないのである。

さて物を數へる時に古は貝を代表的のものゝ如くに見て貝の字中に之を入れてゐると云ふ事は偶然な事でない。日本のかねの名の圓の字に貝の字の含まれてゐるのはインとかエンとか云ふ音を表はしたしるしであつて、直接支那の貝の考から來てゐる文字では勿論ない。しかしその貝の字中に貝の含まれてゐるのは、その貨幣としての用途のあつた事を證明してゐるものである。支那上古の社會に貝を貨幣として使用してゐたことは種々の方面から窺はれる。財貨として貝の適當して居たことは、(一)その子安貝の性質の美しくて感じのよろしい點に於いて、(二)その物の珍らしくして陸上では多く得られない點に於いて、(三)裝飾、儀式其他の用途の上でひどく貴ばれてゐたと云ふ點に於いて之を貨幣に用ひてゐたものである。支那で秦の始皇帝當時、圓形の孔錢が用ひられるに至つたが其の前には貝が或る價の貨幣として通用されてゐたものらしい。周とか周以前とかの時代には之が錢として刀布(刀の形した青銅製の錢)だの又泉(農具の形した青銅製の)錢だのと云ふやうなものと思はれる。刀布、泉に比べて貝がいくらに兌換される相場であつたか判然してゐないが、兎に角古く貨幣であつた事は争はれぬ。それにはたくさん證據がある。その證據は書物の上にも見られるがい



ま文字だけの上から證據を採つて之を左に説明して見よう。

### 六十三 貝が貨幣であつた證據

貝といふても眞の貝が貨幣として使用せられてゐたこともあるであらうが又傳ふる所によると蟻鼻錢と云つて銅製の貝の形したものがあつた。思ふに錢として使はれてゐたものであるか。今日でも金銀の貨幣の外に白銅錢の併用のあるように小錢として蟻鼻錢が行はれてゐたものかも知れぬ。兎に角それが貝の形に造られてゐることは注意すべきことである。すべて支那の古に貝が錢として使用せられてゐたと云ふことは次の五方面から窺はれる。

- 一、賣買取引に關した文字の上に現はれてゐること
- 二、資産を示す方面の文字の上に現はれてゐること
- 三、贈與品を示す文字の上に現はれてゐること
- 四、税を示す文字の上に現はれてゐること
- 五、罪をあがなふ意味を示す文字の上に現はれてゐること

これらの諸方面の文字によつてこれを推定することが出来るのである。

#### その一 賣買取引上の貝

いま貝に目をつけて賣買取引に關係した文字を検て見ると頗る明白な觀察が出来る。第一に古物を購入するに支拂つてゐたものは貝である。購買の兩字を始め費の字に貝が入つてゐれば、販買の二字にも貝が這入つてゐる。あきなひの上には貝が大事なものとなつてゐるのである。更に詳細に互つて文字をあさつて見るに、すべて貿易上のごときは買の字を始め利益のあつた時の贏(得ること)の字、また頼(儲けるの義)の字また販(にぎやか)の字など、又損失の字或は貶(損失)の字などにも貝がある。かやうに悉く貝が入つてゐる。又商の字の古字の贗にも貝があれば買の字にも貝がある。其れ故あきなひ取引にはプラスのときもマイナスの時にも貝で勘定をせられてゐたことがあるのである。なほ貸借關係のときであつても同様で、貸の字、貰(かす)の字、除(音はシヤ、意味は貸す)の字の如き、また催促する意味の責(求む)の字であるとか負債の負の字或は貸(音トク、意味は求む)の字などであつても貸借の對象物は貝そのものであつたのである。その外、物をやとぶときの賃(もと雇ふ義)の字を見ても又贅(もと買入れ



の義)の字を見ても貝錢の意味で用ひられてゐたことが明白に見えてゐる。また上古盛に行はれてゐた占ト(うらなひ)にかけて物を判じて貰ふと云ふとき其のトひを問ひたづねるには先づ貝を支拂つてゐた。その爲めにト問の義の「貞」(トと貝との合字)の字には貝が入つてゐるのである。貝を持參して行つてうらなひしてもらふ義である。今日ならば包み金を持つて行くのである。ト人に向つて貝を差出してゐたといふことは假令その貝が錢の意味でなかつたとしても兎も角その御禮に貝を差出すことが當時雙方によほど調法なものであつたことが判定せられる。それゆゑ賭博の如きものでも貝を得ることが目的であつたと見えて貝を用ひてゐる。賭の字はあまり古いところには見付からない字であるけれどもこれは後の「錢戲」の先驅をなしてゐた遊びであつて貝で博奕をしてゐたことを想像するに難くないのである。これらの諸例に見えた商賣や勝負ごとの貝の文字の構造は一つとして貝に因んでゐないものはない。貝が上代の貨幣であつたであらうと云ふ考へは之に據つて略斷定を下す事が出来るのである。

#### その二 資産貴賤に關する貝

資金の資の字は貝に從つて出來てゐる。これは貝の多少によつて貴賤の別が出來てゐたことを

證明せるものである。又貴は貝を十分に持つ人、賤はそれの乏しい人を指す。これは猶ほ貧(むさぼる)の字が貝を望むことを示し貧(分と貝)の字が貝を分けると云ふ事で貧乏の意味を示してゐるやうなわけであつて、貝の多少が古貧富の別を示してゐた事になる。そのわけは貝その

寶の字の古形

ものが、その當時の財貨財寶であつた事實にもとづいて

家の中に玉と

ゐるのである。上古の家のためと云ふものは文字上で

缶と貝

は家の中に藏せられた玉と缶(炊事道具)と貝とである。



その古形は茲に示すやうなものである。

貝が寶の一つとなつてゐるのは他の玉だの缶だのと云ふものとは用途が違ふ。玉は飾りであつて缶は日常生活に必要な家具である。而して之に加へて貨幣としての貝を有してゐると云ふことであれば物は十分である。しかしこの場合の貝は貨幣の義と見るよりも財貨の義と見る方が面白い。財の字、貨の字などの中の貝は此の意味を示してゐるものである。また今賢の字を取つて考へて見るに、こはもと賢者と云ふものは財寶を持つてゐる人と云ふ考へである。物持ちでなくては賢者と云はれなかつたのである。それは賢の字の要素が貝と又(持つ義)と臣(人)



との三着で出来てゐるので判る。そして賢の上半の取はその音符にもなつてゐるのである。その他資産の増すの意味の貳の字に貝の含まれてゐるのも財貨の義に本づくものと見られる。本問題の中心となる貯の字の如きも此の資産に關係あるものとしてその構造を解くときは興味が多い。

貝の本来の用途が貨幣の意味であつてもこれがかやうに財産とか資産とか云ふことに用ひられるのは怪しむに足りないのである。これはカネそのものが貨幣の義であつて同時にカネモチと云へば資産家の義となると同じわけである。唯貨幣としての貝は單數の意味で財産と云ふときには複數と云ふ位の考はあるかも知れぬ。それにしても字面の上には必ずしもそのやうな區別は立つてゐないのである。字面の上で貝の字の多く這入つてゐる字は「實」の字ぐらゐである。その貝のさしぐし(申)となつてゐるものをたくさん藏してゐる義であると云ふとは既に述べた通りである。又貝の數の多い方から云ふと最負(ヒイキ)の最(もと)の音はなし)の字があるが、これはもどく、力瘤を入れるといふ意味の字であつて別段財産には關係のない字である。古い時代にはまたこの字はなかつたのであるからこゝに問題とすることは出来ないのである。

る。

### その三 贈與に關する貝

贈與の方面で用ひられてゐる貝は、常に必ずしも貨幣として用ひられてゐるばかりでなく時には餞別のためとか土産のためとか云ふ位のかるい意味のものもある。しかし支那人の特色を甘く發揮してゐる賄賂の方面に此の貝の現はれてゐるところから云ふ時は、決して貝は別の贄物ぐらゐの軽いものとして考へられなくなるのである。

むかし周の世には諸侯の間に慶喜のことがあつた時、そのよるこびに手土産として持つて行つたものは鹿の皮であつた。鹿の皮を用ひるのが禮であつた。文字の方で云つて見ると慶の字が鹿の字を含んでゐるのは此の爲めである。然るに外の文字をみて見ると例へば賀の字であるとか、贄の字であるとか云ふ文字には貝を含んでゐる。その他一般の場合のおくりものを示す文字、贈とか、賚とか、賚とか、賚とかこれらの文字はすべて貝を示してゐる。して見ると貝が贈物につかはれてゐたことは之によつて證することが出来る。又面會のときに贈呈するものを見てもまた同じく貝が使はれてゐた。このことは賓とか贄(まみゆる)とかの文字にこれが存



してゐるので判る。また、はなむけをやる時の贖の字に貝が含まれてゐたり、下賜の字その他賞の字などにも此れがある。こは全く賞與をなすとき外の品物でなく貝を主として用ひてゐたことを證明してゐるのである。賄賂の二文字に至つては最も赤裸々に之が現はれてゐる。事實の真相は裏面の方面に行はれてゐる慣用の手段に却つて窺はれるものであるから貝が後世のかね、又はかねの代用としてゐたものであると云ふことは考へられるのである。贈與の方面に現はれたる貝の字はかくの如きものを以つて主となすのである。

#### その四 税貢に關する貝

上古税を納める時には何を用ひてゐたか。これを文字の上から考へて見ると禾稻と貝との二種類が數へられる。禾は稻束である。貝は無論子安貝であつたであらうがその納付するときの形はどんな體裁にしたものか判らない。しかし貢の字だの賦の字だの云ふものに貝が明白に入つてゐるからよほど古い時代に既に貝で納税してゐたことがあつたであらうと思はれる。これに就いて山東地方のやうな比較的海岸に近いところの民は貝を得る所の便宜も多かつたであらうが奥の方はどのやうにしてゐたか、或は奥の方では稻の方が主で東部地方では貝が主であつ

たものかも知れぬ。それとも貢といふものはもと／＼東部地方で行はれてゐた語で、その造字も山東省あたりで上古出來たものかも知れぬ。その邊のとはわからぬが、兎も角、税金に貝を用ひてゐたと云ふ事文は文字の方から云へるのである。

#### その五 罪をあがなふ場合の貝

また貝は刑法の方面にも現はれてゐる。例へば罪に處せられんとするとき其の罪をかねで買つて罪を免れると云ふやうな場合に貝を拂ふのである。それを文字の上で見ると贖(しよく)の字であるとか贖(音シ、小罪をあがなふ)の字であるとか云ふものがそれに當る。或は又賊の字のやうに貝を取ることからその盜人の意の出來てゐるやうなことがある。或は贖(音カイ、かたきをうつ)の字のやうに死の字と貝の字とから出來てゐて貝を以て死に報ゆるといふ考を現はしてゐるものである。かねの力でかたきを取らうとする意味と見える。

支那人の思想として死をかねで代償すると云ふやうな考は普通最も多くあることである。時にはかね財寶をまき上げんが爲め死の宣告を理由なしに下すこともある位であるから、下人民に在つても上古貝を以て死にあたる罪を代償する位のことにはありがちなことである。今日馬賊



が家の主人を奪ひ去るときに當つても若しかねを出しさへすれば主人の生命は助かると云ふことがある。かやうにして貝の威力と云ふものは非常なものであつたのである。これ等によつて考へて見ると貝の用途はたしかに貨幣の義であることは明瞭である。

吾人は五方面に分けて、貝が上古如何に字面のうちに編み込まれてゐるか、又その各々その用ひらるゝ場合々の意味がどう云ふ意味であるかを觀察して見たのである。これらは勿論主要なる場合を挙げたものである。この外に尙儀式禮法の方面に例へば死人の口中に貝を飯せしむといつて身分によつてその死體を棺に入れるときに貝を一定の數だけ口に含ませることをするとか又葬歛のとき柩の蓋飾に貝をこれも身分によつて一定の數だけ附けると云ふやうなことがある。かやうな方面のことをしらべると色々あるがこゝに文字の上に現はれてゐないものは採らないのである。文字の構造の上ばかりから見た貝をとつてその比較研究又は解剖の上から歸納し得るものを探つて述べたのである。

又上に述べたものゝ外に「質」の字がある。これは贄物として用ひられた貝を示すことが主たる意味であるらしいが、なぜその文字が二つの斤(斧)と貝とで成立つてゐるかその邊の理由

のわからぬものもある。これら不明の點のある文字もかなりあるのであるがそれらは暫く預つておくことゝして比較的わかり易いもののみを探つて上に説明したものである。

#### 六十四 上代に於ける貝の二大用途

貝が貨幣であつたと云ふ證據をかやうに五つの方面に分けて云つて見ると兎に角文字上では略その事實をきめることが出来ると思ふ。即ち賣買取引、貸借のときの交換標準となり資産財實の主たるものとなり贈與賄賂の對稱物となり税金となり贖罪のかねとなると云ふやうなことは貝が實用のものとして當時最も調法な便利なものであつたことが證明せられるのである。貝は古代に於いて實用上大切であつたばかりでなくまた裝飾用としても至極大事なものであつた。この事は既に嬰の字のところでも述べた通りである。實用裝飾の二大用途は上古の支那人が貝を貴く見てゐた最も重要な點である。

貝の外、古代の支那人がその貴重のものとして考へてゐたものには玉がある。玉に對する彼等の趣味と云ふものは到底他國人の想像もつかぬほどである。これは甘肅省の西方に當つて古より



和填と云ふ地があつてそこは玉の名産地である。その邊から玉の輸入せられるによつて支那人は玉の智識を早くから有つてゐた。そして非常に之を愛してゐた。現に今でも支那では玉は非常に好かれ愛玩せられてゐる。上代に於いても同じことがあつたのである。しかし玉は貝と違ひ古來未だ貨幣として用ひられることもなければ税金として納めると云ふこともなかつた。併し財寶になつたり贈物になつたりすることはあつた。また裝飾にもなつてゐた。けれ共玉は肝腎な實用の目的物とはならなかつた。第一數が貝のやうに多くないこと、第二形が貝(子安貝)のやうにまとまりがよくないこと。第三貝は細工しなくともよろしいが玉はそんなわけに行かぬこと。かやうな色々のわけから玉は貨幣のやうな調法なものにはならないのである。貝はその點に於いては玉に數等優つてゐる。また貝は貯藏する目的から云つても玉よりも都合がよろしい。玉を溜めるなど云ふことは上流の社會でなくてはむづかしいことである。

取引上のことや納税の上のことや其の他色々經濟上の方面から考へて見て今日の所謂貨幣と云ふものは貝であつたのであるから之を貯蓄すると云ふことは當時の貯金思想として最も適切な考へであり、又その頃の社會の人情としても之を溜めることが普通のことであつたと思はれる。

子安貝が貨幣として使用せられてゐるのは支那ばかりでない。阿非利加中央部コンゴ國その他に行はれてゐる貨幣も此の貝である。而かもその子安貝は小形のものである。支那の貝貨も小形の物であつてそは貨の字が示してゐる。こはもと、たくさんの貝の擦れ合ふときに聞える音の意味である。サの音はその音を示したものである。珠數なりに作れるもの又は個々に離れてゐるもの、何れにもせよその音を示した意味に用ひられてゐる字であるが、之を小さい貝といふ風に見て小形の子安貝に解することも出来るのである。而して之に玉扁を加へるときは玉の連環の意味の瑣の字が出来る。瑣は普通に知られてゐる字であるが貨の方はあまり知られてゐない。知られない方の文字に却つて古の文明を告げてゐる材料となつてゐるものは獨りこの字だけではない。が自分はこの貨の字を貨幣に關係のある字と見るのである。

上述、貝の字の研究によつて吾人は支那人の貯金思想の最初が貝そのものを溜めると云ふことから起つてゐることを歸納し得るのである。そしてその貝といふは子安貝のことであるが、そのうちでも小さなものを指し、それが裝飾用としては玉と並び行はれ、實用上では貨幣として